
『僕のアスカ。太陽のような君。』 & 『軌跡の戦士エヴァンゲリオン』セット

朝陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『僕のアスカ。太陽のような君。』 & 『軌跡の戦士エヴァンゲリオン』セット

【Zコード】

N1124

【作者名】

朝陽

【あらすじ】

第十一使徒レリエルとの戦いで、勝負を焦ったアスカはレリエルの本体部分であつた黒い影に式号機ごと飲み込まれてしまふ。シンジもアスカを助けるために初号機で駆け付けたが、同じように飲み込まれてしまい、さらに脱出は不可能だった。

そして、使徒レリエルの体内は異次元空間に通じていたのだ。シンジとアスカの二人がたどり着いたのは剣と魔法の力が支配する不思議な世界。

湖の真ん中に居た二人は遊撃士のカシウス・ブライトに拾われ、ブライト家の家族として扱われる。

ブライト家では自分達に似ている姿と年頃の一人、ヨシュアとエステルと出会い。

後にリベル王国史に残るダブルバカップルの英雄伝説が幕を開けたのだつた。

以前に他のエヴァンゲリオン小説サイトに投稿させて頂いた当時のタイトルに戻させて頂きました。告知と謝罪については連載中の注意書きをご覧下さいませ。

こちらの2つの作品は2009～2010年に他の投稿サイトに投稿していたのですが、諸事情により投稿サイトの管理人様に事情を話してこちらで掲載させて頂く事になりました。

第零話 ハヴァンゲリオン、消滅（前書き）

あたし＝エスティル視点 アタシ＝アスカ視点 僕＝ヨシュア視点
ボク＝シンジ視点
四人も主人公格が居てややこしいことこの上ないですが、ご了承ください。

第零話 エヴァンゲリオン、消滅

『第三新東京市』

突如、市街地の中心部に現れた空に浮かぶ巨大な白黒縞模様の球体。ネルフの作戦部は使徒と断定し、エヴァンゲリオン初号機、式号機、零号機の三機による迎撃を決定した。

迎撃作戦の内容は、先日のシンクロテストで一番の好成績を残したシンジの乗る初号機が最初に攻撃し、零号機と式号機は後方で待機して様子を見るというものだった。

ネルフの作戦部長である葛城ミサトがシンジにライフルによる遠距離からの攻撃の指示を下そうとする直前、アスカの乗る式号機が初号機の前をさえぎり、使徒の元に突撃した。

ナンバー1号機のエヴァパイロットはアタシなの！
バカシンジなんかじゃないわ！

あの使徒をアタシが倒せばミサトもアタシがナンバー1号機だと認め
るはずよ！

『アスカ、あなたはバツクアップのはずよ、戻りなさい！』

ミサトの怒号が通信スピーカーから聞こえたけど、アタシは無視した。

アタシは兵装ビルに用意されていたスマッシュ・ホーク（斧状の武器）を手に取ると、使徒の本体だと思った黒い球体を斬り裂くために駆けだした。

すると突然、足元が沈み込んで行く感覚がした。

足元を見ると黒い影が周囲の兵装ビルと共にアタシの式号機を飲み込んで行くのが見えた。

「ちょ、ちょっと、コレ、どうなつてんのよー…？」

アタシはそう叫びながら、あがくようじに右腕を頭上に突き出していた。

シンジがマグマの底に沈むアタシを引き上げてくれたときのように。後で思えば、アタシはシンジが助けてくれる事を心の奥底で願っていたのかもしれない……。

ボクは出現した使徒が何もしてこないまま、にらみ合いがしばらく続いたので、緊張の糸が切れそうになるのを抑えていた。
すると、突然大きな足音が聞こえて式号機が目の前を駆けて行つたんだ。

アスカの命令は待機のはず。

アスカが命令違反をするなんて！

ボクはそこまでアスカを追いつめていたのか、とショックを受けて、式号機が使徒に接近するまで見ているだけだった。

目の前で式号機は黒い影に沈みこんでいく。

通信スピーカーから聞こえるアスカの戸惑った声に気がついて、ボクは式号機の居る場所に全力で走つた。

ケーブルから式号機を引き上げて助ける事は考えられなかった。だって、あのマグマに沈み込むアスカを助けたように、直接この手でアスカの手をとつて助けたいとおもつたからだ。

よし、掴んだ！

ボクは式号機の手首をつかむ事に成功した。

でも悪い事に黒い影は広がって、ボクの乗る初号機の足元まで來た

んだ。

『シンジ君ー式号機を離して撤退しなさいーあなたまで巻き込まれるわー』

通信スピーカーから聞こえるミサトさんの命令。でもボクは絶対に離さない、アスカを見捨てるなんてできないよー。ボクは式号機の腕をつかむ手に力を込めて、式号機を抱き上げるように引き寄せた。

その時ボクの視界は式号機以外ほとんど黒く染まっていた。

落下していく中、何かに強く腕を掴まれる感覚に、アタシは頭上を見上げた。

アタシの視線の先には式号機の腕を掴む初号機の姿が見えた。シンジ、また助けに来てくれたんだ。

アタシは感激のあまり、目に涙を浮かべた。

『シンジ君ー式号機を離して撤退しなさいーあなたまで巻き込まれるわー』

通信スピーカーからミサトの声が聞こえた時、またアタシの心に絶望が広がった。

でも、シンジは、アタシを見捨てなかつた。

初号機はさらにアタシの乗る式号機を引き寄せ、黒い影の中で式号機を抱きしめてくれた。

アタシはなんだか直接シンジに抱きしめられている感覚が感じられて、とても暖かかった。

アタシは初号機に抱きしめられながら、黒い空間を落ちていく感覚

を味わっていた。

しばらくすると、眩しい光と共に白い空間に包まれた。そして、青い空間が広がる。

アタシは上空数百メートルの空間にいるのに気がついた。式号機の脚が着水する衝撃を感じる。

アタシの式号機と、抱きついた形の初号機は、胸のところまで水に沈み込んだところで安定していた。内部電源がカラになつて、全くエヴァは動かせない。

アタシは仕方がないので、エントリープラグから降りる事にした。どうやら初号機のエントリープラグもイジェクトされたようだ。

シンジものそのそと初号機から出てきた。

アタシはシンジが助けに来てくれて嬉しいと正直に言えず、不貞腐れたような顔でシンジに文句を言つてしまつた。

「な、なんで余計な事するのよ……」「「「」、「めん……」」

シンジはいつもと同じように、怒ったアタシに対して謝つた。お互いの心が落ち着いた後、アタシとシンジはエヴァの肩の上にたつて、周りを見回す。

透き通るような青い空、周囲に広がる緑の山々。しかし、日々に高層ビルのような建物は見当たらぬ。

「湖のようだけど、芦ノ湖、じゃあないわよね……？」

とても大きな湖で、岸から数キロ離れているから、泳いで岸に渡るのは無理そうだ。

諦めたアタシたちは、黙つて座り込んで湖を眺めていた。

ボクは大きな水音が「ぢゅぢゅ」に近づいてくるのに気がついた。

水音がした方向を見ると、一隻の木製のボートがエンジン音を立て、高速で近づいてくる。

そのボートの舳先には中年のおじさんが乗っていて、手には長い棒を握っている。

もっと驚いたのはその服装だった。

何かの映画に出てくる、昔のヨーロッパっぽい服を着ている。

「湖の側で釣りをして居たら、大きな波が立って、何事かと思って様子を見に来れれば……」

そのおじさんはボートから降りて、エヴァの肩に乗ると、独り言をいいながらボクたちに近づいてきた。

隣に居るアスカが怯えた様子でキュウッとボクの手を握る。ボクはアスカを守るよつに立ちはだかって声をかけた。

「誰ですか、あなたは」

そのおじさんは宥めるように、手をブラブラさせて、軽い調子でこう言った。

「やれやれ、そんなに警戒しないでくれよ。俺はカシウス・ブライト。遊撃士だ」

「「何よ（ですか）遊撃士つて？」」

ボクとアスカは合わせてそう答える。

言ってカシウスと名乗ったおじさんは首をかしげて、頭を丸くした。

「遊撃士を知らないのか？」

カシウスさんは考え込みながら初号機と弐号機の顔を見つめながらボク達にまた質問をする。

「Jの湖に落ちて来たデカ物は君達のものか？」
「……」

ボク達はカシウスさんに即答できなかつた。

「取り合えず、地域の平和と民間人の保護つて事で君達を連れていく。まあ、ついてこい」

と言つてカシウスはウインクする。

突然ついて来いつて言われてもわからないよ……。
せめてアスカだけでも守らないと。

ボクはカシウスさんと見つめあつたまま、動けないでいた。

「時間が無いんだ。すまんな。」

カシウスさんは、そう咳くと素早い動きで、聞合いを詰めると、持つていた棒でボクとアスカの急所に一撃を加えた。

ボクは体中がしびれて動かなくなつて、立つて居られなくなつてしまつた。

アスカも同じようだつた。

カシウスさんは、ボクたち二人をかついでボートに乗せた。

「エッチ、バカ、変態……」

アスカは弱々しい声で反論したけど、カシウスさんは聞く耳持たず、

ボクたちのプラグースーツを隠すように毛布をかぶせた。

ボートが発進すると、カシウスさんは穏やかな声で話しかけてくれた。

「すまなかつたな。あのままあそこに居たらお前たち、不審者として王国の警備艇に捕まつて牢屋行きだつたぞ。あの湖に不時着した巨大な兵器に関係してるんだろ?」

やつと、苦痛が治まつてきたボクは身を起してカシウスさんに問いかける。

「あの、カシウス、さん……王国とかわけがわからないんですけど、これからボクたちどうなるんですか?」

「そうだな、とりあえず、ほとばりが冷めるまで俺の家に居てもらうことになるな。」

カシウスさんは少しだけ考える仕草をしてそう答えた。

「何ですって!? アタシたちはエヴァンゲリオンのパイロットなんだから、ネルフに帰らないといけないのよー」

体の調子が回復したアスカが、身を乗り出しつつ、カシウスさんに怒鳴つた。

ボクたちはエヴァのパイロットとして使徒と戦わなければならない。アスカの言つ事は当然だ。

「……ネルフ? 聞いたことが無いな。お前たち、帰る方法はあるのか?」

カシウスさんはネルフを知らないようだ。

世界中に支部があり、超法規的組織として存在しているネルフを知らないなんて考えられない。

「……アタシ、ミサトの命令に違反して式号機と初号機をダメにしちゃったんだ、ネルフには帰れないんだつた。」

アスカが自嘲気味にそう呟いた。

そうだ、一番傷ついているのはアスカなんだ。
ネルフに戻つてもアスカは傷つくんだ。

……でも、ミサトさんも許せない。

アスカを見捨てろだなんて。

ボクはそういう命令を出したネルフにはもう戻りたくないと思った。
アスカをこれ以上ネルフに居させたら心が壊れてしまう、連れ出して逃げるなら今しかない。

前向きにエヴァから逃げ出すのはこれで最初で最後だ。

そう決意したボクは、拳を握りしめてカシウスさんに告げる。

「ボクたちは一人とも、ネルフから脱け出します。もう帰るところはありません。」

アスカが驚いて息を飲む。

アスカはボクがまだネルフにパイロットとして認められているのになぜ、と思っているだろう。

この時ボクはまだアスカをずっと守るとは思っていなかつた、ただ逃げ出そうと思つただけ。

カシウスさんはその言葉を聞くと、ボクたちに同情するように大きくため息をついた。

「お前たちもヨシュアと同じように謎の結社とかに追われようになるのか、かわいそうにな」

この時ボクはカシウスさんの咳きの意味が全く分からず、頭をひねつた。

その後アタシたち三人は無言のままボートは岸に着いた。ボートがついた桟橋の近くには小さなペンションのような建物があった。

ああ、今日は疲れたわ。

エントリープラグの中で長い間じこに浸かっていたせいか体中がべトべトして気持ち悪い。

シャワー浴びたい。

と、思つたんだけど。

カシウスつておっさんはアタシたちの姿を見られるとますいから、すぐにつなから離れないといけない、と言つ。アタシたちはそのペンションから出て、近くにある古い石造りの塔、『琥珀の塔』にしばらく隠れる事にした。

塔の入り口からこつそり街道を眺めると、鎧を着た兵士たちがエヴアが落ちた場所へ向かっているのが見えた。

アタシたちは本当にタイムスリップしてしまつたの？

それとも別世界に飛ばされたの？

アタシは状況が理解できず、驚くしかなかつた。

アタシたちは塔の一階で一夜を明かす事になつた。

男一人と一緒に同じ部屋で寝るなんて！

アタシはまだ完全にカシウスつておっさんを信用してなかつた。

「ぐ、部屋が狭いんだから近くで寝るんだからね！ 勘違いしないでよー！」

「はつはつはつ、一人に間違いが起こらないように俺が見張つてお

いてやるから安心しの」

カシウスつておっさんのからか「声が聞こえる。

アタシはシンジから顔をそむけて横になつた。

疲れていたのか固い石畳の上だったのにすぐに寝てしまつた。

次の日の朝、カシウスつておっさんの話しかけてくる態度がさらに優しくなつた気がする。

昨日までは距離を置いて話しかけてきたのが、今田はまるで家族に接するように細かい事まで気を使つてくれる気がする。

まあ、『カシウスつておっさん』から『カシウスさん』に格上げしてあげてもいい。

昨日の夜何かあつたのかな？

そういうえば、カシウスさんに寝顔をしつかり見られたんだ、あー恥ずかしい。

そろそろ王國軍の警戒網も薄れてきたという事で、アタシたちは力シウスさんの家に向かう事になった。

でも、カシウスさんの姿も目撃されて、エヴァ 関係で注目されても困るので、街道ではなく獸道を進む事になった。

途中アタシたちは常識では考えられない、人を襲う大きな動物や巨大植物のようなものに遭遇した。

『魔獣』と呼ばれる怪物らしい。

武器も戦う力も無いアタシたちはカシウスさんに守つてもらうしかなかつた。

カシウスさんが信用できなかつたらシンジと一緒に逃げるつてことも考えたけど、これじゃあ諦めて一緒に行くしかない。

魔獣つていう異進化を遂げた生物がいるあたり、ここは地球じやないのかな、とアタシは考えていた。

アタシとシンジは、エヴァが不時着した《ボース地方》から、カシウスさんの家のある《ロレント地方》に着くまでの間、この世界の地理の事、歴史の事、電気に似た『導力』の事などをカシウスさん

に教えてもらつていた。

第三者視点 -

『ロレント郊外・ブライト家』

ロレントの市街から少し離れた森の空き地に、一軒だけ建つていて木造の一階建ての家。

カシウス・ブライトが十五年前に建てた家である。

この家の一階のダイニングキッチンで、一組の少年少女が夕食をとつていた。

一人は、黒髪で琥珀色の瞳を持つ少年、ヨシュア・ブライト（14歳）。

もう一人は、赤い髪とルビー色の瞳をもつ少女、エステル・ブライト（14歳）。

二人は11歳の時、カシウスがヨシュアを拾ってきてから一緒に家族として暮らしている。

あたしがヨシュアと一緒に夕食を食べていると、街道の方から家の方に向かつて人の話し声と足音が近づいてくる。

だんだん近くに聞こえてくる声の一つがカシウス父さんだとわかると、あたしは出迎えるために玄関に向かつた。

玄関の扉の向こうから、カシウス父さんの声が聞こえる。

「ここが俺の家だ。良い家だろ？？」

「ふーん、まあまあね」

その女の子の声は大きい声だったので、中に居るあたしとヨシュア

の一人にも聞き取ることができた。

あたしはその声に聞き覚えが無かった。

とにかく後で紹介しても「おひと」と思つて、ドアを開いて父さんのいる方を見た。

あたしの前には「一やー一やある父さんと、立つかずの少女と、伏し目がちにこっちを見る少年が居た。

あたしの事をみると父さんはいつ言い放つた。

「土産だ。」

そのセリフは、父さんが三ショアを三年前に家に連れてきた時と同じだった。

あたしは父さんを睨んであの時と同じセリフを一句違わず呴きつけてやつた。

「ビーウー事か、説明してもこましうか?..」

これがあたしの妹と弟となる、アスカとシンジとの出会いだった。

第一話 次女アスカ、次男シンジ

《リベル王国 ロレント郊外 ブライト家》

ボクとアスカは、カシウスさんの家のダイニングキッチンに迎え入れられた。

テーブルの上には、ほとんど食べ終わった食器が並んでる。

「わかった、わかった。これから説明するから、とりあえず夕食を作ってくれないか」

カシウスさんは、手を体の前に押し出して、家の中に居た女の子をなだめると、ボクとアスカに向かつて、ニヤリと笑つて、じつに笑つた。

「ここの家ではな、エステルが一番の古株なんだ。逆らうといの家に居られなくなるぞ」

エステルって言う女の子は、席に座つてここのやり取りを眺めていた黒髪の男の子に向かつて、声高らかに命令をする。

「じゃあ、コショア。料理よろしく~」「今日の当番はエステルだよ?」

コショアって言う男の子はそう言いながら呆れた顔をして、ツッコミを入れた。

「あたしは父さんの話を聞く義務があるのつー」

でも、エステルは腰に手を当てて、自信満々の顔で答えた。

するとヨシュアはため息をついて、ガタガタと席を立ちあがり、台所で料理を始めた。

ボクもアスカに押し切られて言つ事を聞いてしまつよな、とヨシュアに同情した。

「あたしはエステル。これから家族になるんだから、あんたたちの名前も教えてもらつわよ」

エステルは僕たちに明るい笑顔を向けてきた。

この子の笑顔も可愛い……でもアスカの笑顔も可愛いんだよな。サファイア色の瞳と金色の髪が日に映えてキラキラしていた。

この子の体はアスカよりスレンダーな感じだ。

脚も健康美つていうのにふさわしい。

でもアスカの方が胸、太もも、ふくらはぎがいい感じで……。

はつ、ボクは何をトウジたちみたいいやらしい想像しているんだ！？

でもアスカをボーアッシュュにした感じの似ている子なんだよね。ボクがエステルを眺めて、長い妄想をしている間にアスカが発言した。

何かにイラついているような声だつた。

「アタシはアスカ。こいつはバカシンジ」

「よろしく、アスカ、バカシンジ」

ボクの前でエステルとアスカは握手をしていた。

妄想から現実の世界に帰ってきたボクは慌てて叫ぶ。

「ボクの名前はシンジだよ！なんでアスカはいつもポンポンポンポンポン！」

「なによーつるむせこわねバカシンジ！」

ボクとアスカの口喧嘩が始まってしまった。

でもボクはすっかりアスカがいつもの調子に戻ったみたいで嬉しかった。

最近はボクを無敵のシンジ様などといって、憎んでいるように見えたから。

そして、カシウスさんたちの前で、アスカは猫を被つていない。年相応の態度をとっている。

距離を置いていない証拠だ。

もちろん、強気な態度は自分の弱さを隠すための演技ってところまでは、その時のボクにはまだ分からなかつたけど。

「あんたたち、いい加減にしなさいー！」

アタシたちの喧嘩は、エステルの叫びによつて中断された。
静まり返つた食卓に、ハンバーグのいい香りが漂つてくる。
ヨシュアがハンバーグを料理したみたいだ。

冷凍の肉に余裕があつたかららしいけど、何の肉かな？
魔獣とかじやなければいいんだけど。

カシウスさんに聞くと、アタシたちがいつも食べている牛と豚の合挽き肉だった。

安心して食べられる。

シンジのハンバーグに比べると手慣れた感じがするわね。
大きさも整つてるし、玉ねぎも適量みたいだし、焦げもないし……
でも何か物足りないな。

シンジは自分より端正のとれでいるハンバーグに氣落ちしているようだ。

「ヨシコアツて、料理がうまいんだね。ボクじゃあこんなに上手く作れないよ。今度教えてよ」

アタシはその言葉に危機感を覚えて、向こうの世界ではプライドが邪魔して言えなかつた事を言つてしまつた。

そう、心の叫び。

「アタシはシンジが作つてくれるハンバーグが好きよ！ そのままがいいんだからね！」

アタシはシンジの作るハンバーグに最初は文句を言つていた。
細かい注文を付けたりしていた。

いつしかシンジのハンバーグはアタシの専用の味のハンバーグになつていたんだ。

「アスカ、いつもみたいにまあまあ、じゃなくて美味しいって……
好きつていつてくれたの！？」

シンジは破顔一笑した。

その笑顔を見たアタシは、アタシは否定することなく、首を縦に振つて頷いてしまつていた。

アタシ、シンクロ率を抜かされた時から、シンジを見る度に嫌な気持ちになつっていたのに、またシンジと一緒にいると心地よい、昔の関係に戻つてゐる。

「あなた、シンジを今までビーガン扱いをしてたのよ。美味しいって言つてあげないなんて」

エステルがジトーフとした目でアタシを見る。

その後は他愛も無い話をしながら、夕食を食べ終わった。

ボクは夕食の後、解散となつたため、緊張をほぐすために庭に出てみることにした。

周り一面森に囲まれ、夜風が心地良い。

水音が聞こえたので行ってみると、裏の大池で釣りをしているエス

テルが居た。

「エステル、何をしてるの？」

「シンジか。夜釣りだよ」

ボクにそう答えたエステルの竿にアタリが来たようだ。
数分に渡るバトルの末、エステルの勝利。
大物が釣れたようだ。

「やつたー 見て見て」

満面の笑みでボクに魚を見せるエステル。

その笑顔を見たボクは、こう想像していた。

エステルの笑顔……輝いてる。まるで太陽みたいだ。
……アスカの笑顔も眩しかった。蒼い瞳が輝いて。
最近見てないな、アスカの笑顔。

また見たいな。

エステルは、延々と釣り上げた大物のすごいところをボクに喋つていたらしいけど、ボクは全然その話を聞かずに妄想の世界に入つていた。

それに気づいたエステルが膨れつ一面でボクの肩を突いた。

「シンジ、あたしの話を聞いてないでしょ。何を考えていたの？」

ボクは思つていた事をエステルに打ち明けよつと思つた。

「アスカの事なんだ。最近、アスカが落ち込んでいて、笑顔になつてくれなかつたんだ。原因はアスカのシンクロ率が落ちてるからなんだ」

「ふーん、シンクロなんとかはよくわからぬけどさ、なんでシンジはアスカの事が好きなの？あの子、いつもシンジをいじめる感じじゃない？」

エステルは釣りの手を休めて、ボクの話を聞いてくれていた。

「違うよ。アスカはボクを励ましてるんだ。でも、ボクはアス力を傷つけるだけで、笑顔にさせるなんて無理なんだ」

「諦めるんじゃないわよ！シンジが諦めたら終わりなんだから！諦めない限り大丈夫よ！」

エステルは力一杯落ち込んだボクを励ましてくれた。
まるでアスカが励ましてくれるみたいだ。

ボクはエステルにアスカの姿を重ねて見つめてしまった。

「シンジ？なによ、そんなにあたしを見つめちゃって！あはははは～っ！他の女の子だつたら、完全に誤解してるとこだつて。シンジつて、将来絶対、色恋沙汰で苦労するタイプよね。は～。お姉さん、心配になつてきちゃつた」

当のエステルも相当鈍いんじゃないだろうか、ヨシュアに同情するよ……と思つてしまふボクだった。
でもエステルの気持ちは伝わつて來た。

「うん、諦めないよ。」

ボクがエステルの瞳を見据えて返事をすると、エステルは満足げにうんうんと頷いて、また釣りを再開した。

アタシは慣れない環境で疲れがたまつたのか、夕食の席に座つたままテーブルに突つ伏して居眠りしていた。

気がつくとアタシの体には毛布が掛けられていた。

薄眼を開けると、ワインを静かに飲むカシウスさんと、ヨシュアが凄い深刻な顔で話している。

アタシが田を覚ました事には気づかないみたい。

「やつぱり、決意は変わらないのか？ エステルはお前が居なくなると悲しむぞ」

「うん。この家を離れる事になつても、エステルを守るなら仕方が無いよ。それが僕の誓いだから」

アタシはヨシュアのこの言葉が聞こえた時、カッとなつた。椅子から一気に起き上がってヨシュアの胸倉をつかんで問い詰めた。

「誓いつてビーカー事よー 離れるつてビーカー事よー」

カシウスさんとヨシュアは一瞬顔を歪めたけど、何でもないつすつとぼけた。

アタシの明晰な頭脳は真実に近い仮説を立てて、論理的思考で一人を追いつめる。

逃げようとした二人に、エステルにこの事をばらすと脅かしたらお

となしくなつた。

アタシはカシウスさんにヨシュアがした誓いの内容を聞き出した。ヨシュアはある秘密結社の暗殺者で、二年前にカシウスさんの命を狙つたが、返り討ちに遭い、家族として暮らすことになった。でも、結社の追手がヨシュアに迫つてきたり、迷惑をかけないため、エスティルを守るために姿を消すという誓いをその時したようだ。

「アンタ、バカアー！？ 女の子の気持ちを全くわかつて無いんだからー！ 見捨てられた方は凄い傷つくなよー！」

アタシはそう居ながら、ヨシュアに向回も平手打ちを喰らわしていた。

そして田に少し涙を浮かんできた。

「ヨシュアが迷惑つて言ひなら、アタシもこの家から出なくなりやいけないじゃないー！ もう嫌ー＝＝回田はー！」

アタシは、振り下ろした両手をグッと握りしめて、大声で喚いた。

「今までそんなに辛い別れを経験してきたのか、可哀想にな……」

そんなアタシの姿を見たカシウスさんの、優しく呟くような言葉に、アタシは下を向いて消え行くよつた細い声で答えた。

「うん、ママと、那次はアタシの保護者になつてくれたミサトアーテ人……」

カシウスさんはアタシの頭を優しくなでながら、ヨシュアの方に顔を向けて言つた。

「ヨシュア、俺たちは女性の心情には鈍かつたようだな。あの時の誓いを、撤回してもらつて？」

「うん、わかつたよ父さん。」

ヨシュアはカシウスさんを毅然とした表情で、しつかりと頷いていた。

もう、大丈夫。女の子を泣かせるなんて、許せないんだからね！

ブライト家には客間が無い。

さすがに放任主義のカシウスも14歳の多感な少年少女を同じ部屋で寝かせるわけにもいかず、シンジ・ヨシュアでヨシュアの部屋、アスカ・エステルでエステルの部屋の組み合わせで寝ることになった。

『エステルの部屋』

あたしはアスカにベッドを譲ることにした。
慣れない環境で疲れてるだらうじ。

アスカもアスカでベッドに寝ることを当然だと主張した。

あたしはなんて生意気な女だ、とムッとしたが初日から喧嘩はしない、とこらえたことにした。

あたしたちは無言でむつむつとしていたけど、じばらくする
とベッドの方からすすり泣く声が聞こえた。
あたしは急いでベッドに駆け寄つて行つた。
アスカは涙を流しながらあたしの方を見て謝る。

「エステル……起しちゃった？ 「ひむせくへじ」めんね……」

あたしはアスカを傲慢な女だと思つていたけど、それは誤解だと思った。
強がつていただけなんだと。

「アスカ、なにかあつたの？」

あたしがアスカに問いかけると、アスカは涙声でボソボソと話し始めた。

「うん、アタシ怖い夢をよく見る。ママが目の前で首を吊つて死んじやう夢。そしてパパも知らない女人と一緒にアタシを捨ててどつかにいつちやう。そしてアタシの側から誰も居なくなるの」

あたしは、母親が目の前で死ぬという言葉に驚いた。
アスカはあたしとそつくりだ。

まるであたしの分身だ。

あたしはアスカに自分の過去をさらけ出すことにした。

「あたしも目の前でお母さんがガレキの下敷きになつて死んじやつたんだ。あたしの身代わりになつて。あたしも自分が母さんを殺して思つて悩んだ時もあつた。」

目の前でアスカが驚いて息を飲むのがわかる。
たぶん、アスカもあたしと同じことを思つてるんだ。

「あたしは父さんが居てくれたからよかつたけど、アスカはずつと寂しかつたんだね？」

あたしがアスカの手を握つて優しく語しかける。

「ねえ、これからはベッドで一緒に寝てくれる？」

するとアスカは涙に濡れた目で、下からあたしを見上げるよう上目遣いでお願いをしてきた。

あたしは、そんなアスカを可愛いと思つてしまつた。
アスカはあたしの妹に決定。

「んもう、可愛いわね。じゃあお姉さんと一緒に寝ましよう」

あたしはベッドの中でアスカをぎゅっと抱きしめた。

アスカはすっかり安心したのか、アタシに笑顔を見せてくれた。
部屋は薄暗かつたけど、わずかな月明かりに照らされたアスカの笑顔は綺麗に見えた。

「ふふっ、シンジがあたしにアスカの笑顔をまた見たいって言つたのがわかる気がする。今の笑顔を見せれば、シンジは喜んでくれるわよ」

あたしの言葉を聞いたアスカは顔を真っ赤にして俯いてしまつた。
そしてぼそぼそと、あたしに言い返してきた。

「エヌテルだつて、いい笑顔してるとわよ。ミシュアがずっと側に居たいって言つてるし」

「ずっと一緒に居るつて、姉弟だから当然じゃない」

あたしは平然と、そう答えると、アスカはため息をついていた。
何か変な事いつたかな。

その後あたしたちは少し窮屈なベッドで眠りについた。

アスカって柔らかいのね、胸も大きいし。
変な気起きたやいそ。

『ヨシュアの部屋』

「やつぱつ僕が下で寝るよ

僕はベッドに寝ながら、床で寝て居るシンジに向かって言う。

「いいよ、ボクが居候させてもらって居るんだから」

シンジは僕の言葉を拒否して床に寝転がっていた。
そして静寂が訪れた。

「まだ、起きてる? ヨシュア」「
起きてるよ、シンジ」

そろそろ睡眠に入ろうと思つていた時にシンジから声を掛けられて、
返事をした。

「部屋に案内される少し前に、食卓でアスカとヨシュアとカシウス
さん三人で話していた事、聞いちやつたんだ」

僕はカシウス父さんがワインを飲んで酔った勢いとはいえ、食卓で
あんな話をしてしまつた迂闊さに後悔していた。

「大丈夫。ボクは家に入ろうとしたときに聞こえたから。池で釣り
をしていたエステルには聞こえていないと思うよ」

シンジの言葉を聞いて僕は安心した。

誓いの内容をエステルが知つたら傷つくことになるからだ。

「聞かれたら仕方がない。僕は暗殺者として仕込まれた忌まわしきこの力を使ってでも、側で守る事に決めたんだ」

「ボクはただの中学生だ。魔獣と戦つたりする力なんてない。大切なものを守ることすら無理なんだ」

シンジはかなり弱氣で震えた声で、そう呟いた。

僕はシンジに、出来るだけ優しく聞こえるようにこう言った。

「諦めちゃダメだよ。諦めたらそこでおしまいだ。諦めない限りきっとできるようになるよ」

「エステルにも、同じ事言われたよ」

シンジは感心したよううとうと答えた。

「エステルは僕の太陽。僕の暗い人生を眩しすぎるくらいに照らしてくれた。だから守るんだ。」

僕は自分に言い聞かせながらそう呟いた。

「ヨシュア、僕はアスカを守れるくらいに強くなりたい」

「……じゃあ、遊撃士を目指すといいよ。戦闘訓練とかは、僕や父さんも協力できると思うよ」

「ありがと」

そう答えたシンジは安心したのか、ぐっすりと寝息を立てて居た。

僕も寝ようかと思った時、意識を失ってしまった。

シンジが寝静まつた頃、ヨシュアの部屋から人影が飛び出した。

その飛び出した黒髪で琥珀色の瞳の少年は、家から出た後、人気の無い道を素早い動きで駆け抜けていく。

その黒髪の少年の琥珀色の瞳の焦点は全く定まっておらず、白目を剥いているかのようだった。

少年は目的地に着くと、カツクンと人形のよつに立つて待っていた眼鏡をかけた青髪の学者風の青年の前に膝まづく。

「さて、執行者ナンバー13。定期報告をしてもらおうか」

学者風の青年がそう告げると、黒髪の少年は機械的に言葉を紡ぎ出す。

「カシウス・ブライトの家に引き取られた子供二人は、先日ヴァレ

リア湖に墜ちた巨大な機械兵器に深い関係があるとおもわれます」「ふふ、興味深い報告ですね。彼らの秘密を探り続けなさい。……

他には？」

学者風の青年は眼鏡をいじつて先を促す。

「引き取られた子供二人は互いに依存関係にあるとおもわれます」

ヨシュアのその言葉を聞いた青年は醜悪な笑みを浮かべる。

「何と。それはそれは……。ではその絆を断ち切れば、『人形』を作成事が出来ますね。まずは、邪魔なカシウスを引き離す事にしますか」

第一話 壊れたマリオネット

『ロレント郊外 ブライト家』

アタシは部屋の外から聞こえてくるハーモニカの音で目が覚めた。
今までこんなに心地よく目が覚める事は無かった。
やつぱり、安心して眠れたからかな。
エスティルも目を覚ましたみたい。

「おはよ。アスカ」

「おはよ、エスティル。ハーモニカの音が聞こえて来るんだけど？」

アタシは疑問を口にした。

「ああ、ヨシュアが吹いてるのよ」

アタシとエスティルはあまり物音をたてないよう部屋を出ると、シンジも部屋から出て、廊下につつ立つて居た。
アタシたち三人が庭に出てきた時に、ちょうどヨシュアのハーモニカの演奏が途切れた。

パチパチパチ

アタシたち三人はヨシュアに向かつて拍手をしていた。

「いい曲ね」

「本当、感動したよ」

アタシとシンジは素直な感想を述べた。

「星の在り処つて曲なんだ。小さい頃から知ってる曲

ヨシュアが照れ臭そうにそう答えた。

「ボクも、弾いてみたいな」

「シンジも、楽器が弾けるの？」

「うん、チエロだけどね」

「そつか、今度ロレントの街に行つたら探してきてあげるよ」

アタシは、シンジのチョロがまた聴けると聞いて、嬉しくなつた。

「ところで三人とも

ヨシュアは盛り上がりつていたアタシたち三人を諭すように言う。

「寝巻のままだよ。着替えてきたら？」

「！」

アタシ、シンジにパジャマ姿を見られちゃった。

日シユアツ

三シニアで結構冷静に的確にツツミを入れるのね

シノジノ其の二

うところには似て欲しくないな。

シンジとアスカがこの世界に来ての生活が始まった。

今までエヴァンゲリオンのパイロットとして、ネルフ中心の生活を

朝食前には、体力トレーニングとカシウスの元で戦闘の指導。送り届た一人ひとりでの生活は新鮮だった。

エヴァンゲリオンに乗る以外は、至って普通の中学生であったアスカとシンジの二人は、基礎体力から鍛える必要があった。
そして朝食当番。

今まで、まったく料理をしようともしなかつたアスカも、エスティルに小突かれて料理をするようになつた。

昼間はエスティルが中心となつて裏庭の池で釣りを楽しんだり、エスティルが森の中で採ってきた虫（どう見ても魔獣の一種）を見せられたり、活発なエスティルのペースに巻き込まれていた。

アタシはシンジと一緒にテラスの柵に寄りかかって星を見て居た。

「」こんなにたくさんの星空……綺麗。ね、シンジ」

アタシは何の氣も無しにシンジに話しかけた。

「うん、そうだね……。綺麗だ」

そう答えるシンジは星空を見ていない。
まるでアタシの方を見ていいるようだ。
ま、まさかアタシが綺麗だつていってるの?
いやーん。

「ア、アスカー!」こんな事を言つたら怒るかもしれないけど、話があるんだ!」

突然顔を真っ赤にして喋るシンジを見てアタシは、こう思った。
も、もしかして愛の告白ー!?
た、確かにムードは悪くないし。

シンジにしては気が利くわね。

と、アタシの方も頬が紅潮していく。

そしてシンジから発せられる次の言葉を待った。

「アスカはエヴァに乗れなくて平気なの？」
「はあ！？」

期待はずれのセリフにおもいつきり脱力するアタシ。思わずシンジに対し罵倒するセリフと手が出そうになるけど、こには堪えた。

「だつて、アスカはエヴァのパイロットになるために十年近くも努力してきたわけだし。前のシンクロテストの時に、ミサトさんがみんな事を言つたから、アスカは無理をしたんだわ！」って思つて」

そう言われて、アタシもその事をすっかり忘れていた事に気づく。しかし、アタシの心はもうすっかりエステル達のおかげで落ち着いていた。

「確かに、今まで努力してきたセカンドチルドレンとしての誇りはあつた。それはアタシの存在を一人でも多くの人に認めてもらいたかったから。でも、エステルたちはアタシをアスカとして見てくれている。セカンドチルドレンじゃなくて一人の人間として。アタシを見てくれる。それに気づいたの。…もちろん、シンジもね」

アタシは自然に優しい微笑みを浮かべたと思う。
こっちを見ているシンジの顔が嬉しそうだつたから。
アタシはシンジの前に右手を差し出す。

「じゃあ、握手しましょ。誓いの握手よ。これから、お互い遊撃

士を田指してスタートラインに立つたんだから

今は、友達としての握手で我慢してあげる。

でも、きっといつかはそれ以上の事をしたい……待ってるよ、シンジ。

それから一年の間、ブライト家の家族、長女エステル、長男ヨシュア、次女アスカ、次男シンジの四人は本格的に遊撃士協会で訓練を受ける事になった。

エステルが筆記の授業をさぼって、スニーカー集めに走ったり、アスカが優秀な成績を修めて、さらには導力技術の開発までしたり。ヨシュアがその才能を報道に發揮し、シンジは料理に強い関心を持つていた。

『ロレント 遊撃士協会』

「じゃあ、今田は準遊撃士の最終試験を行うわ」

遊撃士協会でボクたちの指導担当になつたのは、ロレント支部の先輩遊撃士、シェラザート・ハーヴェイさん。

ボクたちはショーラさんと呼んでいる。

準遊撃士というのは、遊撃士の見習いみたいのようなもので、16歳以上なら試験に受かればなる事が出来る。

ボクたちの居た世界でも、義務教育期間が終了する年と同じぐらいだし、ボクたちも大人への一歩を踏み出したわけだ。

「えー！試験なの〜！？」

シホラさんの言葉に対して、エステルが大きな声を上げた。

「エステル、試験が筆記とは限らないよ。……それと、逃げようと思わないでね。」

「うつ。」

ヨシュアの鋭いツッコミが入った。

ヨシュアはエステルの先の行動まで読めるんだなあ。
ボクはアスカの気持ちはまだ読めない。
もひ、ボクの事を嫌つてはいないとは思つけど。

「そつそつ、今回は筆記試験じゃないわ。実戦よ」
「わあい！早く始めよつよ！」

シホラさんがそつ言つと、エステルはとたんに元気になった。

『ロレン特 地下水道』

『実地研修・宝の回収』

あたしたち四人は試験の内容を確認して地下水路に降りて行つた。
ヨシュアの索敵能力によつて不意打ちを受けることなく、あたした
ちは順調に地下水道を進んでいた。

地図を確認して、目的の部屋の前に魔獣の巣があるのを発見した。
あたしたちは、魔獣が巣の中で固まつてうごめいているのを見て、
あたしたち四人の必殺技、『チヨインクラフト』を実戦で試してみ

る事にした。

『チエインクラフト』はあたしたち四人で息を合わせて攻撃する技。一定の範囲内の敵に大ダメージを与える事ができるの。

これは、アスカとシンジが戦闘訓練をしていたときに、一人で飛び上がつてキックをしてきたのを見て、カシウス父さんがあたしたち四人の訓練メニューにいたのよ。

「みんな、行くわよ！」

「「「了解！」」」

あたしの号令の元に、あたしたち四人は攻撃を開始した。

アスカとシンジは導力銃で、一点集中砲火！

その攻撃が命中する瞬間、あたしの棒が標的を突き、ヨシュアが標的を斬り払う！

大きな爆発音が響き渡る。

巣の中に居た魔獣たちは、あたしたちのこの一撃で全滅した。

「やつた、やつたよ、シンジイ〜〜！」

アスカは飛び跳ねて喜んでいる。

子供っぽいけど、かわいいじゃない。

そして、アスカは目的の部屋に駆けこんで行った。

あたしたちは浮かれるアスカを追いかけて部屋に入った。部屋には小さめの宝箱が四つ置かれていた。

でも、そのうちの一つは、すでに開封されていた。

先に入ったアスカが、開けてしまつたらしい。

宝箱の中には準遊撃士のバッジが入っていたみたい。

アスカはバッジを胸に付け、腰に手を当てて仁王立ちしていた。残るあたしたち三人は天を仰いでため息をつき、へたり込んでしまった。

「ねえ、アスカ。今回の依頼には中身の確認までは入つて居ないんだよ。」

とヨシュアにツツコミを入れられたアスカはうなだれた。

地下水路から脱出したあたしたち四人は、うなだれ続けるアスカを引きずるように連れて、シェラ姉の待つ遊撃士協会に向かった。

朝から始まつた試験だけど、陽は傾きかけていた。

シェラ姉はあたしたち四人から宝箱を受け取ると、うつむいてるアスカを見た後、あたしたち四人に向かつてこう言った。

「みんな、お疲れ様。三人は合格ね。アスカは今回……不合格。理由はわかつてる？ 冷静に人の話を聞く事も遊撃士にとつては大事なことよ」

シェラ姉はアスカが謝りもせずに黙りこんでいるのを見て、言葉を続ける。

「このままじゃあ、アスカは準遊撃士になれなくて、置いてきぼりになっちゃうわね～」

シェラ姉は「冗談混じりの一言が、アスカの心の堤防を決壊させたみたい。

「グス……置いてかないでよ……シンジイ、シンジイ……う、う、うわあーーん」

両手で顔を覆つて泣き出すアスカ。

慌てて抱きしめるシンジ。

シェラ姉と、受付にいたアイナさんは、いきなり泣きだしたアスカ

を見て呆然としたみたい。

「『』、合格よ！ そこまで深く反省してゐるなら一度としないと思つ
しー。四人とも準遊撃士よ！ だから泣くのを止めてー！」

とショーラ姉は慌ててフォローしていた。

アタシは、準遊撃士試験に不合格と聞いた時、目の前が真っ暗になるほどショックを受けた。

せつかく、シンジと一緒に遊撃士として歩んで行こうって誓つたのに。

でも、不合格が冗談と聞いてほつとした。

アタシが泣き終わった時、シンジに抱きしめられている事に気がついた。

照れ臭くなつて、慌てて離れたけど、ショーラさんが一ヤ一ヤした顔でこっちを見ていた。

こりや、酒の肴になつちやつたわね。

アタシはため息をついた。

「やうやう、カシウスさん宛てに手紙が届いていたわ

受付カウンターの奥で、書類整理をしていたアイナさんが、エスターに便箋を渡しているのを見た。

アタシたちは、カシウスさんに準遊撃士になつた報告をするため、街の郊外にある家に帰つた。

『プライト家 ダイニングキッチン』

その日の夕食当番はアタシだった。

料理は下手ながらなんとかできるようになつたけど、まだ少しシンジに手伝つてもらつていた。

こうしてお揃いのエプロンで居ると、新婚夫婦みたいね。まあ、エステルとヨシュアともお揃いだけだ。シンジつて鈍感だから気づいていないんだろうな。

こうしてアタシとシンジが仲良く夕食を作つていると、カシウスさんが部屋に入つてきた。

「急に大きな仕事が入つてな」

カシウスさんはそこで言葉を濁して、探るような視線でアタシの方を見た。

もしかして、アタシが心配でいいだせないのかな。

「アタシは大丈夫よ、パパ」

アタシはカシウスさんを初めてパパと呼んだ。

カシウスさん、これからはパパと呼ぼう、は安心したように話を続けた。

「明日から家を長く空ける事になつた。それで俺が引き受けっていた仕事をお前たちに任せようと思つ。なに、難しい仕事はシェラに任せることからな。保護者が居ないってはめをはずすじゃないぞ」

アタシはパパに引き取られてからの二年間、アタシたちの事を優先して、仕事を断つているのを知つていた。

……今までありがとうございました。

《ロレント 空港》

翌日の朝。ボクたち四人はカシウスさんを見送りに空港に来た。まだ発車時間まで時間があるようだ。

搭乗口ビーに集まつた、ボクたち五人のところへ駆けてくる人がいた。

無精ひげを生やして煙草をくわえている男の人と、ソバカスが印象的な、カメラを持った若い女人だった。

「カシウスさん、突然出張なんてヒドいじゃないですか。護衛の依頼はどうなるんですか」

リベル通信の記者、ナイアル・バーンズと名乗つた男の人は、名刺をカシウスさんに渡しながらそう言った。

「悪い悪い。でも、俺の自慢の家族であり、直伝の弟子である、こいつらが代わりに行く。まだまだ新米の準遊撃士だが、筋はいいぞ」ナイアルさんは、ボクたち四人が若すぎるのに驚いたみたいだったけど、ニヤリと笑つて頷いた。

「カシウスさんの弟子なら、将来有望かもしれないっすね~。おい、ドロシー。写真を頼む」

ボクたちブライト家の家族五人は、集合写真をとる事になつてしまつた。

「はーい。楽しい事を考えてくださいねー」

ドロシーさんはカメラを構えながらボク達に話しかける。ボクはアスカの後ろに立ちながら、ブライト家の楽しい日々を思い浮かべていた。

「はーい、いい写真が撮れましたよー」

どうやらオーバルカメラはポラロイドカメラのようだ、すぐに写真が出てくるものようだ。

ボクはその写真を見て驚いた。

前に居るアスカとエステルの太陽のような笑顔が、それに照らされるように明るいボクとヨシュアの笑顔が、カシウスさんの包み込むような穏やかな笑顔が、十二分に表現されていた。

「ドロシーの写真は、なぜか素晴らしい出来になるんだよな」

ナイアルさんも写真の出来に満足したようだ。

ボクはその写真が欲しいと思っていると、後で街の『メルダース工房』で全員分焼き増ししてくれるそうだ。

ボクは宝物を手に入れる事が出来た。

『ロレントの街の北方 翡翠の塔』

僕たちは、ナイアルさんとドロシーさんが、翡翠の塔の屋上から風景を撮りたいというので、護衛の依頼で同行していた。

僕たちが翡翠の塔の屋上に着いたとき、物陰に人が隠れている気配がした。

なぜかとっても冷たい感じがした。

体も心も震えそうな……。

僕は震えを抑えながら、物陰に居る人物に声をかけた。

「そこに居る人、隠れてないで出てきてくれませんか」

すると物陰から、学者風の青年がゆっくりと出てきた。

「私はアルバ。考古学の研究をしています」

「よく一人でここまで来れたな～。魔獸がウヨウヨしているのに
いや～魔獸から逃げるのは得意なんんですけどね～」

ナイアルさんがくわえた煙草をいじりながら問いかけると、アルバさんは穏やかな表情で答えている。

僕はそんな二人の会話を見ているうちに、背筋に寒気が走つてその場から離れなくなつた。

僕は後ずさりしながら、屋上の端の手すりに寄りかかり、そのまま動けなくなつてしまつた。

心配したエステルに気分がちょっと悪いだけだから大丈夫、と言つたら、エステルはしばらく屋上をウロウロしてくると行つてしまつた。

アスカとシンジは、塔の屋上の真ん中で不気味な音を立てて動いている大きな機械装置の前に居たけど、アルバさんと一言、話をしただけで、驚いた様子で二人で離れていった。
エステルが動かない僕の所にやつってきた。

「ねえ、まだ気分が悪いの？あっちからロレントの街が見えるよ、
行こ」

そう言って、エステルは僕の手を引っ張るけど、僕の体は鉛のよつに重くて動かなかつた。

アルバさんが僕の方をずっと見ている。
なんて冷たい目なんだ。

もしかして、彼のせいなのか。

アルバさん……彼は危険だ。

一人になつたアルバさんは、僕たちの方にゆっくりと近づいてきた。
エステル、逃げるんだ！
でも、全く言葉が出ない。
口の動きまで封じられたのか！
くそっ、動けなかつたら、エステルを守ることができないじゃないか！

目の前のエステルを守れないなんて嫌だ！
僕は体一杯に力を込めた。

第三話 そして、幸せが終わる

《翡翠の塔》

僕は体一杯に力を込めた。

すると、苦しいながらも、今までピクリとも動かなかつた、自分の体が動くようになった。

僕はエステルの手をとつて、その場から離れていった。

そして、気がつくと冷たい気配は消えた。

振り返ると、アルバの姿が消えていた。

「おい、あの考古学者ってのは何処へ行つたんだ？」

ナイアルさんは屋上を見回して探しているみたいだ。

「ああ。逃げるのが得意だから、一人で帰つたんじゃないですか」

苦しい言い訳にしか聞こえないけど、僕は作り笑いを浮かべながらそう答えるしかなかつた。

《ロレント西郊外 パーゼル農園》

次の日の依頼は、パーゼル農園の畠を荒らす魔獣の退治だった。

パーゼル農園を経営する夫婦の娘ティオは、あたしたちがよく料理の食材を買いに行くので顔なじみだ。

ティオの両親によると、魔獣は日が沈んでから夜明けまでのうちに集団で畠の作物を食ひ荒らすという。

あたしたち四人は泊まり込みで見張りをする事にした。

あたしとアスカは、夕方から宵の口を、シンジとヨシュアは夜中から夜明けまで分担して見張る事にした。

昼間はシンジとヨシュアはティオの弟妹の相手をしていた。あたしたちはティオの部屋で、女の子三人のお喋りを楽しんでいた。いつの間にか話題は、ヨシュアとシンジの事になっていた。

「えー、付き合っていないの？ 信じられない」

ティオはあたしたちがお互いを家族としてしか見ていない、と告げると、驚きの声を上げた。

「ヨシュア君は、日曜学校でもモテていたのよ。交際を申し込んで玉砕した子も何人もいるし」

「ふーん。他に好きな子でもいるのかな」

ティオのその言葉を聞いたあたしは考え込むしぐさをして答えた。ティオは身を乗り出して、まくしたてるように話を続ける。

「好きな子って意外にすぐに側にいるかもしれないじゃない」

「もしかして、アスカだつたり？」

アタシの言葉を聞いたティオとアスカは、うなだれてしまった。

「どこまで鈍いのかしら、エステルって」

「アタシも同感」

あたしはなんで一人がうなだれたのか、わからなかつた。

「ところで、アスカの方はどうなの？ 早く告白しないと他の子にシンジ君をとられちゃうよ」

ティオは今度はわたしではなくアスカに詰め寄っていた。

「そ、そりがな、でもシンジに告白して、断られたら不安なの。側に居られなくなっちゃう」

そう答えたアスカの目に涙が浮かんでる。

ティオは慌てて話題をすり替えた。

まったく、アスカはシンジの事になると、泣き虫になっちゃうんだから。

もうそろそろ、あたしたちが見回りに出る時間だ。

ヨシュアとシンジはしばらく部屋で仮眠をとつてもらう。あたしたちは部屋をでて、ヨシュアたちと入れ替わった。

「ヨシュアの恋の悩みなら、相談に乗るからね！」
「はあ！？」

ヨシュアとすれ違う時にそう言つたら、思いつきりあきれ顔をされた。

あたしつて頼りにならないのかな。

あたしはアスカと二人で、見て回つたけど、魔獣が現れる気配が無かつた。

あたしたちが欠伸を噛み殺していると、ヨシュアとシンジがやつて來た。

交代の時間だ。

部屋に戻ると、あたしとアスカは一緒に眠りについた。

ボクはヨシュアと一緒に夜の見張りについた。

ヨシュアは寝れなかつたようで、眠そつた。

エステルにあんな事を言われたのが原因なんだろうか。

ボクも鈍感かもしれないけど、エステルもかなり鈍感だよね。

夜明けが近づいてきた頃、巡回していると魔獣の姿を見つけた。

ボクとヨシュアは魔獣が逃げ出さないよつて、後ろからゆつくりと

近づいていったんだけど……。

ボクはつい、足元の小枝をポキリと折つてしまつたんだ。

ボクたちが近づいてきた事に気がついた魔獣たちは、逃げようとして、壁に思いつきりぶつかつてしまつたんだ。

そして、揃つて氣絶している。

壁に魔獣がぶつかつた大きな音に気付いたのか、アスカやエステル、そして農園のみんなまで起きだしてきた。

「みやあお～～つ……」

「みゅう～～～つ……」

そしてみんなで取り囲んだ後、猫みたいな魔獣は、情けない声で泣きだしたんだ。

「退治しなくちゃダメかな？」

それを見たエステルはそう言いだした。

その言葉に対してもヨシュアは、冷静な顔で即答した。

「人を守るのが遊撃士の仕事。魔獣に情けは無用だよ」

でも、農園の子供たちも可哀想だ、と言つてるし。

農園を荒らさないように注意すれば、許してあげてもいいってことで、ここは依頼主の意見を尊重して、エステルが魔獣たちを思いつきり脅かして、しかりつける事で解決したんだ。

ボクたち四人は、依頼が解決したので、一旦家に帰る事にした。

『ロレント郊外 ブライト家』

家に戻つてもヨシュアは落ち込んでいた。
明るいはずのリビングが暗い雰囲気のまま。
アタシたちは椅子に腰かけて黙つたまゝ。
ようやくヨシュアが重い口を開いた。

「ごめん。みんなに嫌な思いをさせたね」

ヨシュアはさらに早口でまくしたてる。

「僕はある魔獸を助けようと全然思わなかつた。こういう時、自分がたまらなく嫌になる。人として不完全じやないか、心のどこかが壊れているのかもしれない。いや、すでに壊れていて人形なのかも……」

アタシはヨシュアを思いつきり平手打ちした。

内罰的な事は大嫌いだ。

アタシは言葉が出ないまま、息を荒くして立つてゐるだけだつた。

「ヨシュア、君は人形じゃないよ。一人の人間なんだ。」

と、シンジが囁くような声で優しく励ます。

「ここの五年間、あたしはヨシュアの事をずっと見てきた！　良いところ、悪いところは誰よりも知つてゐる自信があるー。たぶん、ヨ

シュア本人よりもね！　あたしを差し置いて、勝手な事いつんじやないわよ！」

エステルもテーブルを激しく叩いて怒って叱り飛ばした。

ヨシュアはエステルたちの言葉が嬉しかったのか、笑顔をとり戻し満面の笑みを浮かべると、突然椅子から落ちて倒れこんだ。

慌ててみると、穏やかに寝息を立てている。

まったく、驚かないよね。

『ロレント 市長邸』

今日の依頼は、カシウスパパから頼まれた、三つの依頼の最後の依頼。

マルガ鉱山で採れたという、翠耀石の大きな結晶を市長邸まで運んできてほしいとのこと。

その後、アタシたちはマルガ鉱山に行って鉱山の親方と面会して、結晶を持って、ロレントの市長邸へ戻つて来た。

市長邸に行くと、来客中のようだつた。

四人で押し掛けるのも迷惑になると思ったので、結晶を渡すのはエステルとヨシュアに任せ、アタシとシンジは街の食事処で待つ事にした。

エステルとヨシュアは、なにやら話ながら帰つて來た。

「いい子だつたわね～。良いところのお嬢さんっぽいのに、それを鼻にかけたところがないし」

どうやら、Hステルは市長邸で、ジョゼフィトと言つた女学生に会つたらしく。

「アスカとも友達になれるわよ」

エステルは上機嫌だけど、ヨシュアは何か上の空と言った様子。

「もしかして、ジョゼットに一日忘れとか？　ああいうのがタイプなんだ」

エステル、それは違うわよ。

シンジもそう思つてゐに違ひない。

「まあ、エステルみたいに、野次馬根性と、直情的性格丸出しじゃない事はたしかだね」

うわっ、ヨシュアのツッコミがいつもよりキツイ！

『ロレント 遊撃士協会』

ボクたちがカシウスさんから受けた最後の依頼の報告をしていくと、血相を変えた市長さんが、飛び込んできただ。

「大変じゃ！　家の結晶から金庫が盗まれた！」

市長さんはかなり慌てている様子だった。

犯人はタイミングからして、エステルが会つたジョゼットって子に違ひない。

ヨシュアも怪しいと思っていたようだ。

エステルと市長さんは、人が好いのか、信じられない、と言つた顔

をしていた。

問題は、彼女の行き先だ。

「そりいえば、こんな木の葉を拾つたんじゃが

と、市長さんは木の葉っぱをとり出した。

ボクは、その葉っぱに見覚えがあつた。

料理で香り漬けに使つたりする、セルベの葉だ。

「じゃあ犯人は、南の森のミストヴァルトにいるのね？」

ボクの推理を聞いたショラさんは、同行すると言つてくれた。

『ロレント南 ミストヴァルトの森』

ミストヴァルトの森の入口に着くと、ショラさんが複数の人間が通つた形跡があると断定。

ボクたちが森の奥へ進んで行くと、森の奥から話声が聞こえた。

エステルによると、女の子の話声はジョゼットみたいだ。

森の奥のセルべの大木の前にある広場では、ジョセットと、その手下らしき男たちが話している。

こちらには気づいていないようだつた。

ボクたちは話の内容を聞き出せつと、茂みに身を隠しながら接近した。

すぐに怒つて飛び出しそうになるエステルを、ヨシュアは抑えていた。

そんな事も知らずに、ジョセットは話を続ける。

「特にあのバカ女！ボクの事を疑いもせずに『友達になれそう』だつて！頭空っぽみたいな笑顔浮かべちゃつてさ！」

ジョゼットたちはそう言つて大笑いする。

その言葉を聞いた、ボク以外の三人の周囲の温度がおかしくなった。
気がする！

「なんだつて！」

— あんですって！

—なんですか？

エスティルとアスカよりも、ヨシュアが先にキレるなんて！

よし、ボクも続けて戦闘に参加するぞ！

と思つて隠れていた茂みを飛び出したけど、田の前には凄い鋭い眼をしたヨシュアが、『漆黒の牙』でジョゼット一味に凄い勢いで斬りつけていた。

アヌガとエヌ元川も真っ赤な顔をして、ホー！ホー！している。

特にエス元川が振り回した棒で
銃弾を跳ね返すのを見たときは驚
きが止まらなかつた。

ボクが止めに入った時は、ジヨゼット一味は気を失って倒れていた。無抵抗でもまだ暴れ足りないみたいだ。

「や、やめなせ」二人とも、それ以上やつたら、死んじゃうわよー」

ショーラさんが大声をだして止めるけど、まだ三人の動きは止まらない。

「仕方ないわね……『ニアロストーム』」

ショラさんが得意とする風の魔法で、三人とジョゼット一味とボクはまとめて空中に飛ばされたんだ。
なんでボクまで……。

地面上にたたきつけられた三人は、やっと落ち着きを取り戻したみたい。

「遊撃士としての冷静さが足りないわよ！」

ショラさんに、そう説教を受けていた。

三人は正座させられて、しじめ返っていた。

ボクはその時、その場にジョゼットたちの姿が無いのに気づいた。

「……あの、飛ばされた後、みんな逃げちゃったみたいなんですね
ど」「しまつたあああー私とした事がー！」

ボクが説教中のショラさんに声を掛けると、ショラさんの叫び声が、
ミストヴァルトの森に響き渡った。

結局ジョゼットたちは捕まらなかつた。

一人だけ冷静だったボクは損した気分だ。

『ロレント郊外 ブライト家』

次の日の朝、アタシたちは異常に気がついた。
窓の外が濃い霧で覆われている。

ロレントで霧が発生するのは珍しいけど、ここまで濃い霧は初めて
なんだつて。

霧はお昼になつても消える事はなかつた。

このままだと、飛行船も飛べなくなるし、霧で迷子になつてしまつ人も出てくる。

アタシたちが遊撃士協会に集まつて対策を考えていると、街の人から、街の中で眠つてしまつて起きない人が居る、つて報告を受けたの。

アタシたちの聞き込みの結果によると、眠りこんだ人の近くで鈴の音が聞こえたみたい。

「霧と鈴…まさかね」

その報告を聞いたショラさんは唇に指を当てて呟いた後、重い口を開いてショラさんの昔の事を話し始めたの。

「もしかして、ルシオラ姉さんの仕業かもしねない」

ショラさんはゆっくりとルシオラについて語り始めた。

彼女は鈴を使った幻術が得意で、幻でありながら五感までも支配する力を持つ事。

彼女は、昔、サークル団『ハーヴェイー座』に身を寄せ、ショラさんを妹として接してきた事。

団長の死により一座が解散した後、妹分であつたショラさんを残して「やる事がある」と姿を消した事。

残されたショラさんは、カシウスパパを頼つて、遊撃士になつたらしいの。

このルシオラさんの事はヨシュアも知らなかつたみたい。

エスティルは小さい頃にハーヴェイー座がロレントに来た時に、ちょっとだけ会つた事があるみたい。

その時のルシオラさんは、団長さんと一緒に優しく話しかけてくれたんだつて。

好きな団長さんが死んで人が変わってしまったのかな。
アタシもシンジが居なくなつたら……。

イヤ。考えたくない。

アタシたちは霧の発生源を調べる事にした。

ロレントの東西南北の霧の範囲を調べた結果、ミストヴァルトの森
が怪しい、という結果になつた。

シェラさんはルシオラさんがそこに居るなら絶対に会いたい、と言
う事で今回もアタシたちに同行する事になつた。

『ロレント南 ミストヴァルトの森』

アタシたちがついたとき、ミストヴァルトの森は濃い霧に包まれて
いた。

森の中ほどまで進んだ時、濃い霧が完全に視界を遮り、音も聞こえ
なくなつてしまつた。

近くに居るシンジの顔も見えなくなつたとき、アタシは鈴の音を聞
いた。

いけない、と思つた時、アタシは眠るように意識を失つた。

『第三新東京市 ロンフォート117 アスカの部屋』

「アスカ！－起きろよいい加減に！－」

「！？」

アタシは自分の部屋で目が覚めた。

「なんだ、ケンスケか……」

「なんだとは何だよ！？それが幼馴染に捧げる感謝の言葉か？」

「着替えるんだからわざと出でつてよー。」

ハイハイと、ケンスケは部屋を出ていく。

アタシが着替えを終えて部屋から出ると、台所ではアタシのママが皿を洗つていて。

「アスカつたら、いつまでケンスケくんに迎えに来てまいかしら、しょうのない子ね、あなたも新聞ばかり読んでないでさせと支度していください」

テーブルで新聞を読んでいるのはアタシのパパ。

「君の支度はいいのか」

「はい、いつでも。もう会議に遅れて冬月先生にお小言いわれるのは私だけなんですよ」

「君はモテるからな」

「じゃあキョウノおばさん、行つてきます！」

「行つてきます」

アタシはケンスケに背中を押されて玄関を出た。

「そうそう、今日は学校に転校生がくるらしいぜ

「ここも来年遷都されて首都になるものね」

「可愛い子だといいなあ

「もづ」

アタシとケンスケは通学路を走つて行く。

今朝、何か夢を見たようだけど忘れちゃったわ。

「はあ～遅刻、遅刻～！ 転校初日から遅刻つてかなりやばい感じよね～」

道の向こうから、パンを加えた女の子が走ってきて、ケンスケとぶつかつた。

そして、アタシはいつものように学校生活を送った。

アタシは学校の部活動を終えて、家に帰った。

あたりはすっかり暗くなっていた。

玄関のドアを開けると、いつものようにママが優しく迎えてくれる。「今日は、アスカちゃんの好きなハンバーグよ。さあ、うがいをして、手を洗いなさい」

アタシは、はいと返事をして、手を洗う。

学校では、ケンスケを怒鳴り散らしたり、ラブレターを踏みつけたり、気に入らない事があると、すぐに手が出ちやつたりするけど、ママの言つ事は素直に聞くんだ。

アタシ、ママが大好きだから。

夕食はいつも、ママとパパと三人で楽しく過ごす。

テーブルの上には、大好きなハンバーグ。

あれ？

「アスカちゃん、どうしたの？」

食事の手を止めたアタシに、ママが心配そうな顔で話しかけてくる。

「ううん、何でも無いの。」

アタシはそう答えて、ハンバーグを食べ始める。

おかしい。もっと大きなハンバーグが欲しいな、と思つ。

「アスカちゃん、お風呂が沸いたわよ」

アタシはお風呂が大好きだから、飛ぶようにお風呂に向かつた。
浴槽に入る。温い。

アタシはもつと熱いのが好みだったはずだ。

アタシ好みのお風呂の温度？

おかしい。夕食の時から何か違和感を感じる。

第四話 断てない思い、断つ想い

《第三新東京市 コンフォート17 アスカの部屋》

アタシは、お風呂から上がった後、アタシの部屋の向かいにある、物置部屋の事が気になった。

アタシのパパとママは同じ寝室で寝ているから、一部屋余るのだが、特に用事もないのに、アタシはフラフラと物置部屋に入つて行った。物置部屋の中にあつたチョロが、アタシには気になった。ダイニングキッチンでワインを飲んでいたパパに聞いても、パパのものじゃないし、ママのものでもないって言つたよね。それなら一体誰のものなんだろう。

アタシはチョロを持つて、そんな事を考へると、突然アタシの手が勝手にチョロを弾き出したの。

アタシはチョロを全然弾けないのに……。

アタシはチョロを弾いているうちに、この曲の事を思い出した。

この曲は、シンジがアタシに聞かせてくれた曲だ！

アタシは涙を流しながら、曲の演奏を続けた。

そして、演奏が終わる。

パチパチパチ

拍手の音に振りかえると、そこにはママが立つていた。

マンションの自分の家に居たはずなのに、いつの間にか周りには白い霧が広がっている。

「アスカちゃん、あなたはとても大切な人をみつけたのね」

ママは穏やかに微笑んでくれた。

「うん、ママ。ママ以外にも、アタシを見てくれる人を見つけたよ

ママは涙を流して喜んでくれた。

「よかつたわね。さあ、その人の待つ世界へ帰りなさい」

ママの姿が霧に溶けていくようじて薄れしていく。

「ありがとう、ママ。アタシ、ママに会えてよかつた

アタシは消えていくママに向かって、そう声をかけた。

「ううん、正確には私はアスカちゃんのママ本人じゃないの。アスカちゃんの心が生み出した幻なのよ。でも、幻でも、私はあなたを見守っているわ」

アタシは消えてしまつたママの声を最後までなんとか聞き取ることができた。

ボクたち四人は、ほぼ同時に目覚めた。

ボクは父さんと母さんと、家族で海に行く夢を見て居ただけど、そこで溺れかけていた女の子の手をつかんだことで、アスカの事を思い出して、夢から脱け出せたんだ。

ルシオラさんの幻術は、幸福な夢の中に閉じ込める事なかもしない。

ボクたち四人が目を覚ますと、すっかり霧も晴れていて、他の三人の姿や、前にあるセルベの大木の側に居るルシオラさんの姿が見えたんだ。

ルシオラさんは、目を覚ましたボクたち四人の姿を見ると、ポツリ

と呟く。

「作戦は、失敗したようね。あなたたちも、永遠に夢の中に居れば、辛い目に会わずに済むのにね」

ルシオラさんが結社の一員であるなら、気が進まないけど、倒されなければならないのか……。

ボクは悲しげな瞳のルシオラさんを黙つて見つめていた。

「では、『きげんよ』。また会いましょう」

するとルシオラさんは、また霧のようなものを身に纏い始めた。

「ふざけるな！ なぜ僕と戦わない！ 結社は、アルバ教授は何をたくらんでいるんだ！」

ヨシュアは戦おうとしないルシオラさんに向かって、普段の冷静さを失った表情で叫んでいた。

「人類補完計画……」

ルシオラさんはそう呟いて、完全にその姿を霧に変えた。

《ロレント 遊撃士協会》

アタシたちが街に戻ると、霧はすっかり晴れて居た。眠っていた街の人たちも、意識を取り戻したという。アタシたちは街の人たちから感謝された。

犯人のルシオラを逃がしたのは残念だつたけど。

「あんたたちは十分よくやつたわ」

ショラさんは、アタシの頭を撫でて、励ましてくれた。

「アイナ、そもそも推薦してもいいんじゃない？」

シェラさんはカウンターに居るアイナさんにそう声をかけた。

ええ、私もそうおもひますよ

アタシが何の事だろうと疑問に思つてゐると、アイナさんは、エス
テルに紙を手渡していた。

「これは、ロレント支部の正遊撃士資格の推薦状よ。今のあなたたちは、準遊撃士だけど、正遊撃士になるためには、王国のすべての地方の支部から推薦を受ける必要があるの」

ショラさんはあたしの肩に手をかけて、ニッコリと話しかけてくれた。

「あなたたちは、ロント支部において正遊撃士になるだけの力があるって認められたのよ」

アタシはとても嬉しかった。

今までネルフのテストで高いシンク口率を出しても、使徒を倒しても、それで当然と褒められる事はなかつたから。

通信機が鳴る音が響いた。

アイナさんはその話の内容に驚いた様子だつた。

アイナさんは通信を切ると、言い出しにくそうに、重い口を開いた。

「通信はボース支部からよ。ボース支部で飛行船《リンテ号》が消息をたつたの。乗っていた乗客たちの安否は不明。乗客名簿の中には、カシウスさんの名前もあつたそうよ」

アタシはショックを受けた。

実の娘であるエステルは、きっと、もつとショックを受けてるだろうと思った。

「よつしゃー、ボース地方に行つて、父さんを助けに行くわよー！」

アタシが心配してエステルの方を見ると、握りこぶしを突き上げて言った。

「エステル、君は落ち込まないといふか限りなく前向き思考と言つか……」

ヨシュアは苦笑しながらそういつた。

お父さんが心配なのに、空元氣でもいつも前向きに振る舞えるエスティルの輝きの強さに、アタシは太陽を思い浮かべた。

アタシも太陽みたいになれるのかな……。

『ボース 遊撃士協会』

ボース支部の受付では、ルグランさんと「おじいさんがボクたちを迎えてくれた。

カシウスさんの事が気になつて、ボクたちに同行してきたシロウさんは知り合いみたいだ。

さつそく、ボクたちは例の飛行船消失事件について話を聞こうとするけど、捜索に当たつている王国軍の情報統制で、遊撃士協会にはまったく情報が入つてこないみたい。

しかし、情報を手に入れる手段がないわけではない、ヒルグランさんは話を続ける。

市からの調査職員ということにすれば、情報収集の口実が得られる。と言う事で、ボクたちは市長さんに職員にしてもうひょうこ、市長さんに会いに行く事にした。

市長邸に行くと、市長さんは留守だった。

教会にお祈りに行つたと執事さんが言つていた。

「サボリです。……私に一人分お祈りするように命じてビニカへ行つてしましました」

教会に行くと、そこにも市長さんの姿はなくて、その場に残されたメイドさんが、ちょっと怒つた様子で立つていた。

ボクたちは困つた。ボースの街はロレンツの一倍ぐらい大きい街だ。大きな街の門にエステルは驚いていたし。

ボースはリベル王国一の商業都市。

とりあえず、市長さんを探して、まず初めにこの街の名所である『ボースマーケット』に向かう事にした。

『ボースマーケット』は飛行船の事件のせいでいつもより活気がなかつたけど、デパートの地下みたいに、様々な店が立ち並んでいた。アスカとエステルはロレンツではあまり見られない外国ブランドの洋服を熱心に見ていた。

ボクはロレンツの街でアスカが買った、クリーム色のワンピースがあればいいと思うけどね。

エステルは前はスニーカーにスパッツと言つ男っぽい服装をしてた

けど、アスカに会つてからはスカートを穿くようになつたとか。

ボクはボースマーケットに集められた食材の多さに夢中になつてしまつていた。

ボクが八百屋の側に近づいたとき、女人が店主を叱り飛ばしてい

るのを見た。

後ろにはあの教会で会つたメイドさん、リラさんが立つてい。

じゃあこの女人が市長さん？

ボクたちに気がついた、メイドのリラさんは市長さんにボクたちを紹介した。

ボクたちは高級レストラン『アンテローゼ』で、詳しい打ち合わせをする事にした。

市長さんの話では、市長さんは軍の責任者であるモルガン将軍とちよつとした知り合いであり、市長さんの使いとしていけば、情報を教えてくれるだろうということだ。

ただし、モルガン将軍は遊撃士がかなり嫌いみたいだから、ボクたちが遊撃士だとばれないように気をつけないといけない。

ボクたちが話を交えながら食事を続けていると、店の一角が騒がしくなつた。

どうやらお店の高級ワインを飲んだけど、代金を払えない男の人故居たらしい。

その男の人は、店の従業員の人に詰め寄られても、涼しい顔をしている。

傍らにはリュートが置いてあって、外国のブランド品に身を包んだ、優雅な感じの金髪の男性だ。

市長さんはこれ以上騒ぎを大きくしたくないのか、その男の人があ曲披露することで、代金をチャラにする事に。

市長さんはこのレストランのオーナーだつたんだつて。

男の人は旅の演奏家、オリビエ・レンハイムと名乗つて、リュートを弾き始めて、歌詞を歌い出した。

さすが演奏家を自称するだけあって、演奏は上手かった。

演奏が終わると、オリビエさんはアスカに近づいて口説き始めたんだ。

アスカは今も可愛いけど、二二一年の「ちごく」と美人になつた。背はボクの方が高くなつたけど、体つきもさらに女らしくなつた。綺麗な金髪の髪と宝石のような青い瞳は強く人を惹きつけるだろう。ボクは気障つたらしい言葉で口説き続けるオリビエさんを睨みつけていた。

アスカも外面だけで声をかけて来るような男性は好きにならないはず。

多分、そうだと思う、けど。

オリビエさんはアスカに馴れ馴れしく近づいてくるけど、シホウさんが割つて入つて離していた。

本当はボクが割つて入りたいんだけど、まだアスカの彼氏じゃないからね……。
残念だけど……。

『ボース北 ハーケン門』

アタシたちはモルガン将軍の居るハーケン門に行く事になつた。

オリビエって男は、アタシたちが断つてもついてくる。

今はシェラさんがオリビエが近くに寄らないように見張つているから露骨に近づいて来ないけど、正直うつとおしい。

モルガン将軍は、飛行船は空賊の一味に奪われて、空賊の一味から犯行声明文と身代金要求が送られて来た事を教えてくれた。

でも、怪しんだモルガン将軍は、アタシたちが遊撃士だという事を見抜いてしまったの。

「身分を隠して情報を盗み出そうとするとは、そういう姑息な真似

をするから、遊撃士など信用できんのだ！」「いい加減にしなさいよ、このケチジジイ！」

怒るモルガン将軍に、ショーラさんが逆ギレしてしまった。

「こりゃ、收まりがつかなくなっちゃつたな、どうしようかと思つていい」と、オリビエがリコートを片手に歌い始めた。

オリビエの歌が終わった時、ショーラさんとモルガン将軍は、たがいに怒る気をなくして、アタシたちはモルガン将軍の部屋から追い出されるだけで、お咎めを受けずに済んだ。

アタシはオリビエの事を少しば見直してあげた。

だから、オリビエにお礼を言つたの。

そうしたら、オリビエは、アタシに話があるって。

アタシが着いていくと、オリビエはアタシの両肩をつかんで、キスをしようと顔を近づけて来た。

「助けて、シンジ……」

アタシはオリビエの唇が触れる直前に小さな悲鳴を上げて涙を流してしまった。

オリビエは驚いてアタシから離れた。

「すまなかつた」

と言つて、シンジたちが居る所へ駆けて離れていった。

その後、アタシの涙の跡を見つけて、ショーラさんはオリビエを激しく叱りつけていた。

エヌヌルとヨシュアはアタシを心配してくれている。

シンジは酷い顔をして、オリビエを睨みつけていた。

シンジは嫉妬してくれているのかな？

でも、シンジのそんな顔は嫌だよ。

アタシが大丈夫だと笑いかけると、シンジはやつと穏やかな表情に戻ってくれた。

『ボース ラヴェンヌ廃坑』

あたしたちは、街での情報収集の結果、ラヴェンヌ村の上空で大きな黒い影が目撃されたらしいと聞いた。

「じらみつぶしに全部探せばいいのよー。」

あたしは、この情報を聞く前に、そう言つてやつたら、みんなに呆れられた。

アスカの提案で、この街にたまたま滞在していた記者のナイアルさんと空賊の事件に関して情報取引をして、証言を聞き出すことができた。

うんうん、アスカはあたしの自慢の妹ね。

目撃者はラヴェンヌ村の子供だった。

でも村の他の住民は誰一人大きな黒い影を見かけていないので、誰にも信じてもらえなかつたようだ。

あたしたちは、村の北にあるこの廃坑が怪しいとやつてきた。

廃坑の入口はしっかりと施錠されていて、最近人が出入りした様子はなかつた。

でも、あたしは奥から風が吹いているのを感じた。

「もしかして、どこか広い空間に通じているのかもしれない

あたしが風の事を言つと、ヨシュアがそつと言つた。

「空賊は空から出入りしているから、入口に足跡が残つて無くても、居ない証拠にはならない！」

シンジが閃いたとばかりに、そう言葉を続けた。

ナイス推理、シンジ。

『三人寄れば文殊の知恵』ってやつね。

あたしたちが奥に進むと、昔露天掘りをしていた広場に出た。

そこには奪われた飛行船と、空賊の小型飛行船があつた。

そして、荷物を積み替えるように空賊に指示している、ジョゼットを見つけた。

「げげ、なんであんたがここにー。」

あたしの姿を見て驚いたジョゼットは、いきなり煙幕弾を打ち出した。

あたしたちが煙に驚いている間に、ジョゼット一味は小型飛行船に乗つて逃げていった。

一回も戦わずに逃げを打つなんて、あたしたちも随分と恐れられたものね。

飛行船の中には乗客は居なかつた。

空賊のアジトに連れ去られたみたい。

どうしたものかと、あたしたちが考えていると、飛行船の外からたくさんの人々の声が聞こえてきた。

あたしたちが外に出ると、すっかり王国軍に取り囮まれていた。

「まさか、おぬしらが空賊と結託していたとは思わなんだぞ！」

そう言って姿を現わしたのは、モルガン将軍だつた。

あたしは犯人じやないつて必死に訴えたけど、聞いてもらえなかつ

た。

「アタシたちは、犯人じやないよ……グスツ」

あーあ、ついにアスカが泣きだしちゃった。

連行しようとした王国軍の兵士たちはオロオロしている。

モルガン将軍が兵士たちを落ち着かせようとしているけど、効果がない。

アスカは両手で顔を覆つて大泣きしてる。

まるで、モルGAN将軍が悪者になつたムードが漂つてる。

「！」これだから遊撃士は困る……引き上げだ！」

モルガン将軍は、顔を赤くしてそう咳いて立ち去ってしまった。

結局あたしたちは、その場で釈放された。

兵士さんの話では、モルGAN将軍にはお孫さんの女の子が居るみたい。

『ボース 遊撃士協会』

厳重注意をされた僕たちは、空賊事件に関しては、王国軍の人任せるしかなかつた。

しばらくした後、王国軍によつて空賊のアジトが突き止められ、乗客は全員無事に救出された。

だけど、救出された乗客の中に父さんの姿はなかつたんだ。

乗務員の人の話によると、ボースから離陸する前に降りたらしく。父さんならこの空賊事件も放つておかないはずなのに。

ルグラソさんは、この事件の主犯とされる空賊一味、『カプア一家

『に疑問を持つていいやつだつた。

彼らは窃盗などの小さな事件は起きていたが、今回のような大きな事件を起すとは考えられない。

僕は結社が関わっているのかと思うと、気分が悪くなつて一人で外出した。

『ボース 空港』

僕はいつの間にか空港に来ていた。

今まで空賊事件により運休されていた空港は、まだ飛行船がラヴェンヌ廃坑で修理中のため人気が無い。

僕が一人で佇んでいると、エスティルがやつて來た。

エスティルは、『星の在り処』をハーモニカで吹くように頼んできた。

僕は吹き終わると、エスティルに呟いた。

「相変わらず、何も聞かないんだね」

「だつて、なんか、どーでもよくなつたし」

エスティルはけろりとしてそう答えた。

「どうして、何も聞かずに一緒に暮らせたりするんだい？　あの日、父さんに拾われた得体の知れない子供を……どうして君たちは受け入れてくれるんだい？」

僕はさらにエスティルに問いかけた。

「あたりまえじゃない。家族だから。あたしは父さんの過去だつて、全部知ってるわけじゃないのよね。でも、あたしと父さんは家族で

あることに変わりはないじゃない？ 多分それは、父さんの性格とか、クセとか、料理の好みとか。そういうた肌で感じられる部分をあたしがよく知ってるからだと思つ。ヨシュアだって、それと同じよ

エステルは極上の笑顔でそう答えてくれた。

「さあ、アスカとシンジも待つてゐる。帰りましょ

僕も笑顔でエステルの後をついて行つた。

『ボース フリー デンホテル』

ボクたちはカシウス父さんの消息を掴むため、しばらくボース地方に滞在することにした。

ボクたちがホテルの部屋で休んでいると、ものすごい大きな破壊音と、街の人たちの悲鳴が聞こえてきた。

ボクたちが驚いてホテルから出でみると、街の中心にあるボスマーケットの屋根に、大きな竜が着地していた。

その竜の側に、背丈ほどもある大きな剣を背負つた銀髪の青年が立っていた。

その人は何もせずに、じっとこちらを見ているだけだつたけど……。

「レーヴェ兄さんー？」

ボクの隣に居たヨシュアはその人の事を見て、驚いて声を上げたんだ。

その声を聞くと、その人は口の端だけを歪ませるように微笑んで、

大きな竜の背中に飛び乗つて、そのまま振り返りもせずに竜に乗つて飛び去つて行つた。

ボクたちは呆然と見送るしかなかつた。

ボクはヨシュアに、竜の背中に乗つて行つた男の人の事を聞いた。ヨシュアは、彼は結社の執行者の一人だ、としか教えてくれなかつた。

結社の執行者を放つて置くわけにはいかないので、ボクたちは竜が飛び去つた方向から検討を付けて、霧降り峡谷へ向かつた。ボクたちが目撃した竜は、『古竜レグナート』と呼ばれる竜だつた。竜は十数年前に目撲されて以来、姿を見せなかつたらしいけど、結社がどういう形で関わつてゐるんだろう。

『古竜の住処』

僕たち四人は古竜の住処と呼ばれる、巨大な鍾乳洞の一番奥の巨大な広間に辿りついた。

ここに古竜レグナート、そしてレー・ヴェ兄さんが居る。

僕の予想通り、古竜レグナートとその側にレー・ヴェ兄さんが立つて待ち受けていた。

「久しぶりだな、脱走者のヨシュア。俺はお前だとはいえ、手加減はしないぞ」

僕たち四人は父さんに鍛えてもらつたとは言え、まだまだ未熟者の遊撃士だ。

特に結社の執行者として改造された僕と違つて、他の三人は素人に近い。

古竜と剣帝を同時に相手にしたら無事では済まない。

どうすればいいんだ……。

僕の全身に冷汗が浮かんできた。

「どうした？ 戰う気が無くてもひっから行くぞ」

レー・ヴェ兄さんがそう言つて、大剣に手をかけた。

「待て！ 僕が相手をする！」

僕は反射的に叫んでいた。

「お前が『剣帝』の俺に正面から戦いを挑んで、勝てるとも思つのか？」

そうだ。僕の特技は暗殺。
不意を打たないと勝ち田はない。
でも、エスティルたちを巻き込むわけにはいかない。

「いいだろう。その一騎打ち、受けた！」

レー・ヴェ兄さんは古竜レグナートを押し止め、ゆっくりと前へ歩いて來た。

それに応じて僕もエスティルたちを止めて前へ歩いていく。
僕の懷に飛び込んでの短剣での一撃は、レー・ヴェ兄さんの大剣に弾かれてしまった。

今度は僕は、背後から回り込もうと、素早い動きでレー・ヴェ兄さんの周囲を回る。

また間合いに入つた時に弾き返されてしまった。
僕はレー・ヴェ兄さんにダメージを与えない。

それに対してレー・ヴェ兄さんは僕に小さな刀傷を負わせていく。

「さあ、もういいでしょう。壊れた人形の始末をしてしまいなさい」

広間の奥の物陰から、アルバ教授が出てきてそう言った。

なぜ、あの男がここに…？ 一体いつから？

久しぶりに会うアルバ教授は、最初であつた時の穏やかな表情とは似つかない、凶悪な人相を浮かべていた。

「ヨシュア君。いえ、執行者ナンバー13。あなたの役割は終わりました。御苦労さま。解放してあげましょう」

アルバ教授がパチンと指を鳴らすと、僕の頭に記憶が蘇つて来た。アルバ教授、いや、ワイスマンに父さんについて報告する僕の姿が。告し続けた

「ヨシュア君。あなたの任務はカシウスの暗殺ではない。カシウス

の監視ですよ。あなたはずっとカシウスの動向を無意識のうちに報告し続けていたんだ！」

ワイスマンの冷酷な声が聞こえる。

そうだ、僕はずっと父さんを、エステルを、シンジとアスカを裏切り続けていたんだ！

「嬉しいでしょう。これからはエステル君たちと一緒に暮らせるのですから」

ワイスマンの言葉が続く。

「あんた、ひどいじゃない！ そんな事を言つてヨシュアが一緒に暮らせるわけ無いじゃない！」

エステルの怒鳴り声が聞こえる。
でも、僕はずっと動けないでいた。

「観念したようだな」

レーヴェ兄さんが、剣を構える。
僕はエステルたちの方に振り向いて、一つ言った。

「今までありがとうございました。さよなら」

第五話 守るべきもの

ヨシュアはボクたちの方に振り向いて、とても悲しそうな表情で、じつ言つた。

「今までありがとうございました。さよなら」

ヨシュアの後頭部に剣を振り下ろそうとするレー・ヴェさん。

「イヤアアアア！」

エスティルの叫び声と同時に、ボクは耐えきれなくなつて、導力銃の引き金を引いた。

ボクの放つた弾は、レー・ヴェさんの剣に弾かれた。

レー・ヴェさんはボクに目を向けて、問いかける。

「お前はなぜ邪魔をする。死にたいのか」

「ボクはヨシュア・ブライトの弟、シンジ・ブライトです！」

ボクは銃を構えたまま、大きな声でそう言つた。

その言葉に反応したヨシュアは、飛び上がつてレー・ヴェさんから間合ひをとつて、じつ言つた。

「僕は過去の結社の呪縛を断つ！ 断てない大切な人との今の絆があるから…」

「ま、またしても私に逆らうのですか、この人形め！」

アルバ教授は金切声をあげる。

すると、レー・ヴェさんは跳躍してアルバ教授を切りつけた！

黒い障壁がレー・ヴェさんの剣を一瞬阻む。

黒い障壁は一瞬で消えたが、レー・ヴェさんの剣速を鈍らせるのに十分だつたようだ。

剣はアルバ教授を切り裂いたが、致命傷は『えられなかつた。

「おのれ、だが実験は成功だ！ 覚えてるおおお！」

アルバ教授はそう叫ぶと、転送の魔法でその場から消えた。アルバ教授の姿が消えた後、ボクたち三人はヨシュアの元へ近づいて行つた。

「ごめん。何と言つて謝つていいか、分からないんだ」

「笑えばいいとおもうよ」

ボクがヨシュアに向かつてそつと、ほつとしたように柔らかな笑顔を見せてくれた。

「ヨシュア、やつとしがらみを振り切る強さを見せたな。……でなければ、俺はワイスマンを止めなかつた」

レー・ヴェさんが近づいてきた。

顔には心なしか優しい笑みを浮かべている。

「みんな、そう警戒しないで。これから、レー・ヴェ兄さんにについて話すよ」

そうヨシュアが喋り出した時、凄まじい咆哮が洞窟内に木靈した。しまつた！ 古竜レグナートが動き出した！ レー・ヴェさんは、素早く剣を構える。

「マズイな、俺が相手になると、奴も俺も無事では済まなくなる」

古竜レグナーートは怒り狂った様子でこちらに顔を向けて来る。そして大きく息を吸い込んだ。

「炎のブレスなんか吐かれたら、アタシたち仲良く丸焦げじゃない！」

アスカはそう言つてボクに抱きついてくる。

ちくしょう。せめて、丸焦げになる瞬間までアスカを抱きしめていいよう。

ボクはぎゅっと目をつぶつてその瞬間を待つた。

だけど、また竜の咆哮が響き渡ったんだ。

目を開けるとカシウスさんが持っていた棒で、向う脛を思いつきり叩いていた。

暴れていた竜は痛みによつて冷静を取り戻したみたいだ。

「……久しぶりだな。人の子よ」

驚くことに古竜レグナーートはカシウスさんに人間の低い声で話しかけている。

「もーまったく父さんは、おいしいところだけどるんだからー。」

エスティルは、言葉とは裏腹に嬉しそうだ。

ボクは抱き合つていたアスカに気がついて、お互赤くなつて慌てて体を離した。

「まあ、俺がここに来た事情は後で話すとして……。先にヨシュアの兄さんの話を聞かせてもらおうじゃないか」

カシウスさんが促すと、ヨシュアは話を始めた。

「レーヴェ兄さんは、僕の姉さんの恋人だつたんだ」

ヨシュアはそれからポツリポツリと、自分が六歳の頃体験した『悲劇』について語つていった。

住んでいた帝国のハーメル村が突然炎に包まれ、傭兵崩れらしい野盗たちが襲ってきた。

ヨシュアは姉のカリンさんと逃げ出そうとしたけど、待ち伏せしていた傭兵の男に、お姉さんはが背中から斬り殺されてしまった。それに逆上したヨシュアが、落ちていた銃を拾つて、その男を撃ち殺したとの事。

その後駆けつけたレーヴェさんに、まだ息があつたカリンさんが、弟のヨシュアを頼んだ事。

小さくして隣人たちを失い、愛する家族を失い、人殺しまでしてしまったヨシュアの心は壊れてしまつたそうだ。

そこで結社のアルバ教授、本名はワイスマンと名乗る男に拾われて、ヨシュアは結社の暗殺者となつた。

「でもね、僕もつらい過去を乗り越えられると思つてゐる。今は家族がいるからね」

話終えたヨシュアは笑顔でそう言つた。

ボクもアスカも小さい頃につらい体験をしていい。

でも、ヨシュアの言つた通りみんなで乗り越えていこう、と思つた。

「実はな。俺がここに居るのは、帝国と王国の国境のハーケン門のすぐ北にある、ハーメル村に調査に来てたからだ。ハーメル村の襲撃は、王国の侵略に見せかけるための帝国の軍部の陰謀という噂が

ある。最近になつて、帝国の軍部が裏で糸を引いて、帝国の遊撃士協会を襲つてゐるという動きもあつてな。そこでだ。俺は帝国で軍部と、多分それに絡んでゐる結社の動きを抑えようと思つ。お前たちは、遊撃士になるための旅に出たんだろう？ それならこのまま国内の他の地方を回つて、結社の動きを抑えてくれないか？」

カシウスさんが長い話を終えると、今まで黙つていたレー・ヴェさんが、こう言つた。

「では、帝国では俺も同行させてもらおう。俺はもう結社には戻らないからな」

「えつ、レー・ヴェ兄さんは僕たちと一緒に来てくれないの？」

ヨシコアは残念そうに言つた。

レー・ヴェさんは優しくヨシコアの頭を撫でながら言つた。

「俺がお前たちの側に居ると成長の妨げになる。……それに、また会えるや」

『ルーアン地方 マノリア間道』

遊撃士協会ボース支部に戻つたアタシたちは、ボース支部の推薦状をもらって、ルーアン地方へ向かつた。

マノリア間道は海岸沿いの街道で、右手には群青色の海が広がり、潮風にアタシの自慢の髪もサラサラなびいている。

シンジは綺麗なこの景色よりも、このアタシの事を見てくれてるのかな？

「あー、お腹すいたー。何か食べよつよ

エステルはマノリア村に到着すると、ランチを食べようと提案した。エステルってなんでこう食いしん坊のかしら。色気より食い気。アタシたちは村の食事処《白の木蓮亭》に行くと、マスターに特製弁当を買って村の風車の前にある展望台で食べることを勧められた。アタシとエステルはサンドイッチ、シンジとヨシュアはパエリアのランチボックスを買つた。

シンジがマスターに買い物の割引スタンプを押してもらつていてるのを待つっていたアタシが、シンジと一緒に展望台に着いたときは、すでにエステルとヨシュアが、二人掛けのベンチに隣り合つて座つてお弁当を広げていた。

エ、エステル！アタシとシンジが一緒に座るしかなくなっちゃたじやない！

アタシはシンジと一緒に隣のベンチに腰を下ろした。アタシは隣に居るシンジを意識してしまつて、サンドイッチがなかなか喉を通らなかつた。

「ねーヨシュア。ちょーだい、あーーん

アタシは、ヨシュアに向かつて口を大きく開けて顔を突き出しているエステルに驚いてしまつた。

「な、なにやつてるのよー？」

アタシは顔を真っ赤にして叫んだけど、エステルはケロリとして、こう答えた。

「ヨシュアのパエリアがおいしいから分けてもらおつかと思つて」

ヨシュアはため息をついて、エステルにパエリアを食べさせる。アタシはその姿を見て羨ましくなった。

「シンジ、アタシも食べたいけど、手がふさがってるのよねー。だから、ほり」

シンジは多分わかっているんだと思う。真っ赤になつて震える手でスプーンでパエリアを一杯すべつて、アタシに食べさせた。

「ほら、エステル。君がどんなに恥ずかしい事をしたのか、わかつたかい？」

アタシとシンジの姿を見ながら、ヨシュアはツッコミをいた。

「ああつー。」

エステルが大声を上げ、頬に両手をあてて赤い顔をした。

エステル、今になつてやつと気がついたの？やつぱり鈍感ね。

「ヨシュア。好きでもない女の子にこんな事をされちゃ、迷惑だよね？」

エステルは珍しく落ち込んだ様子で弱々しく質問した。

「エステル。僕は好きじゃない女の子に、そんなことしないよ

ヨシュアはエステルの肩に手をかけて、側に寄せた。

シンジも……きっとそうだよね。

アタシは勇気を出してシンジに話しかける。

「ねえシンジ。また……キスしようか」

アタシがそう言つと、シンジの顔はさらに赤くなつた。
けど、次の瞬間、暗い顔をしてこいつ言った。

「どうせ、暇潰しなんだろう?」

アタシはその言葉で、シンジが傷つけたこと気がついた。
それはちょうど一年前。

この世界に飛ばされる直前、シンジのママの命日にキスをした。
あの時は確かにミサトとデートした加持さんに対する当つけの
気持ちがあつたから、キスの理由を暇つぶしだつていつてしまつた。

「違う。アタシはシンジが好きだから、キスしたいの」「
でも、アスカは昔、加持さんが好きだつて言つてたじやないか」

シンジがそう言いかけると、エステルの大音量が飛び込んできた。

「だーつ！ アスカは今、シンジが好きだつていつてるんでしょー
が！ 大事なのは今！ 過去のどーでもいことより、今を大事に
するつて言うのが、あたしたちの約束でしょ？」

「うん、わかったよ」

シンジは真面目な顔で頷くと、顔を近づけた。
唇と唇が触れあつ。

ファーストキスは最悪だったけど、セカンドキスは優しく長いキス
だつた。

あたしはアスカとシンジがキスをするところを、ヨシュアと一緒に見守っていた。

アスカとシンジはお互いの気持ちを抑えていたんだね。キスが終わると、アスカはシンジの肩に頭を乗つけて、幸せそうに寄りかかっていた。

あたしも…あたしもヨシュアと、キスしたいな。でも、ヨシュアはきっと色気がないあたしの事を女だとは思つてないんだ。

ヨシュアが突然あたしに顔を近づけてきた。唐突なファーストキス。それは短かつたけど、あたしは受け入れる事が出来た。

「よかつた。僕も怖かつたんだよ」「やだなあ、ヨシュアも怖かつたんだ、お姉さんとしては……」

そこまで言いかけたあたしにヨシュアがクスッと笑つてツツ「///」を入れる。

「もう、お姉さんじやないだろ？？」

あたしもヨシュアの肩に頭を乗つけて、静かに展望台から見える景色を眺めた。

『ルーアン 遊撃士協会』

「……そろそろ、行こうか？」

ヨシュアが惣氣続けるボクたちに「シッ！」を叫いたのは、群青色の海が一面茜色に染まった頃だった。

遊撃士協会のルーアン支部に着いたのは日が暮れてからだった。

「ボース支部のルグラン爺さんから出発の連絡があつてから、ここに到着するまでずいぶん時間がかかったようだけど、何か事件があつたのかい？ 報告してくれれば、遊撃士協会から報酬を出すよ」

受付のジャンさんはそう言つてくれたけど、ボクたちは本当の事を言えるわけも無く、「こまかし笑いを浮かべた。

「緊急の依頼は無いけど、細かい依頼ならあるから、キリキリ働いてくれよ」

ジャンさんはボクたちに細かい依頼の内容を説明した後、こう話を切り出した。

「そうだ。依頼じゃないけど、各地で目撃されている幽霊について情報を集めてくれないかな？」

それを聞いたアスカとエステルは拗つて嫌な顔をする。

「だつて、そんなの見間違いかもしれないし……」「時間の無駄よね～」

アスカとエステルは否定の言葉を口にした。

ボクとヨシュアは顔を見合させて、クスリと笑つて、調子を合わせる。

「幽靈が怖くて逃げるのかい？」

「そうだね、そんなに情けないとは思わなかつたよ」

「「な（あ）んですってー！」」

挑発に乗つた二人は、幽靈調査の依頼を引き受けた。

「おめーら、上玉一人とイチャイチャしてんじゃねーよ。」

ボクたちは、街の不良グループ『レイブン』の一人が、幽靈を目撃したという噂を聞いて、詳しい話を聞こうと倉庫まで来たんだけど……。

絡まれてしまつた。

「エスティル。やつと女の子つて認められたね。しかも上玉だつて。おめでと！」

「つむせーーー！」

夫婦漫才をしているエスティルとヨシュアを前に、不良たちはさうこイライラして來たようだつた。

「そんな生つちろい小僧達なんか放つといて俺たちと楽しもうぜーーー！」

不良の一人が軽い口調でそういうと、一気に激高するアスカとエスティル。

「てめえら、何しているんだ？」

不良たちとの戦いに突入すると思われたとき、赤毛にバンダナを巻いて大剣を背負つた男性が、声をかけながら僕達に近づいてきた。

「ア、アガットさん！」

不良たちはアガットさんと言う人にに頭が上がりないようだ。中には這いつくばつて土下座している人もいた。

アガットさんのおかげで、幽霊に関する情報を不良達から聞き出したボクたちは、次の目撃者がいる『マーシア孤児院』に向かった。孤児院に向かう途中の街道で、ボクは孤児院から飛び出してきた、藍色のショートカットの制服の女の子に激突して、お互いに尻餅をついてしまった。

彼女はハツツとするとスカートを抑えながら立ち上がる。

「す、すいません。私がよそ見をしてしまって。急いでいるんで失礼します」

そう言つて、その子はそそくさと立ち去つてしまつた。
ボクはその制服の女の子のスカートの中身を見てしまつていた。

「何色だったのよ？」

「白かつたよ」

ボクはアスカの質問に正直に答えてしまつた。

それからアスカは怒つて、ボクがいくら謝つてもそつけない返事しかしてくれなくなつた。

マズイこと言つちゃつたな……。

その後の聞き込みで、ボクたちは幽霊が消えていく方向から推測して、『ジェニス王立学園』の近くがもつとも怪しいという事で、その近くで重点的に情報収集を行う事になつた。

『ルーアン地方 ジョニス王立学園』

アタシたちが学園の近くで情報を集めたいと遊撃士協会のジャンさんに相談すると、しばらく学生として在籍してみてはどうかと勧められた。

学園側も生徒が落ち着いて勉強が出来なくなるのは困るらしい。ジョニス王立学園に着いたアタシたちは学園長の部屋に出向いた。転校生として学園に滞在しながら、生徒たちから情報を集めて欲しいといつう。

学園を案内する学生として生徒会役員である三人の生徒が呼ばれた。生徒会長のジル、副会長のハンス、そして街道でシンジとぶつかったクローゼと言づ子。

クローゼはシンジと目が合つと、ぶつかつた時の事を思い出したのか、顔を赤らめた。

シンジも顔を赤くしている。

アタシはそろそろシンジにいつも通りに接してあげようかと思ったけど、イライラしてシンジを怒った顔で睨みつけてしまった。

アタシたちは連れだつて学園長の部屋を出ると、本館に隣接するクラブ棟の一階にある学食に向かった。

アタシたちは自己紹介をした後、依頼の話はそこそこに、お喋りに時間を費やした。

気がつくと、シンジとクローゼは料理の話題で、ジルとヨシュアは本の話題で話が盛り上がっている。

アタシとエステルはお互いムスッとした顔で黙り込んでいた。

ハンスが話しかけてくれたけど、全然話は弾まなかつた。

それからアタシたちは男女のグループに別れて、情報収集を行う事にした。

調査する場所に男子ロッカールームと女子ロッカールームがあるから。

クローゼは調査中にもアタシにシンジの事をいろいろ聞いてきた。

シンジとクローゼが楽しそうに話しているのを見ていたアタシは、クローゼみたいなおつとりとして優しくて料理もできる女の子の方が、シンジには相応しいかも知れない、と思つた。

アタシはシンジに告白はしたけど、クローゼに勝てるかどうか自信はなかつた。

アタシはクローゼにシンジと恋人同士であるとは言えなかつた。幽霊の目撃談もないまま、学園生活はしばらく続いた。

しかし、ある日クローゼがアタシにこんな事を言いだしたのだ。

「私、シンジちゃんに告白してみようと思つます」

ついに恐れていた事が起つてしまつた。

シンジはアタシを振つて、クローゼと付き合つてしまふんだろうか。

クローゼはシンジを学園の裏庭に呼び出していた。

「クローゼさん、大事な話つてなんですか？」

待つっていたシンジが、クローゼに問いかける。

そしてクローゼが告白の言葉を言おうとしている。

「ダメっつー！」

アタシは校舎の陰から飛び出すぐ、クローゼに向直つた。

「お願い、アタシからシンジを奪わないで！ アタシにはシンジしかいないの。シンジの代わりはないの……」

アタシはペタンと座り込み、両手で顔を覆つて泣き出した。シンジはアタシの肩を優しく抱きしめてくれた。

「ふふ。告白する前に振られてしまいました。もうアスカさんを泣かさないであげてくださいね」

クローゼがそう言つて、アタシたちから駆けて離れていく音が聞こえた。

アタシは泣きやんで顔を覆つていた手を下した。

それに安心したのか、シンジがアタシを抱きしめる力も緩んだ。ふと、アタシは少し離れた前方の学園の壙の向こうの空中に、白い人影が浮かんでいるのが見えた。

白い人影をよく目を凝らして見ると、仮面と帽子を被つていた。白い人影はアタシと視線が合うと、帽子をとつてお辞儀をして、学園の裏手にある旧校舎の方へ消えていった。

「キ、キヤアアアアア――――！」

幽霊のようなものを見たアタシは悲鳴を上げて、シンジにまた抱きついた。

僕たち四人はアスカの目撃証言にしたがつて、旧校舎に向かつた。旧校舎は生徒が入り込まないよう、鍵がかけられているけど、しばらく前に鍵が盗まれたらしい。

必要な場合には、扉を壊すという許可をもらつていた。

扉には、『鍵は落ちたる首にあり』と書かれたカードが貼られていた。

多分、鍵が隠してある場所の暗号じゃないだろうか。

だけど、エステルはそんな事を気にせずに、扉を思いつきり叩いていた。

そうしたら、古いものだったからか、あっさりと錠前は壊れてしま

つた。

エステルは得意満面の笑みを浮かべているけど、アスカとシンジは呆然としていた。

僕はエステルにツツコミを入れる暇がなかつた。

「結果オーライよ！」

遊撃士としては、不合格だと思うんだけどな……。

旧校舎の玄関ホールでは、仮面と帽子を被つた男が立つていた。僕には見覚えがある。結社の執行者の一人だ。

「私は怪盗紳士ブルブラン。今日は諸君の究極の美を盗みに参上した」

彼は大仰に名乗りを上げた。

「うわあ、変態仮面！ 幽靈騒ぎはあなたの仕業ね！」

エステルは名乗りが気に障つたのか、怒つた様子だ。

「いかにも。私が狙う獲物は諸君が持つ光り輝くもの。それは、きぼ……」

「太陽だね！？ ボクの太陽を奪いに来たのか！」

シンジがブルブランの言葉を遮つて叫んだ。

「シンジ、一体どうしたのよ……！？」

アスカは呆然としている。

「アスカはボクの心を輝かせる太陽なんだよ……」
「シ、シンジ、なんて恥ずかしい事を、言つのよ」

「だから、きぼ……」

「ヨシュアも、エステルの事、そいつ言つてるよー。」

ええっ、僕に振るのかい！？

「ヨシュア、そ、それって本当……？」

エステルもこっちを振り返つて、照れ臭そうに聞いてきた。

「う、うん、太陽みたいな、って事だけど……」

僕まで落ち着かなくなつて、ざきまぎしてきた。

「シンジいー」

「ヨシュアあー」

エステルは太陽のような笑顔を向けると、僕に抱きついて來た。
そして、一度目のキス。

僕の瞳にはエステルしか映つていなかつた。

《ルーアン 遊撃士協会》

あたしたちが正氣を取り戻すと、変態仮面は姿を消していた。
なんだかいろいろ喋つていたけど、あたしたちは何も聞いちゃいなかつた。

アスカとシンジもお互いの事に夢中だったようだ。

変態仮面はラブラブモードに入ったあたしたちに愛想を飛かして立ち去り、幽霊事件は解決したみたい。

あたしたちが幽霊事件の顛末を肝心なところは誤魔化しながら報告していると、『マノリア孤児院』が放火されたという知らせが届いた。

目撃者によると、犯人はレイブンを脱走した三人組で、紺碧の塔に向かつたらしい。

レイブン絡みだという事でアガットが、マーシャ孤児院に関わるという事でクローゼが同行することになった。

紺碧の塔の最上階の部屋。

その部屋の入口の階段で、あたしたちは密談をする悪人たちの声を聞いた。

今回の事件の黒幕はルーアン市の市長ダルモアと、その秘書ギルバートだつたんだ。

「これで、あの孤児院を取り壊す手間が省けました。放火を含めた一連の事件もあの不良どもの仕業にできる。まさに一石二鳥というものですね」

秘書ギルバードは笑みを浮かべていう。それに答えるダルモア市長。

「つむ、これである土地を別荘地にすることができる。そして約束通りデュナン公爵に一億ミラで買つていただければ、我がダルモア家の財産と誇りは守られる」

「それがあなたちの目的ですか？」

怒りを抑えきれなかつたクローゼが飛び出してしまつた。

「ダルモア家の家屋を売れば、あなたたちの借金は返済できるはずです。なぜそうしないのですか？」

「あんな薄汚い孤児院と我が家を一緒にするな！」

「私の思い出の詰まつた場所を侮辱するなんて許せません！」

「市長ダルモア！放火の罪であたしたち遊撃士が逮捕するわ！」

あたしたち三人とアガットも階段を登つて部屋に突入した。あたしたちを見て、形勢不利と判断した市長は声を上げた。

「曲者だ、あえ、あえ！」

すると天井から元レイブンの三人組がストンと落ちてきた。表情は無表情で、目もうつろで、殺気だけを放つている。あたしたちは巧妙におびき寄せて三人組が固まつたところに、あたしたちの必殺技『チエインクラフト』をぶち込んでやつた。倒された三人組は、爆発して吹き飛んでしまった。

「人じやなかつたのか。道理で僕に気配が感じ取れないわけだ」「結社もここまで精巧な人型兵器を造れるなんて、侮れないわね」「どうやら、レイブンの奴らは無実のようだな」

ヨシュアとアスカとアガットは残骸を調べてそう言つた。

追いつめられたはずのダルモア市長はまだ余裕の笑みを浮かべている。

そして懐から杖を取りだすと、こう叫んだ。

「時よ、凍えよ！」

あたしたちの体が動かなくなつた。

「これは我がダルモア家に伝わる『封じの宝杖』。私以外が動けなくなるアーティファクトだ。一人ずつゆつくりと殺してやる」

ダルモアは不敵な笑みを浮かべてあたしに銃を向けた。

「汚い手でエスティルに触るな……。もしも、毛ほどでも傷つけてみる……。ありとあらゆる方法を使ってあんたをハツ裂きにしてやる……」

「ひ、ひいっ！」

ヨシュアの物凄い殺氣のこもった声に、ダルモア市長はパニックになつた。

そして、シンジとアスカの一人の居る方に銃を向ける。

「ふ、一人まとめて殺してやる、死ね！」

ダルモア市長は銃の引き金を引いた！

第六話 唇で交わした約束

ボクは市長ダルモアが血走った眼で、こちらに銃を向けるのを見た。隣にはアスカがいる。

ボクは撃ち殺されたアスカが血を流して倒されるのを想像した。そんなの嫌だ。

アスカを守りたい守りたい守りたい守りたい。

ボクは目をつぶって、それだけを考えていた。

銃弾が跳ねかかる音に目を開けると、ボクの前に金色の障壁が、アスカの前には白い障壁が展開されていた。

「「A・T・フィールド！？」」

ボクとアスカは目を丸くして驚いた。

驚いたダルモア市長はボクたちに向かって銃を乱射するけど、銃弾はすべてA・T・フィールドに弾かれた。

「ば、化物～！」

銃が効かない事に錯乱したダルモア市長は、杖を投げ捨てて、階段を上つて屋上に逃げていった。

その姿を見ていたボクの意識が急に途絶えた。

あたしはアスカとシンジの前に一色の光の壁が現れて、ダルモア市長の撃つた銃弾を跳ね返すのを呆然と眺めていた。
光の壁が消えた後、アスカとシンジは気を失つて倒れてしまった。

「てめえ、何逃げようとしてるんだ」

後ろに居たアガットが、こっそりと逃げようとしていた、秘書のギルバートを捕まえようとしていたみたい。

倒れたアスカとシンジをクローゼに任せて、あたしとピシュアは逃げたダルモアを追つて階段を上がった。

あたしが屋上に上ると、すでに逮捕されているダルモア市長を発見した。

取り囲んでいる兵士たちの服装は普通の王国軍の兵士と違つて豪華な感じ。

隣に居るピシュアに聞いてみると、多分、親衛隊だろうと言つた。あたしが大きな着いて頭上を見上げると、定期便より一回り小さい大型飛行船が浮かんでいた。

タラップから繩ばじーが下されて、そこから隊長クラスらしい女性と男性が降ってきた。

「罪人ダルモアを逮捕しました、ユリア隊長」

親衛隊の一人が女性隊長に向かつて敬礼する。

「御苦労」

そう答えたユリアさんはあたしたちに気づいて、いや視線はあたしだちの後ろだつた。

ユリアさんはあたしたちの後ろに立っていた人物、クローゼに向かつて敬礼していた。

「(命令により、参上しました、クローディア姫殿下」

ええ~つ、クローゼって王女殿下だったの!?

「エステルさん、黙つていてごめんなさい。私は普通の女の子の生活に憧れて、逃げていました。でも、みんなの姿を見て、私も王位を継いで国民を守る決意ができました」

「クローゼなら、良い女王様になれるよ」

「ありがとうございます。ただ、守りたい男性はまだ、居ませんけどね」

クローゼは嬉しそうな、ちょっと憂いを秘めた顔でそう答えた。

シンジは王女様を振つてアスカと付き合つてゐるんだつけ。

アスカがこの事を知つたら泣いて喜ぶかな？

もしかして、王女様に勝つたつてタカビーに……ならないよね？

クローゼはユリアさんと一緒に來ていたミュラーさんつて男の人と一緒に親衛隊の飛行船アルセイゴに乗つて行つてしまつた。

さすが王国一早い飛行船、アスカとシンジが目を覚まして屋上に上つてくるまでの間に豆粒みたいに小さくなつてしまつた。

『ルーアン地方 マノリア村』

アタシたちは事件解決の功績が認められて、ルーアン支部の推薦状をもらつた。

アタシたちは、ツアイス地方に行く前に、マノリア村に火事に遭つたマーシャ孤児院の子供たちの様子を見に行くことにした。

孤児院の子供たちの面倒は旅の巡回神父とシスターが見てくれているという。

神父さんたちは授業を終えて食事中らしい。

「ケビン、そっちのパエリアも食べたい。でも、このサンドイッチ

が大きすぎて、手がふさがつてゐる。だから、ほら、あーん

アタシたちが村の風車の前にある展望台に行つてみると、シスターさんがケビンと呼んだ神父さんに向かつて口を開けてゐる。それを見たアタシたち四人は固まつてしまつて、ケビンさんとシスターさんに声をかける事は出来なくて立ちつくしてた。

「ほ、ほら人がみてる。見られたら、わいらの事恋人同士と誤解してまうねん」

「ケビンは私の事、嫌いなの？ グスン」

シスターさんは冗談混じりに嘘泣きの仕草をしていた。

「そないな事いわんといてや。嫌いやない、リースのことメッチャ好きやねん」

ケビンさんはまかし笑いで明るく答えた。

「嘘。今でもルフィナ姉さんが好きなんでしょう」

リースさんは急に深刻な表情になつた。

ケビンさんもその雰囲気を察してか、今までの軽い調子を崩して、話出した。

「ルフィナ姉さんは憧れていただけや。でもワイはリースを好きになる資格なんて無い。ルフィナ姉さんを殺してしまつたわいはリースを傷つけるだけや……」

その言葉を聞いたアタシは見ず知らずのケビンさんを思いつき殴つてしまつた。

「アンタ、バカア！？ 人を好きになるのに資格なんているわけ！？ 好きなら好きって言えばいいのに… 一緒に居たいなら居たいって言えばいいのに！」

「あたしもアスカと同意見よ。過去は過去、大事なのは今の気持ちなんだからっ！」

エステルもアタシの言葉に続いてくれた。

ケビンさんはアタシの突然の行動に呆然としていたけど、ふつ、と微笑むと殴られた頬をさすりながら、こわい声で言った。

「その通りやな。ワイはリースと共に歩いていきたいと思つてる」

その言葉を聞いたリースさんはケビンさんに抱きついた。

「ケビン、やつと心を開いてくれた。今までのあなたは誰にも心を開いていなかつた。空っぽの笑顔を見ていて辛かつた……」

リースさんは涙を流しながらそう言った。

「さあ、キスしちゃいなさいよー！」

アタシがそう言つと、リースさんはアタシたちの前でケビンさんの唇を奪つた。

ちょっと長めのキスが終わつた後、リースさんはアタシを睨んでこう言つた。

「ケビンと恋人になれた事には感謝しますけど、人をいきなりグーで殴るなんて、お行儀が悪すぎますー！」

アタシはリースさんに説教を喰らう羽目になつた……。

『ルーアン地方 ツアイス地方 カルデア隧道トンネル』

カルデア隧道。ルーアン地方からツアイス地方へ徒步で行くにはこの洞窟を通らなければならぬ。

アガットさんを先導役として僕たちは進んで行くと、前方から女子の悲鳴が聞こえた。

先頭を歩くアガットさんはいち早く駆けつけ、女の子を襲っている魔獣を追い払つた。

「ひ、チビスケ。一人で何をやつてるんだ！」

アガットさんに助けられた女の子は、僕たちよりも年下のようだった。

「ふえつ。ごめんなさい。どうしてもやらなきゃいけない仕事があつたんです」

アガットさんは、それ以上強く怒る事はできなかつた。女の子はツアイス工房の見習い、ティータと名乗つた。

確かに導力バズーカと作業服のツナギに耐熱ゴーグルと、工房士らしい服装をしている。

ティータは目的の洞窟内の照明の修理を終えると、僕たちを護衛として帰る事になつた。

ティータはアスカと導力技術について難しい話題で盛り上がり始めた。

アスカの事を気に入つたティータは、僕たちを家に招待して夕食を

「駆走してくれた。

『ツァイス ラッセル家』

ティーダの家に案内された時は、アタシは驚いた。

ティーダがリベル王国の一番の導力技術者、ラッセル博士の孫だつたなんて。

ラッセル博士は、ちょっと発明狂な所があるけど、人のいいお爺さんって感じ。

ティーダの両親も外国から帰ってきていたみたい。

お母さんのエリカさんはパワフルな女性で、ラッセルさんと喧嘩はよくしているし、

ティーダに近寄るアガットを排除しようとしたりしていた。

アタシの事を気に入つて娘にしたいって言ってくれた。

その気持ちだけ受け取つておく。

お父さんのダンさんは穏やかな人で、ティーダの家庭は暖かいんだなと思った。

「湖に巨大な人型兵器が墜落したつて噂を聞いて、外国から戻つて来たのよ」

エリカさんの言葉を聞いて驚いたシンジは食べていた夕食を噴き出してしまった。

シンジ、ぼろを出さないといいけど。

「ワシも調査に行きたいんじゃが、最近妙な連中がウロウロしているからのう」

「王国の情報部の連中が奴らと結託して邪魔してるのよ。何を企ん

でこるのかしづ

アタシとシンジはその話を聞いて、エヴァンゲリオンが結社に利用される可能性がある事に気がついた。
アタシたちはラッセルさんたちを信じてすべてを打ち明ける決意をした。

「お前さんたちがあの機械のパイロットじゃとー。」

アタシたちの話をラッセルさんたちは信用してくれたらしくて、熱心に話を聞いてくれた。

「じゃが、今お前さんたちがあそこ近づくのは無理かもしれん」

ラッセルさんの話によると、謎の組織は湖の近くに建物を建てて、しかも王国の情報部まで根回しして部外者を立ち入り禁止にしているらしい。

ラッセルさんが出会った謎の組織の責任者はヒゲ面のサングラスを掛けたおっさんだったそうだ。

「アルバ教授じゃなさうだけど……。結社の幹部の一人かな?」

シンジが腕組みしながらそう呟いた。

「うーん、僕が知っている結社の執行者の中にはそんな人は居なかつたけど」

ヨシュアは考へ込む仕草をしながらそう言った。

結局結論が出なかつたけど、ラッセル博士は家族総出でアタシ達のサポートをする事を約束してくれた。

『ツアイス 遊撃士協会』

「えー！ 温泉に入れないのー？」

アスカはツアイス地方に『エルモ温泉』と言つ觀光地がある事を知ると、とても喜んでいた。
だけど、温泉の源泉が原因不明の沸騰を起して入れない話を聞いて、不貞腐れた表情で大声を上げた。

「こいつなつたら、アタシたちの手で温泉を取り戻すのよー！」

うわあ、アスカが燃えている。
温泉に入った事のないエステルとヨシュアにはよくわからないうだ。

他に受ける依頼はあつたのに、アスカに引っ張られるようにボクたちはエルモ温泉に向かった。

温泉の奥地では無精ヒゲに黒いサングラスの長身の男性がボクたちを待ち受けていた。

「俺は結社の執行者一人、ヴァルターだ。あいつの言うとおり、温泉に異常を起こしたら、お前たちがノコノコやって来たわけだ」「僕たちだけをおびき寄せるために、この騒ぎを起こしたのか」

ヨシュアはそつ言つて、短剣を構える。

「俺は今までの執行者と違つて、半端じやねえぞ。……お喋りはこれまでだ。行くぜ！」

ヴァルターはそう言い終わると、ヨシュアに凄まじい勢いで拳を叩きこむ！

いつも動きが素早いヨシュアだけど、何発か喰らってよろけて倒れこんでしまった。

ヴァルターは、前衛に居たエステルも蹴散らして、ボクに迫つて來た。

ボクの武器は導力銃だ。接近戦ではひとたまりもない。

そうだ、A・T・フィールドだ！

ボクはA・T・フィールドが出るように念じてみた。でも、A・T・フィールドは全く出る気配がない。

「棒立ちとは、情けないやつだな」

呆然としているボクは一撃を喰らつて、床に倒れこんだ。ズキズキ痛む体のおかげで、床にひれ伏してるけど、意識はしつかりしていた。

ヴァルターは余裕を見せてアスカにゅっくりと近づいている。アスカは導力銃で攻撃しているけど、奴は全然堪えてない。

アスカを守らないと……！

ボクは立ちあがるうとするけど、痛みが酷くて体が動かない。すると、アスカとヴァルターの間に白いA・T・フィールドが出現した。

ヴァルターは驚いてA・T・フィールドにパンチやキックを叩きこむけど、破られることはない。

「これが話に聞いた『あの力』か！？」

ヴァルターは急に興奮して、A・T・フィールドに対する攻撃を強めた。

でも、僕が強いめまいを感じると、A・T・フィールドはしづらくなって消えてしまった。

「……つまんねえ。もう終わりかよ」

ボクの方に視線を向けて吐き捨てるように「ううう」と、ヴァルターはボクたちを置いて去ってしまった。

『ツアイス エルモ温泉 紅葉亭』

ヴァルターの残した機械を停止させると、温泉は正常に戻ったみたいだ。

僕たちはせっかくだから温泉に入つて行くことにした。ティータとアガットさんも紅葉亭に来ていた。温泉のポンプの修理点検の仕事だつたらしい。

「さあ、未知の世界へレッジゴー！」

エステルは子供みたいにはしゃいでいる。

当たり前だけど男湯と女湯は分かれている。

タオルは持つて入つていけど、湯船につけちゃいけないのがマナーミたいだ。

「ふう。体の痛みや疲れが消えてこくみうだ

僕は足を伸ばして入れるお風呂に満足していた。

僕たちが黙つて温泉を堪能していると女湯の方から声が聞こえる。

「アスカの胸つて……」

「エステルの脚つて……」

「ティータも……」

シンジがさつきから顔を赤くして股を押さえている。

「膨張してしまった……。恥ずかしい……」

そんなシンジを余所に、さらに女湯の会話の声は大きくなっていた。

「アスカさんたちはもう結婚してるんですか?」

ティータは僕たちの家族構成に疑問を持つているようだ。

「バ、バカ! 苗字が同じなのは家族だからよー。」

「えーいいじゃん。同じようなものだし。認めちゃになさいよ」「も、もうエステルつてば! そ、そうよアタシとシンジは婚約してるの!」

「ううう。あたしとヨシュアも結婚を前提に付き合つてるの」

会話を聞いたアガットさんが呆れてる。

「お、おめーらその歳で結婚を決めちまつたのかよ……」

僕も結婚してくれる程好きと言われたのは嬉しいと思つけど、いつの間に婚約までいたんだろう?

シンジとアスカから婚約の報告を受けた事もない。

シンジも苦笑している。

「兄弟が居るつて羨ましいです。わたしはおとーさんとおかーさん

が居ないときは、おじいちゃんは工房にこもつつきりだから、一人で寂しいんです」

「じゃあ、アガットにお兄さんになつてもうれぱいいじゃない」

「うんうん」

エステルの言葉に追従するようにアスカの頷く声が聞こえる。

「でも、おにーさんじゃ嫌だな。いつか私がお嫁さんに行く時にさよならしないといけないし」

「十年後ぐらいなら年の差なんて関係なくなるわよ」

「そうそう、その頃にはアガットが逃げられないよう既成事実を作つておけばいいのよ」

「な、何だと……」

アスカ達の言葉が聞こえると、アガットさんは青い顔をして重い足を引きずるように男湯を出ていった。

僕は男湯の奥に扉があるのに気がついた。

シンジに聞くと露天風呂の入口だという。

僕は露天風呂の入口の扉を開いた。ひんやりとした風が体を冷やす。風邪を引かないようにさつさと湯船に入る事にした。

僕が景色を楽しんだりすると、扉が開いてエステルが入つて來た。

「あー、とても広くて気持ちいい」

エステルは湯船の中で手足をバタつかせている。

「だからって、泳いじゃだめだからね」

僕はエステルにいつものように注意した。

「わかつてゐるわよ……ん？ きやあああああ！ なんでヨシュア
が居るのよ！」

エステルは慌てて両手を抱え込んで体を隠した。

「えつ、混浴つて書いてなかつた？」

「そんなの聞いてないわよ！」

僕はエステルの体をしつかり見てしまった。

本人は色気がないつていつてるけど、十分女の子らしい体つきにな
つてる。

「後ろ、向いてよね！」

僕がそう言われて慌てて後ろを向くと、エステルは慌てて露天風呂
を出でいった。

「アスカ、あたしをはめたわね！」

「何も聞かないで行くエステルが悪いのよ……」

「ヨシュアに裸を見られちゃつた。いつなつたら責任をとつてもら
わないとい！」

「あ、エステル！」

女湯からまた声が聞こえる。

響くとわかつていないのでどうか、もづ少し小さな声で喋ってくれ
ないかな。

エステルは出でていってしまったみたいだ。

僕も逆上せて來たので、浴場から外にでた。

アガツトさんもヨシュアも出ていつてしまったので、男湯はボク一人きりになってしまった。

「シンジー、一人なのー？」

女湯からアスカの声が聞こえる。

「うん、一人だよ」

「アタシもティーダが出ていって一人なの。じゃあ露天風呂で会わない？」

「うん」

ボクはしっかりと腰にタオルを巻いて、露天風呂に入った。入つて来たアスカもしっかりとバスタオルを巻きつけている。

「シンジ、ひょつとして期待してた？」

「そ、そんなまさか」

ボクがそういうと、アスカはバスタオルの胸元に手を当てる。

「アタシ、胸も結構大きくなつたんだよ。直接生で見てみる？」

ボクはアスカが本気で言つてゐるのか、それともからかつてゐるのか分からなかつた。

すると、ガサガサと露天風呂の周りの茂みが揺れて、ヒツジ姿の魔獣が姿を現して、すぐに逃げ出して行つた。

「こらー！ 最近現れる覗きつてアンタねー！」

激しく暴れたせいでアスカのバスタオルがほどけてしまった。

「…?」

……ボクはその後露天風呂でアスカと一人で気絶してしまって、心配して様子を見に来た女将のマオさんによつて救出された。部屋に戻つてしまふ後、ボクはアスカに廊下に呼び出された。

「シンジも……責任とつてよね」

その言葉に対するボクの返事は、唇と唇との接触だった。

「これは誓いのキス。ボクとアスカが婚約したつて事だよ」

《ツァイス 遊撃士協会》

あたしたちは温泉で休養を取ると、ツァイスの遊撃士協会で、細々とした依頼をこなす日々を送つていた。

ラッセル博士から、レイストン要塞の軍司令部に、ヴァレリア湖に墜ちたアスカとシンジが乗つっていたエヴァンゲリオンの調査に参加したいと打診してもらつてゐるけど、軍司令部は調査は情報部に任せているの一点張り。

そんなある日、遊撃士協会に緊急通信が届いたの。

「大変な事が起つたの。落ち着いて聞いてちょうだい」

受付のキリカさんはそう前置きして、真面目な顔であたしたちに話を切り出した。

「王都で情報部によるクーデターが起つたらしいのよ。……アリシア女王様と、クローディア姫殿下の【女帝】も不明らしいわ」

第七話 王都跳梁（前編）

『王都グランセル 遊撃士協会』

アタシたちは、結社による妨害も特に無く、遊撃士協会のグランセル支部までたどり着いた。

結社の幹部はアタシたちの顔を知っているはずなのに、どうして妨害がないのか。

アタシたちのことを無視しているのか。

それともわざと見逃しているのか。

どちらにしても、アタシたちは行動しなければならない。

グランセルの市街は、警備しているのが一般的の兵士ではなく、情報部の兵士だったこと以外は平和に見えた。

グランセル支部の受付では、エルナンさんという落ち着いた感じの男の人があたしたちを迎えてくれた。

「とりあえず、最初にすべきことは情報収集でしょう。結社に協力していると思われる情報部がどの程度活動しているのか、また女王親衛隊やアリシア女王様の様子も気になります」

たぶん、この遊撃士協会は厳重に監視されているに違いない。巡回中の兵士からも張りつめた空気が伝わってくる。

その状況下でどのくらい情報を集める事ができるんだろ？

「情報収集って、どうするわけ？」

アタシがエルナンさんに尋ねると、エルナンさんは考え込むような仕草をしてアタシの質問に答える。

「そうですね……手分けして王都の各地を回つてもうつか無いですね。まず王城に探しを入れなくては。リベル通信社はきっと有益な情報を持つてゐるはずです。それと大聖堂と帝国と共和国の大使館でも話を聞く必要があるかもしてません。さらに念を押せば歴史資料館や、空港、港湾地区、居酒屋やホテルなども……しかも、出来るだけ早くに」

「ボク達四人で手分けするにしてもかなり時間がかかりそうですね」

シンジが冷汗を垂らしながらそう答えた。

「……その心配はいりませんよ」

「へ？」

自信たっぷりに言つエルナンさんにエスティルが間抜けな声を出すと、入口の方からぞろぞろと足音が聞こえた。

「……久しぶりね。ボースで別れた時よりもかなり頬もしくなつているじゃない？」

「はあい、子猫ちゃんと小犬君達」

まず始めに声をかけて来たのはショーラさんとオリビエだつた。

「……お兄ちゃん、お姉ちゃん、私も力になりたいです！」

「このチビスケが行くつてダダをこねるからな。……俺は付き添いだ」

その後ろから現れたのはティータとアガット。

「……アスカちゃん！ エステルちゃん！ やつほー！」

「遅ればせながら参上しました」

ボースやルーアンで会つたことのあるアネラスさんやクルツさんまで来ているなんて！

「みんな、揃つたようですね。……実は私から王国各地の遊撃士、ギルドの支部に連絡を入れていたのです」

「エルナンさん、やるわね……」

アタシは感心してそう呟いた。

「まさか、父さんまで来ているとか？」

「いえ、カシウスさん達とは連絡が取れませんでした。ですが……」

エルナンさんがそこまで言つて、一階から見覚えのある一人が降りて来た。

……なんで遊撃士ギルドに居るのよ！？

「どうやら、上手い具合にみんな集まつたみたいやな」

「……良かつたわね、ケビン。何回も説明する手間が省けて」

巡回神父の服装の男性に、シスター服の女性。

マノリア村で出会つたケビンさんとリースさんだつた。

その互いの手はしっかりと握られている。

二人はアタシの姿を見て、嬉しそうだけ困つているような様子にも見える。

ケビンさんは反射的にほっぺたをおさえてる。

……グーでパンチはやりすぎたと反省してるわよ。

「以前にギルドがつかんだ情報によると、アルバ教授は王都の歴史博物館で、オーリ・オールというものについて調べていたようです」

「オリ・オール？」

アタシがエルナンさんに質問すると、代わりにケビンさんが答える。

「オリ・オールについては、ワイが説明するわ。そのために来たんやし」

「ええ、お願ひします」

エルナンさんがそう促すと、みんなの視線がケビンさんに集中する。

「ワイらが所属する七曜教会では周知の事実となってるんやけど……空の女神エイドスが古代の人々に七つの至宝を授けたって話は聞いた事あるやろ?」

「セプト＝テリオンですね」

ヨシュアの言葉にその場に居たエステル以外全員同意した。
日曜学校で教会の「バイン教区長さんが話してくれた話だ。
……エステル、アンタはヨシュアの肩にもたれかかって寝てばかりいるから分からぬのよ。

「オリ・オールは、セプト＝テリオンの一つで、輝く環とも呼ばれてる。……そして、ワイらはそう言つた古代の至宝、いわゆるアーティファクトの調査、回収、管理を行う仕事をしているんやけど……」

「なんど、君達は聖杯騎士団の一員だったのか」

ケビンさんの言葉を聞いたオリビエが驚いて大声でそう言った。

「いや~、まだペーぺーの新米なんですやけどね。……話を戻しますけど、オリ・オールは人間の願望を無限に叶えるものだと教会

には伝えられていて、最も大きな力を持つたアーティファクトの一つだと言われているんですね

「……ふええ、そんな凄いものがあるんですか？」

アタシたちの心の中の驚きを代表してティータがそう言った。

「さりに、これは教会の中でも高い地位の人達しか知らんことなんやけど、オーリ・オールがリベル王国のどこにあるつちゅう話や」

ケビンさんの言葉にアタシは驚いて息を飲んだ。
みんなも黙りこんでいる。

「アルバ教授と名乗つていいあの男、元々はノーザンブリアで孤児になつてもうて、七曜教会に引き取られた後は、司教にまでなつたんですね。それが突然、教会を裏切つて結社に入った。そして今、リベル王国方面の幹部になつてやつて来ているわけや」

「……ケビンさんは、結社についてどこまで存じなんですか？」

「そいやな……」
「ケビン……」

ヨシュアの質問に答えよつとしたケビンさんにリースさんがそつと耳打ちをした。

「そ、そやな説明はこれぐらいで十分やろ！ 大聖堂への聞き込みはワイラが引き受けた！ ほな、リース行こつか！」

「そうね、ケビン」

突然慌てた様子で一人は急いで出て行こうとする。

しかし、その時リースさんのお腹の虫が盛大な音を立てた！

「アハハハ！ リースさん、ご飯食べてなかつたんだ！」

エステルの笑い声につられて、アタシ達もみんな大爆笑してしまつた。

「ケビン！」

「すまんな、リース。夕方のタイムセールまでには仕事を終わらせ
るから、勘弁してや」

「もう、そんなことまでばらさなくていいじゃない！」

ケビンさんとリースさんの漫才みたいなやり取りに、アタシ達の笑
いは止まらなかつた。

これから国の運命がかかつた重大な作戦が始まるつて言つのに、緊
張感が無いわね。

でも、アタシはこんな温かい雰囲気のみんなが大好きよ！

『王都グランセル 西区画』

あたしとヨシュアは、リベル通信社のある西区画を中心^トに聞き込
みを行う事にした。

もちろん、真っ先に向かうのはナイアルさんの居るリベル通信社。
ツアイス地方で別れてからまだそんなに経つていないけど、ナイア
ルさんなら短期間でもきっと何かつかんでいるはず。

あたし達がリベル通信社を訪ねると、ちょうどビナイアルさんは編
集部室に居るみたいだつた。

「ナイアルさん！」

「おひ、Hスティルにコショアじやないか」

退屈そうに自分の席に座っていたナイアルさんはあたし達を見ると、嬉しそうに返事をした。

「ちよつと聞きたい事があるんだけど……」

あたしがそう言つと、ナイアルさんは黙つてどうづきHスチヤーをする。

「外にῆーヒーでも飲みに行かないか?」

ナイアルさんの視線の鋭さで、あたしは状況を察した。

「ええ、いいわよ。もちろん、ナイアルさんがおひつてくれるんで
しょ? 年長者として」

「はは、じこつめー」

あたしはおどけた様子でそつと行つてナイアルさんに会わせた。

「……と書つわけど、ちよつと行つります」

ナイアルさんが席に座つてゐる編集長さんにそつと断ると、編集長さんは渋い顔をして頷いた。

「わかった。でも、もう勝手な取材をするんじゃないぞ。これ以上不祥事を起つたら我が社が潰されてしまうからな」

「へいへい、分かりました」

あたし達がナイアルさんと一緒に廊下に出ると、上の階からドロシ

－さんが降りて來た。

「わーっ、Hステルちゃんとヨシコア君、来てたんだ」

「こなんにちよドロシーさん」

ナイアルさんは少し疲れた様子で溜息をついた。

「……これから外でコーヒーを飲むんだが、お前も来るか？」

リベル通信社から出たあたし達四人は、田と鼻の先にある「コーヒーハウス『パラル』へと入った。

「Hステルちゃん、ますます女の子らしさに磨きがかかったみたいだね。ヨシコア君と何かあったの？」

「うん、やっぱリドロシーさんにはわかっちゃう？　あの後温泉でヨシコアにね……」

「そんな話をしに来たんじゃないでしょ？」

ドロシーさんに言われて気分が盛り上がって答えそうになつたあたしは、ヨシコアのツッコミが入つた。

「温泉で何があつたんだって？」

ベテラン記者の勘が何かを嗅ぎつけたのか、ナイアルさんの目が鋭くなつた。

「ナイアルさんまで……」

「すまんすまん。会社の中では話せない事を話に来たんだつけな」

ナイアルさんはそう言ってカップに入ったコーヒーを飲み干した。

「僕達、情報部について調べているんですが……何か知りませんか？」

ヨシコアの言葉を聞くと、ナイアルさんは顔をしかめる。

「正直、役に立てる情報はつかめていないな。取材を申し込んでも情報部の兵士はだんまりだし、聞き込みをしているだけで正門から叩きだされた。……編集長も情報部を恐れてビクビクしてる」

「……そう、残念ね」

あたしは落胆してそう呟いた。

「では、何か変わった事は無いですか？」

「そうだな……最近、エルベ離宮に居る友人と連絡が取れなくなつたな。そういうばあそこにも情報部の連中がたむろしていたな」

「それって、重要な話じゃない！」

ヨシコアの質問に答えたナイアルさんの言葉を聞いて、あたしは大声を上げた。

「……何だあ？」

ナイアルさんは驚いて目を丸くした。

「それって、クローゼがそこに監禁されてるかもしけないってことじゃない」

「……うん、そうだね」

あたし達の話を聞いたナイアルさんは真剣な顔で、もう一度調査を

することを約束してくれた。

「……ナイトさん、無理しないでね」

「わかつてるつて」

あたし達は「一ヒーハウスを去ろうとして、店の一角落に真新しい写真が貼られているのに気がついた。

そこは、店の自慢の辛口カレーを完食した人が記念に写真をとつて展示するコーナーみたい。

一言コメントは『樂勝!』と書かれていて、カメラに向かってピースサインをするリースさんが微笑んでいた。

「ああ、そのシスターさんは今日初めて来店したお客様さんですね。あつとい間にもこの店で一番辛いカレーを食べてしまったんだよ」

店主さんの言葉にあたし達は苦笑しながらお店を後にした。

『王都グランセル 北区画』

ボクたちがホテル『ローエンバウム』に入ると、フロントでは熊のような大きな男の人があたし達を話していた。

「ジン様、昨日はよくお休みになられましたか?」

「ああ、気遣い感謝する。これで今日の予選も突破できそうだな」

「それは、良い事でござります」

フロント係の人に見送られて、ジンさんはホテルを出て行った。

ボク達は準遊撃士の紋章をフロント係の人に見せて話を聞くことに

する。

「あの……情報部について何かご存じの事はありませんか？」

「ええ、クローディア姫の事はここに宿泊されている遊撃士の方にお聞きしました。全く悲しい事ですね……」

フロント係の人はそう言つて顔をしかめた。

「たいした事はお話しできないのですが、情報部がらみで変わった事と言えば、エルベ離宮が一般公開禁止になつたと言う事でしょう。普段エルベ離宮は王都の市民や観光客に開放されているのです。それが情報部が何かと理由を付けて立ち入り禁止にしているのです」「なんでだろ？」「

ボクがそう呟くと、アスカは考え込む仕草をして話し始める。

「多分……クローゼを監禁するのに都合のいい場所だからじゃないかな？ ほら、お姫様なんだし、情報部がクローゼを利用しようと考へているなら、粗末な建物で監禁したりしないはずよ。それに庭も広いから外部から目も届きにくいし」

「すつごい、やっぱり頭がいいんだねアスカは！」

「ま、まあね」

アスカはちょっと照れながらそう答えた。

「ところで、さつきの大きい男の人は？ ただものじゃないって感じがしたんだけど」

「ええ、彼はカルバード共和国からいらした遊撃士の方で、ジンさんとおっしゃいます。現在東区画のグランアリーナで開催される闘技大会に参加されているそうですよ」

「何も事件が起らなければ、見に行けたのに残念だね」

話題が世間話に移ると、ボク達の雰囲気は柔らかくなつた。

「今年は『デコナン』侯爵が豪華賞品を用意されているそうですよ。なんでも、優勝チームはお城に招かれて『デコナン』公爵の食事会に参加できるとか」

はは、アスカならそんなのいらねって言いそうだね。
でも、アスカの反応は予想と全く違つた。

「その大会には今からヒントリーできるのー?」

まさか、アスカは公爵さんに会いたいの?
やっぱアスカはお金持ちの方がいいのか……。
そうだよね、ボクは頭も良くないし、もっとアスカを幸せに出来る
男性は星の数程いるよね。

「アタシは公爵何かに興味は無いけどさ、そつすれば城の中に入れ
る口実が出来るじゃない」

その言葉を聞いて安心したボクは嬉しくてアスカに抱きついてしまつた。

「ちよ、ちょっとシンジ……
「！」「めん……」

ボクの顔を見てアスカは察してくれたのか、安心させてくれるよう
に抱きしめ返してくれる。

「バカね、エヴァンゲリオンのパイロットだったアタシの事を本当に解ってくれるのは世界でただ一人、シンジだけだよ」「アスカはボクの事も解ってくれてるんだね……」

「いやあ、青春してますね……」

『王都グランセル 南区画』

僕達はナイアルさん達と別れた後、王都にあるモルガン将軍の自宅に寄ると、将軍の孫娘も情報部に誘拐されている事を知った。

国境警備隊の動きを封じるためだろう。

モルガン将軍はアリシア女王様の緊急事態なのに王都に戻る事も出来ないわけだ。

「ひどい、小さい子を巻き込むなんて！ きっと今頃両親と離れ離れになつて寂しい思いや怖い思いをしているはずよ……」

……そうやって、誘拐されたこの気持ちになつて怒るところがエヌテルらしいね。

僕にはそんな考えは浮かばなかつたよ。やつぱり君は太陽みたいな子だよ。

「…………ん？ あたしの顔に何かついてる？」

「エヌテルの怒つた顔もかわいいなつて思つて」

「～～っ！」

僕がそう言つとエヌテルは真つ赤な顔で俯いてしまつた。ちよつと、意地悪しちやつたかな。

「おや、やにに理のなHスヌル君じやないかー！」

僕とエステルがグランセルの通りを歩いていると、男の人声をかけて来た。

街中でも釣竿を背負つたその姿は、釣公師団のロイドさんだった。

「あ、ロイドさんー！」

「どう、あれから釣りライフは楽しんでいるかー？」

「まあぼほけと……」

ウソだ。

思いつきり満喫しているへせこ。

「そういえば、リベル通信で読んだよ。とつもない怪物を釣り上げたんだって？」

「うん、まあ……」

「その話を聞いたら、団長が是非エステル君に会いたいって言つてね。名誉団員では無くて正式に団員に迎えたいらしいよ

「や、それは光栄ね」

興奮してエステルの腕を取るロイドさんに對してエステルは若干引き気味だ。

「これもロイドス（空の女神）のお導きかもしれない。今、フィッシュヤー団長が本部に居らっしゃるんだよー！」

エステルは困惑した様子でロイドさんにつかまれた手を振り切った。

「あの、あたし達急いでいるので……」

エステルがそう言って断ると、ロイドさんは落胆した表情を浮かべる。

「残念だな……。今度の王都の地下水路での釣り大会も中止になっちゃうし……」

地下水路？

僕の頭にある考えが浮かんだ。

「エステル、釣公師団に行こう

「ええっ、ビデウして！？」

「……ロイドさん、釣公師団には王都の地下水路の地図もあるんですね？」

「ああ、女王様の許可も頂いて、入口の鍵も預かっているよ

エステルもよひやく意味が分かつたらしくて目を輝かせて僕の方を見つめる。

「ヨシュア、すっごい！　あたし一人だつたら気がつかなかつたわ！」

「助けてもらつてるのは僕もだよ、エステル」

僕達は釣公師団の本部に行き、話せるとこ今まで事情を話して力を貸してもらつ事にした。

『王都グランセル 東区画』

ホテルのフロントでシンジと抱き合っていたアタシ達は、ジンさん

を追いかけるのがすっかり遅くなってしまった。

アタシとシンジは手を繋ぎながら通りを駆けて行く。

「もうシンさんはとっくに会場に入っちゃつただろうね……」

「アタシ達は多分選手控室に入れてもらえないわね……」

仕方無くアタシ達は闘技場が行われる《グラランアリーナ》への入場券を買う事にした。

アタシが財布を出してチケットを買おうとするが、シンジがそれを押し止めた。

シンジの行動の意味を察したアタシは大人しく引き下がる事にする。

「あの、入場券のペアチケットをください」

シンジが受付のお姉さんに話しかけたその声は少し震えていた。

「ふふつ、かわいい彼女と今日はデートですか。楽しんで行って下さいね」

「は、はい」

シンジが赤い顔をしながら一枚のチケットを受け取った。

アタシはシンジからチケットを受け取ると、甘えるようにシンジの肩に抱きついた。

「」、これは情報収集のためだから……

「ま、情報収集ついでにデート気分を味わつたってことすればいいじゃないの」

アタシが耳元でそう呟くと、シンジは嬉しそうに頷いた。

「うわー、予選なのに凄い盛り上がりね」「

観客席につくと、座る場所がないぐらい賑わっていた。
今は試合の休憩時間のよつでざわざわしている。

「どうやら、立つてみるしかないみたいだね」

シンジは残念そうにそう呟いた。

しかし、アタシ達は懐かしい声に呼び止められた。

「アスカさん、シンジさん、こんな所で会えるなんて面白い偶然ですね」「

「メイベル市長さんに、リラさん！」

「……その節はお世話になりました」

リラさんは相変わらず端正な顔のまま礼儀正しくお辞儀をする。
なんか、表情を変えないリラさんを見ていると、あのファーストの
やつを思い出しちゃうのよね。

「何でメイベルさんが王都に？」

「実は、先日王都で重大な発表があるとリベル王国内の各都市の
責任者宛てに召集の手紙が届きましたの」

シンジの質問にメイベルさんはそう答えた。

「重大な発表？」

「私も詳しい事はわかりません。今の王都を包む物々しい雰囲気に
何か関係があるのかどうかも……」

「……お嬢様、そろそろ戻りませんと」

リラさんとメイベルさんに向かってそう呟いた。

「あら、もうそんな時間？ ではアスカさん、シンジさん、私達はこれで失礼しますね。私はこの街を包む重い雰囲気が嫌で気晴らしでやつて来たんですの」

そう言って、メイベルさんは会場の隅に居る情報部の特務兵を睨みつけて立ち去つて行つた。

アタシ達は幸運にも一番前のベンチのような席に座る事が出来た。

「あ、試合が再開されたみたいだね」

試合は五人組の団体戦で行われるみたい。

西側から出て来たのは、カルバード共和国からやつてきた五人組の戦士のチーム。

第三新東京市に居た頃のテレビで見たサムライと言つ物に感じが似てるかな？

東側から出てくる対戦相手も偶然にもカルバード共和国出身らしいわね……。

つて、ジンさん一人しかいないわよ！？

「もしかして、一人で戦つつもりなのぉ！？」

驚いたアタシは思わず叫んでしまつた。

ジンさんは観客席に居るアタシの方をチラリと見ると、余裕を持った笑みを浮かべた。

「試合開始！」

合図と共にジンさんは突然、体に気合を込め始めた。

「はああああ……！ 龍神功！」

ただならぬ氣迫に対戦相手の五人もたじろいだ。

「ふん、五人も居て誰もかかつて来ないのか？ ……面倒くさい、五人まとめてかかつて来い！」

ジンさんがそう言つと、対戦相手の五人はすっかり挑発に乗つてしまつた様子。

「生意氣な若造だ……行くぞ、ケン、チャ一、コウジ、ブー！」
「目にも見せてやりましょう、チョーさん！」

五人がジンさんの正面から斬りかかるつと迫る……！
するどジンさんは手のひらを合わせて光のようなものを発生させた！

「奥義・雷神掌！」

爆音と閃光に包まれる五人。

一番離れていた所に居た一人を除いて、四人全員が倒れ込んでしまつた。

残つた一人も混乱してふらふらとしている。

「ケン！ 後ろ――――！」

観客席から悲鳴のような声が上がつたけど、最後の一人もジンさんの背後からの手刀によつて倒されちゃつた。

「ジン・ヴァセック選手、決勝進出！」

アタシとシンジはジンさんが一人で五人を倒すのを見て、呆然とした。

我に返ると、今度こそジンさんを逃さないように、急いで選手控室から出てくるジンさんの所へと行つた。

「あの、ジンさん。アタシ達は遊撃士協会の者なんですけど……」

アタシが熊みみたいに大きいジンさんの背中に声をかけると、ジンさんは穏やかな笑顔を浮かべてアタシ達の方を振り返つた。

「おっ、観客席で大きな声を出していたお嬢ちゃんか」

あ……何となく雰囲気は加持さんに似てるかな。

アタシはふつと懐かしい感じを受けた。

するとアタシと繋いでいるシンジの手に力がちょっと力が入つた。

「アタシは、準遊撃士のアスカ・ブライト。そしてこっちがアタシの彼のシンジです！」

アタシは彼という単語を強調して紹介した。

シンジの手の力が抜けて行くのが分かる。

フフフ、そんなに出会う男性みんなに嫉妬されちゃったら困るわよ。しっかりしなさいよ、シンジ。

「そうか、同じ遊撃士なのか」

ジンさんは感心した様子だった。

「あの、アタシ達お話をあつて……」

アタシがそう言いかけるとジンさんは雰囲気を察してくれた様子。

「続きは、遊撃士協会で話そつか

アタシ達はジンさんと一緒に遊撃士協会に戻る事になった。

《王都グランセル 遊撃士協会》

あたし達が釣公師団の本部から戻ると、アスカとシンジも情報収集から帰つてきていたようだ。

うわ、熊のように大きな人も居る。

エルナンさんはアスカ達の話を聞いていたようだった。

そして、さりにあたし達の報告を聞くと、じつと考え込んでいる様子だった。

「少し考える時間を頂けませんか？」

エルナンさんはいつでも支給しますので、しつかり銳気を養つてください食を取ることを提案した。

「食事代はこちうで支給しますので、しつかり銳気を養つてください

「本当ー？ やつたー」

あたし達五人は同じ南区画にある居酒屋、《サニー・ベル・イン》に食事に行く事にした。

店の中では上手なピアノの演奏が聞こえる。

誰が弾いているのかな……と思つたら何とオリビエだつた。

「オリビエ、何でこんな所に居るの？」

あたしは演奏を終えて拍手に包まれるオリビエに話しかけた。

「情報収集の都合で酒場に寄ると、いいピアノがあつたので演奏してみたくなつたのさ」

「……まったくお前は自由なヤツだな」

オリビエの隣にはあたし達が初めて会つ人が立つっていた。
体格も良くて強そうね。

「彼はミコラー。僕の同郷の幼馴染で、帝国大使館を護つてゐる軍人さ」

「オリビエさんは帝国大使館に行つていたんですか？」

「ああ、そうだ……まあ詳しい話は遊撃士教会に戻つてからする」とこして、食事を楽しむつじやないか」

シンジの質問にそう答えると、オリビエはあたし達のテーブルの隣の席に着いた。

「後で遊撃士協会で話があるんだから、お酒はダメだからねー。」

「おや、つれないね……少しごらり、いいだろつ？」

オリビエさんはそう言つた直後、怒つた感じのミコラーさんの顔を見て動きを止めた。

「……はい、『めんなさい』。お酒は飲みません」

アスカが怒るよつミコ ラーさんの方がよっぽど効果があるわね。
あたし達はオリビエからシェラ姉にいろいろひどい目に遭わされた
と言ひ話などを聞かされながら食事を終えた。

「あれ、 中から食べ物の匂いがする」

あたし達が食事を終えて遊撃士協会に戻ると、遊撃士協会の建物の中にはあたし達の他に手分けして情報収集をしていたシェラ姉やアネラスさん、アガツトなどみんなが戻っていた。

みんなはパンとスープの入った皿を手に持っている。
どうやらあたし達より簡素な食事を振る舞われていたようだ。

「何だか、 あたし達だけ良い食事して申し訳ないわね……」

あたしが遠慮がちにエルナンさんにつづり、エルナンさんは穏やかに微笑む。

「明日の作戦の主役を張つてもいいですから、当然の待遇ですよ
「主役？」

エルナンさんの言葉の意味が分からず、あたしは首をひねった。

「明日の作戦はチームを一組に分けて行います。一つは王城に行き、アリシア女王陛下の安否を確認し、場合によつては保護・脱出をさせるチーム。もう一つはエルベ離宮に行き王女クローディア姫殿下を救出するチームです。この作戦は同時にやらないと意味がありません。女王陛下を救えれば王女の身に危険が迫るかもしませんし、警備も厳重になります。その逆もしかりです」

「ふーん、それでそのチーム分けはどうするの？」

エルナンさんの作戦に感心した様子のアスカが尋ねる。

「王城に行くチームはジンさんとエステルさん、ヨシュアさん、アスカさん、シンジさんの五人です。ジンさんのチームは明日行われる格闘技大会で優勝して、デュナン侯爵の食事会への参加の権利を手に入れてください。王城に入つてからの手はずはまた私が整えます」

「えーっ！？ ボク達が優勝！？」

シンジがそう叫ぶと、エルナンさんは穏やかに微笑んでさらに言葉を重ねる。

「ええ、シンジさん達が優勝しないと作戦は全て失敗になつてしましますから、頑張つてください」

「手え抜くんじゃないぞ」

「あのあの、無理しないでください」

「あらあ、無理しないと勝てないんじゃないの？」

「フツ、期待しているよ」

「シンジ君、ファイトだよ！」

弱気になつたシンジを部屋に居るみんなが励ます。

シンジはプレッシャーからか、ちょっと青い顔になつてている。

「他の皆さんはエルベ離宮攻略の準備を整えてもらいます」

その後作戦についての話し合いが行われ、解散となつた。

あたし達はホテルに部屋を取つてもらつていてる。

四人で一部屋。

エルナンさんはどうやって部屋割を取つているのかな……と少しどキドキしたけど、あたしとアスカ、ヨシュアとシンジで一部屋だつ

た。

そ、その……まあ当然よね！

あたしはその日の夜、寝息を立てるアスカを抱きしめながらも全然眠れなかつた。

明日の闘技大会が楽しみで仕方無かつたからだ。

不謹慎かもしけないけど、あたしは強い相手と戦える事にワクワクしていた。

ごめんね、アスカ。

あたし、まだまだ女の子っぽくなれないみたい。

でも、いつかヨシュアに……って何考えてるのあたし！？

「痛ーい！ エステルの寝相悪すぎよ……」

いつの間にかあたしはアスカを投げ飛ばしてしまつたみたい。
あたしはアスカに謝つて再びベッドに入つた……。

第八話 王都跳梁（中編）

『王都グランセル 東区画 グランアリーナ入口』

「おはようございます、ジンさん。メンバーが見つかって良かつたですね。お一人で戦っているのを見て、私も不安でしたわ」

「はは、俺も予選は勝ち抜けたものの、これからは一人でやつて行くの辛さを感じていましたから、助かりましたよ」

闘技大会が行われる日の早朝。

会場であるグランアリーナの入口についたボク達は受付のリーファさんに声をかけられた。

ジンさんがそれに受け答えする。

「聞けば四人とも遊撃士さんだとか。私も普段から遊撃士さんには助けてもらっているので、ご健闘をお祈りさせていただきますね」「はは、あたし達まだ半人前なんですけどね」

リーファさんはボク達に笑顔を向けてくれた。

エスティルは照れ臭そうに受け答えしていたけど、ボクには答える余裕がなかつた。

「はい、入場手続きを完了しました。これからは欠員が出ましても交代できないので」と承ください

リーファさんに見送られて、ボク達はグランアリーナの建物の中に入り、右手の蒼の間と呼ばれる選手控室に入った。
予選とは違つて本戦と言つだけあって、強そうなチームの人達がすでにたくさん部屋の中でそれぞれ固まつていた。

「賭博防止のためだとは言え、対戦相手が分からないと呟るのは難しいわね。対策の取りようがないし」

「へえーっ、アスカはそこまで考えているんだ」

「敵を見て、戦術オーブメントを付け替えたりしているのよ

アスカとエスティルの話を聞きながら、ボクは溜息をついた。

「……緊張のしすぎは良くないよ」

「そう言われても、優勝なんて自信が無いよ……」

「やっぱり、あの後眠れなかつたんだ?」

「うん、一睡もできなかつた」

ボクの緊張を解すためなのか、ヨシュアが僕に話しかけてきた。

「シンジ、何情けない事を言つてるのよ!」

「でも、ボクは今まで何の力もない中学生だつたんだし……」

ボクの言葉を聞きつけたのか、アスカは怒つた顔で怒鳴つた。

「リベルに来てから、アタシはシンジがどんなに努力して強くなつたかわかってる。多分シンジ本人よりもね」

アスカは腰に手を当てて堂々と自信たっぷりにそう言い切つた。その言葉にボクはだいぶ励まされたけど、それでもボクは不安を隠せなかつた。

すると、アスカはそんなボクに痺れを切らしたのか、ボクの胸倉を

つかみ上げた。

「シンジ、アタシが負ける事は大嫌いだつてことは知ってるわよね?
?」

「う、うん……」

「じゃあアタシに悔しい思いをさせないよう死ぬ氣で頑張りなさい」

「おいおい、仲間割れは勘弁してくれよ」

ジンさんが困った感じでそう言つと、アスカはボクを放りだすようにして放した。

「確かに、アスカのためにも頑張らないといけないな」

ボクは拳を握りしめてそう呟いた。

「あはは、シンジはやつと気合が入ったみたいだね」

エヌテルにそう言われて、ボクは後ろ向きだった気持ちが前向きになっている事に気がついた。

「負けた時はさ、僕達のせいにしてくれてもいいから。自分は全力で頑張つたって思えればいいよ」

みんなの励ましを受けて、ボクはさっそく試合に使う戦術オーブメントの選択を始めた。

今まで何となくアスカの指示通りにしていたけど、他人任せにして後悔はしたくない。

アスカの決めてくれたオーブメント配列をいじるなんて怒るかな……。

ボクは視線を恐る恐るアスカの方に向けると、アスカは黙つて微笑んでくれた。

多分、ボクの好きなようにしてことだよね。

「シンジがどんなオープメントを使うか見て、アタシが使うオープメントを決めるわ」

そこまでアスカはボクに呟きてくれるんだ。

「でも、今度は戦いは男の仕事だつて言わせないわよ。アタシも隣に居るんだからね！」

アスカはそう言ひつとボクの鼻を指でちょっと軽く突いた。

『グラントアリーナ 試合会場』

主催者であるデュナン公爵が席に座り、闘技大会の開始の合図がされたみたいで、観客席からの空が割れるような大歓声が控室に居るあたし達にまで聞こえてくる。

「対戦相手は、まさかあのボクつ娘チームじゃないわよね？」
「まあ、確率的には低いけど、あり得ない事は無いね」
「それとも、あのレイヴンチームに当たるのかな？」
「さあ、どちらにも当たらない事は無いんじゃないかな」

あたしは試合に呼び出されるまでの間、ヨシュアと先ほど控室にまでやってきた『カプア一家&レイヴンチーム』の事を話していた。あのジョゼット達の居るカプア一家は小型飛行船の修理代を稼ぐた

めに出場することになつて、レイヴン達と手を組む事にしたんだつて。

カプア一家つて空賊なんぢやないの？

そんな人達も参加できるなんて太つ腹といふかなんといふか……。それに、ジョゼット達とレイヴン達はいつの間に知り合つたんだろう？

あたし達が出場することを知つて、試合前に向かい側の控室からわざわざあたし達の所に宣戦布告に来たんだつてさ。

いろいろじけんじけんやあたし達に向かつて言つてきたんだけど、あたしが正々堂々闘おうつて握手をしたら、みんなやる氣をなくした顔をして引き返して行つちゃつた。

あたし、何か変なことしたかな？

ヨシュアは笑いながら別に何も変な事をしていないつて言つてくれたけど。

「それでは、本日の第一試合を開始したいと思います。南、蒼の組
武術家ジン以下遊撃士チーム！」

司会者のアナウンスがあたし達のチームの出番が来た事を告げる。ショッパンからなんてビックリね。

「北、紅の組 カプア一家とレイヴンチーム！」

まさか、本当にジョゼット達のチームと対戦する事になるなんてね。

あたしはヨシュアと顔を見合せて苦笑するしかなかつた。

「それでは……位置について……」

あたし達はアナウンスが流れるとすぐに試合会場に出て、対戦相手

のチームと向かいあつた。

相手チームは、短剣を装備したレイヴンの一人、ディンとロッコ、そしてジョゼットのお兄さんのキールが前に出ている形。

大砲を持つたジョゼットのお父さんのドルンさんと導力銃を装備したジョゼットが後ろに構えるみたい。

迎え討つあたし達の方も、ジンさん、ヨシュア、そしてあたしが前に出て、後ろに導力銃を装備したシンジとアスカが控える形をとつていて、同じようなものだ。

試合前の緊張が高まってきた。

しかし、そんな雰囲気をぶち壊しにするような歓声が観客席の方から上がった。

「やつほー、エステルちゃん、アスカちゃん！ 良い写真撮るから頑張つてねー！」

「ドロシーさん！？」

観客席から間の伸びたような声をかけてくるそばかすが印象的なピンクの髪の眼鏡の女の方は、リベル通信社の新入力メラマンでナイアルさんの後輩の、ドロシーさんだった。

「ナイアル先輩からエステルちゃん達が出場するって聞いて駆けつけて来たんだよ！ 良い撮影ポジションも取れたし！」

あたし達が驚いてポカンとドロシーさんの方を見ていると、司会者の方が氣まずそうに声をかけてきた。

「あの……試合を始めたいと思うので、正面を向いてください……」「は、はい……」

あたし達は照れながら正面に体の向きを戻した。

相手チームも毒氣を抜かれて氣分が白けてしまったようだ。

「それでは……試合開始！」

司会者の合図と共に試合が始まった。

「みんな、あの大砲の爆風に巻き込まれないためにも、固まらないようにするんだ！」

ヨシュアがドルンさんが小脇にかかるべく導力砲を指差してそうあたし達に向かつてそう警告した。

「キールさんの爆弾もあるしね！」

あたしはそう答えると、試合会場の広さを活用するため、横に飛び退いた。

相手の前衛三人は散開したあたし達を見て、真ん中に居るジンさんに狙いを定めたようだ。

「おつと、じりゅきついな」

ジンさんは迫つてくる三人から逃れるように後ろに後ずさった。

調子づいてジンさんを追いかける三人。

……ふつふつふ、それはアスカの考えた作戦なのよ。

「エアロストーム！」

「エアロストーム！」

アスカとシンジの声が重なり、ジンさんの正面、相手チームの前衛三人が居る場所に突風が巻き起こる。

発動範囲が重なった風の魔法は威力をさらに増したのか、巨大な竜巻となつて三人の体を空高く舞い上げた。

「うわあー」

「ひえええー」

「つおおおー」

悲鳴を上げるキールさんとティーンとロッシー。

ティーンが一番最初に地面に叩きつけられ、その上にキールさんとロッシーが折り重なるように着地した。

「くわ、てめーら、早く退きやがれ、このグズ！」

ティーンがそう言つた言葉がロッシーの怒りを買つたみたい。

「なんだと、お前がデブだから一番最初に落ちたんだろー。」

「まあまあ、今は試合中だぞ？」

キールさんが仲介に入るけど、ティーンとロッシーの言い争いは試合をつちのけで続いている。

「ちょ、ちょっと、二人とも、キール兄の話を聞けよー。」

「お前ら、言い争いしている場合じゃないだろー?」

後ろの方でその様子を見ていたジョゼットとダルンさんも動搖している。

よし、今がチャンスね！

あたしとヨシュアは、サイドから後衛のジョゼットとダルンさんこそれぞれ接近していたんだ。

「う、うわあ！ 来るなこの暴力女！ 色気無し！ 怪力女…」

ジョゼットは慌てて銃を構えるけど、甘い！
すでにあたしの棒の間合いに入っているもんね！

「言いたい放題言つてくれかけやつて！ うりやー！」

あたしは棒でジョゼットの銃を持つている手を握りきり引つ吊いでやつた。

「うわっー。」

悲鳴と共に銃はジョゼットの手を離れ、地面へと転がつた。

「これじゃあ、手がしごれて銃が持てないじゃないか……」

ジョゼットは悔しそうにあたしを睨みつける。

「へへん、勝負あつたわね」

あたしはジョゼットに向かつてそう言つた後、ヨシコの方を見ると、ヨシコも短剣でドルンさんにかなりの傷を負わせたようだ。ドルンさんの導力砲は至近距離を狙うのには向いていないし、一度発射すると再充填まで時間がかかるため連射ができるないと呟つ弱点をついたみたい。

ヨシコはドルンさんの横や背後に回り込んでドルンさんに傷を負わせたのだろう、ドルンさんももう戦う気力が無くなっていたみたいだ。

言い争いをしていた他の三人も再びアスカとシンジのニアロストーム攻撃に引っ掛けたみたいで、ちらに昨日の試合でジンさんが見

せた技、奥義・雷神掌によつて追い打ちをかけられたらしい。三人ともガックリと膝を折つて、へたり込んでいた。

「そこまで！ 勝者は遊撃士チーム！」

審判も兼任していた司会者の人がそう言つと、会場は歓声に包まれた。

「ふう、今回の試合は楽勝だつたわね！」

「相手が運良く仲間割れしてくれたからね」

あたしとヨシュアがそう話す中、シンジは歓声に包まれてとても照れ臭そうにしていた。

「こんなにたくさんの人人の前で褒められるなんて初めてだよ」「ほり、もつと堂々と胸を張りなさい」

でも、あたし達の晴れやかな気分もここまでだつた。

明日の対戦相手となる『特務兵チーム』の試合を見たあたし達は明日の決勝戦は一筋縄ではいかないだろうと思ひ知らされた。

「それでは、本日の第一試合は、南、蒼の組 王国情報部特務兵
チーム！」

特務兵チームは、全員顔が隠れる兜を被つてゐる不気味な感じのチームだつた。

前衛は、ジンさんと同じぐらい立派な体格をした大男と、兜からはみ出るほど長い髪をした兵士。

その兵士の鎧の形から、女性兵士なのだなとあたし達は推測した。背後を固める三人の兵士も連携がうまく取れている感じだつた。

その特務兵チームが華麗なチームワークであつたことと勝利を手にしたのを見たあたしは、身震いを感じた。

『王都グランセル 東区画 ハーデル百貨店』

試合を終えた僕達は、明日の試合に備えて傷薬などを買つためにハーデル百貨店に向かつた。

明日の対戦相手は手強く、長期戦になりそうだと直感的結論に達したからだ。

僕が薬のコーナーやアクセサリーのコーナーでシンジと一緒に品物を調べていると、エスティルとアスカが紅茶売り場の女の店員さんに声をかけられていた。

「あそこでぬいぐるみを見ている女の子、ここ数日毎日一人で来てるんですね。親の事について尋ねると、しばらくしたら迎えに来てもうつから大丈夫、って答えるんですけど……」

「全然迎えに来る気配がないと……。だから遊撃士協会に相談しようとしてたつてわけですか？」

「ミテイさん、アタシ達は遊撃士なんです、任せてくれださい」

「お願いします」

ミテイさんはそう言つてエスティルとアスカに向かつて頭を下げた。僕がぬいぐるみ売り場の方に視線を移すと、黒いリボンを頭に付けた白いフリルのついたドレスを着た小さな女の子が立っていた。多分、ティータと同じ年ぐらいだわ。

「ここにちは、ぬいぐるみが好きなの？」

「お姉さん達、誰？」

「アタシはアスカ。で、こっちがエステルよ」

「ふうん、私はレン。で、お姉さん達は何でレンに声をかけたの？」

理知的な女の子の態度に声をかけたアスカとエステルも戸惑つた様子だった。

「……ねえ、レンちゃんのパパとママはどうしたの？」

「何、またその話？ レンが一人でいるとたくさんのお節介な大人の人達がそう声をかけてくるのよね」

アスカが单刀直入に両親の事を尋ねると、レンはウンザリといった感じで溜息をついた。

「だつて、パパとママがいないと寂しくない？ 不安にならない？」

「別に、寂しくなんかないわ。レンは自由を満喫しているの」

親が居なくとも平氣だといったレンにアスカはショックを受けたようだ。

慌ててエステルがフォローに入るようにな質問する。

「でも、レンちゃんみたいな小さな女の子が一人でうわづらしていたら危ないよ？ お姉さん達と一緒に行かない？」

「レンのパパとママは大事な用があるから、しばらくここ待つていなさいって言われたの」

「お店の人にはレンちゃんを遊撃士協会で預かっているって伝言をお願いするから、お父さんとお母さんが戻ってきても平氣だからさ」「じゃあ、エステルとアスカが遊んでくれるならついて行つてもいいよ？」

レンにそう言われてエステルは苦笑している。

アスカも苦虫を潰したような顔をしながらも何かを思いついたような顔をしてエステルに話した。

「ねえ、ティータと同じぐらいの年だから良い遊び相手になつてくれるんじゃないかい？」

「おうそ」

エスティルはアスカに向かつてそう頷くと、またレンに向かつて笑顔で話しかけた。

「お姉ちゃん達は忙しくて遊んであげられないけど、ティータつて
いつレンちゃんと同じ年ぐらいの子が居るの」「
その子なら、レンの遊び相手になってくれるの？」

レンは嬉しそうに

僕とシンジは買い物を適当に切り上げて、エステル達に合流した。レンの近くによつてその顔をまじまじと見た僕は、ついこんな質問をしてしまつた。

「ねえ、僕は君と会つたこと無いかな？」

「レンはお兄さんの事知らないわ」

「そうか、どこかで会った気がするんだけど……」

セイ、ほんとお兄さんの事を見た事もなしわ。

レンはそう言つて首を横に振つた。

「レンちゃんもヨシコアの事知らないってほんなにも言つているんだから……本当に知らないんじゃない？」

「そうだね」

僕はエステルにそう言わされて頷いた。

でも、まだ僕は心の奥底で引っ掛かりを感じていた。

「うわあ、高い！」

レンに肩車を要求されたジンさんは嫌な顔をせずにレンに肩車をしながら、僕達と一緒に遊撃士協会への帰り道を急いだ。

「お帰りなさい、あなた達の活躍はちょっとしたうわさになっていますよ」

遊撃士協会に戻ると慌ただしい雰囲気の中、エルナンさんが笑顔で迎えてくれた。

でもその顔はいつもに比べて少し疲れている感じだった。

「おや、その子は？」

エルナンさんがジンさんに肩車をしてもらっているレンに気がついた。

「熊さん、ちょっと降ろして」

「おーおい、熊さんはあだ名だよ」

ジンさんがそう言ひながらレンを床に下ろすと、レンはしゃなりといつた感じで白いドレスの裾をつまんでエルナンさんに向かってお辞儀をした。

「レンです、よろしくお願ひしますお兄様」

「はい、私はエルナンです。こちらこそ、よろしくお願ひしますね」

「とんだおませさんね」

エルナンさんに挨拶するレンを見て、アスカはあきれたような顔になつた。

「レンの両親が行方不明だつて言つからこゝに連れて來たんだけど……」

「行方不明じゃないよ、パパとママはレンにこの街で遊んでいなさいつて。しばらくしたら迎えに來るからって」

エステルがそつとレンは少し怒つた感じで否定した。

「ねえ、ティータは今居ないの？」

「奥で作業をしてもらつています」

アスカの質問にエルナンさんがそつ答えると、アスカは困つた顔になつた。

「レンは早くそのティータつて子に会いたいな。邪魔しないで側でおとなしく見ていろから、お願ひ」

「わかりました、ティータさんにも休憩してもらいましょう」

エルナンさんはそつと、導力通信機の受話器を取つてギルドの2階に居るティータ達と連絡を取つてゐるよつだつた。

「作業を中断したよつです。一階に上がつてもよひじこですよ」

シンジがレンを連れて二階に上がると、アスカはエルナンさんに頼み込んだ。

「お願い、レンのパパとママを探してあげて」「そうですね、もしかして何かの事件に巻き込まれてしまっているかもしません」

エルナンさんがそう言つと、アスカの顔色はますます青くなつた。

「そんな！」

エルナンさんも言つ方がまずいと思つたのか、慌ててフォローする。

「まだ、レンさんの」両親の身に何かが起こっているとは限りません。遊撃士協会の方でも情報提供をして調べてみます」

「お願いします、エルナンさん」

確かに、アスカの母さんは何か大変なことになつていてるってエヌステルから聞いたことがある。

エヌステルも良く意味が分からぬ用語で説明されたつて言つけど、アスカは母さんが居なくて寂しい思いをしているんだっけ。僕は……両親は完全に死んでしまつているつて分かつてているから諦めがつくんだけど……。

姉さんの事も……。

「ティータも、すぐあの子と友達になれたみたいだよ」

「そつか、よかつたわね」

シンジが二階から降りてきてそう言つと、アスカは安心した様子でそう言つた。

気がつくと、受付のあるこの一階が人が集まつて来ているのが分かつた。

多分、エルナンさんに報告をしに来たんだけど、みんな待つっていて

くれていたんだろう。

僕達はみんなに謝つて、遊撃士協会を後にじてホテルに戻ることにした。

『グラントアリーナ 選手控室』

次の日、アタシ達は何の作戦も思いつかないまま、試合当日を迎えて、蒼の間で待機していた。

エルナンさんに知恵を借りようと思つたけど、エルナンさんはエルベ離宮に捕らわれたクローゼを救出するための作戦で忙しいみたいだし、レンのパパとママの事もあるし。闘技大会に関しては自分達の力で何とかするしかなかつた。

「昨日みたいにおびき寄せ攻撃も効かないだろうし、もう出たとこ勝負、臨機応変に戦うしかないわね」

「アスカ、それって作戦つていえるの？」

「ぐつ……痛いところ突くわね。結局アタシは何も思いつかなかつたのよー！」

アタシはヤケになつた感じでエヌステルにそう答えた。

「アスカ、ボク達も頑張るからさ。そんなに肩に力を入れないで自然体で行こうよ」

気がつくとシンジがアタシの肩に優しく手を置いて励ましてくれた。

「シンジ、昨日はみんなに緊張していたのに、どうして今日はそんなに落ち着いているのよ？」

「何だかわからないけど、ボク達なら負けないって気がするんだよ

シンジが落ち着いているのを見て、アタシも心が落ち着いて来るのに気がついた。

後は戦闘でのヨシュアの指揮に期待しよう。

「それでは、本日の決勝戦を開始したいと思います。南、蒼の組遊撃士チーム！」

司会者のアナウンスを聞いて、アタシ達は控室から試合会場に出て行つた。

登場したアタシ達を見て、観客席から大きな声援が上がった。中にはドロシーさんやアネラスさんの声が混じっている気がするけど、気にしないでおこう。

「北、紅の組 王国情報部特務兵チーム！」

兜でスッポリと顔を隠した不気味な連中だけど、情報部はリシャール大佐がリベル通信で人気がでていることもあって、好感を持たれていた。

特に髪の長い女兵士の素顔は実は美人だと、鎧の下はかなりスタイルが良いとか、そんなうわさを街でもアタシは耳にした。アタシはその女兵士を見ると何か胸がむかつくような嫌な感じがした。

「ヨシュア」

アタシがそう言つてその女兵士に視線を送ると、ヨシュアは意味が分かつたようだ。

「それでは、位置について……」

相手チームは昨日と同じように体格の大きい男兵士とその髪の長い女兵士が前列について、後列に三人の兵士が並んでサポートする陣形を取つていた。

アタシ達も奇策を用いることなく、正面にエステル、ヨシュア、ジンさんの三人、後方にアタシとシンジがつくことになった。ただ、昨日と微妙に違うのはヨシュアがジンさんの位置とは入れ替わる形で真ん中に居て、アタシとシンジが真ん中で固まっている事だった。

「それでは……試合開始！」

司会者の合図と共にジンさんは大男の兵士と一対一に持ち込み、エステルとヨシュアは髪の長い女兵士に向かつて特攻した。アタシとシンジも女兵士を射撃できる場所まで移動した。これで、集中攻撃できる！

と思つたんだけど……。

その女兵士は身を翻して後ろに後退すると、何と銃を構えたの！
「あいつ、格闘だけじゃなくて、銃まで使えるの！？」

そう叫んだ後、アタシは今度はエステルがピンチに陥つてゐる事に気がついた。

その女兵士と、後列の三人の銃口がエステルに向けられている。

「エステル！」

ヨシュアの悲鳴にも似た注意を促す声を聞くと、エステルは自分が狙われている事に気がついたようだ。

でも、逃げると思っていたエステルは意外な行動に出た。

「ハッヤハッヤハッヤ……！」

そう大声を出してエステルは装備している棒を思いつきり回転させた。

「ま、まさかそんなので銃弾が防げるわけ……」

アタシはエステルの行動に呆れて思わずそう呟いた。
……でも、奇跡は起こってしまった。

発射された四発の銃弾は、タイミングが多少ズレていたとは言え、
全てエステルの棒に弾き飛ばれた。

「はあ、はあ……どう？」

笑顔でそう言つたエステルは傷一つ負っていない。
相手の特務兵達は驚いてしまつてゐるのか、動きを止めてしまつて
いる。
シンジもアタシと同じようにポカンと口を開けてエステルを見てい
るのだろう。
しかし、その奇跡は再び起こせそうにない。

エステルは今の行動で肩で息をするほど体力を消耗してしまつてい
る。

また集中砲火を受けたらひとたまりもないだろう。
ジンさんと大男の兵士の闘いは互角のようだった。

「エステル、ひとまず後ろに退いて」

ヨシュアがエステルをかばうように前に出て、息を切らしてゐるエ

ステルを後ろに追いやる。

疲れているエステルでは銃を持った相手に奇襲をかけることは難しい。

アタシ達は守勢に回るしかなかつた。

今度はヨシュアがエステルと同じように四つの銃口の射程圏内に入る。

アタシは今度こそヨシュアがめつた撃ちにされる場面を想像して思わず目を閉じたんだけど……。

悲鳴を上げたのは周りに居た特務兵達の方だった。

「うわっ」

「きやああ」

「つおっ」

銃弾を発射出来たのは長い髪の女兵士一人だけだった。

その発射した銃弾も狙いが外れたのか、ヨシュアの腕をかすめるだけだった。

ヨシュアは特務兵達がひるんだすきに、エステルを連れて、銃の射程圏内から下がり、アタシ達の援護を受けられる場所まで退却した。アタシとシンジにはヨシュアの後ろ姿しか見えなかつたからヨシュアがいつたい何をしたのか分からなかつた。

「こらヨシュア、二度とあんな冷たい目をしちゃダメだつて言ったでしょっ?」

でも試合中だとつのに、エステルは突然ヨシュアに向かつて怒鳴りはじめたの。

「ごめん、でもあの場はああするしか手が無かつたから……」

「あたしは一度とヨシュアのあんな顔を見たくないの!」

エステルは目に涙を浮かべて、ヨシュアに訴えかけると、ヨシュアは真剣な顔でエステルに向かつて謝った。

「わかつた、もう絶対に『魔眼』の力を使わない事にするよ」

後でエステルに聞いたんだけど、前にエステルが魔獣に囮まれた時、助けようとしたヨシュアが凍りついたような目をしてにらみつけて魔獣達の動きを止めたんだって。

でも、エステルは感情の全てを失つたようなヨシュアの顔は見たくないって言ったみたい。

アタシもヨシュアの『魔眼』という能力があればこの試合にも確実に勝てそうだと思ったけど、エステルを悲しませたくないしね。それに、アタシもヨシュアの冷たい顔は見たくない。

「いくなつたら、アーツ（魔法）で戦つた方が良いかもね……」

アタシとシンジは、エステルとヨシュアの影に隠れながら、何とか相手の陣形を崩そうとアーツでけん制することにした。

「ソウルブラー！」

「きやあ！」

アタシは詠唱時間が少なくて済む魔法を後列の三人組の特務兵の一人にぶつけると、その特務兵は悲鳴を上げて倒れた。倒れた特務兵を慌てて残りの一人が抱えて治療を施していた。長い髪の女兵士はまた接近戦に切り替えるみたいでエステルとヨシュアにじりじりと接近していた。数の上ではこっちが有利だけど、あの女兵士からは圧倒的な強さを感じる。

エスティルとヨシュアの二人掛かりでも抑えきれないかも知れない。一触即発の戦いをアタシ達が覚悟した時、試合会場に電話の呼び出し音のようなものが響いた。

「何の真似だ？」

驚いた様子のジンさんの声がアタシ達の耳に届いた。

アタシ達がジンさんの方を見ると、ジンさんと戦っていた大男の兵士が両手を上にあげている。

気がつくと、髪の長い女兵士も、相手チームの残りの三人も同じように両手を上げていた。

そして、特務兵の一人に耳打ちされた司会者がアナウンスを報じた。

「どうやら、王国情報部特務兵チームは急な任務が入り、試合を棄権するそうです！」

観客席にもざよめきが走る。

「ちよっと、決着を着けずに逃げる気ーー？」

そう怒鳴るアタシの声に答えず、特務兵チームの五人は素早く会場を後にした。

その後、アタシ達は闘技大会の優勝チームとして表彰されたけど、アタシはなんとなく気分が晴れなかつた。

エスティルもヨシュアもシンジもジンさんも、何か釈然としない気持ちだと言つのが伝わってきた。

「シンジの予感当たつたわね」

「僕はそんなつもりで言つたんじゃないんだけど、何か悔しいよ」

アタシはシンジとそんな会話を交わしながら、遊撃士協会へと戻つた。

「優勝おめでとう！」やれこます。これで作戦の第一段階は達成ですね」
エルナンさんが笑顔でそう言つてくれて、アタシは少しうつぶんが晴れたような気がした。

「これで『テュナン公爵の夕食会に招待されると』言つ名田で城の中にとりあえず入ることができるのでね」

そうだ、アタシ達は監禁されているかもしれない王女様を助けると言つ大事な任務があるんだ。

今夜、アタシ達は闘技大会の優勝者として『テュナン公爵の夕食会に招待されてい』

そして、同時にエルベ離宮に捕らえられているかもしれないと言うクローディア王女、いやアタシの大好きな友達クローゼの救出作戦が始まるんだ。

アタシは不安を吹き飛ばすためにシンジと繋いだ手にギュッと力を込めた。

シンジもアタシの手を握り返してくれるのを感じた。
この作戦、絶対成功させようね、シンジ。

第九話 王都跳梁（後編）

『王都グランセル グランセル城 大広間』

ボクとアスカの目の前のテーブルには、豪華な料理が並んでいた。こんな時じゃなかつたらボクは美味しく食べられたんだろうけど……。

隣に座っているアスカも青い顔をして、ほとんど食事に手を付けていない。

「今宵は無礼講だ、飲め飲め！」

そう言つて赤い顔でワインを飲んでいるのはこの食事会の開催者のデュナン公爵。

今、ボクとアスカは闘技大会の優勝者として夕食会に招かれている。これからボクとアスカとジンさんの三人だけで敵である情報部の特務兵がたくさん居るこの城の中からアリシア女王様を助け出さなければならないんだ。

エステルとヨシュアはボク達と別行動を取ることになった。
女王様が居る部屋、女王宮に潜入するための変装用の服装が二人分しか揃わなかつたんだって。

そう言つわけだから、ボクとアスカはワインに口を付けるわけにはいかなかつた。

でも、ボクとアスカの気分が悪くなつたのはそれだけじゃない。

「リゾットを作りましたわ。これならのどを通りやすいから食べやすいでしょう？」

そう言つて食事係のメイドさんがチーズリゾットを持ってきてくれ

た。

「ありがとう」

- 7 -

ボクは引きつった笑顔を浮かべてリゾットのお礼を言った。
ボク達二人の胸にざわつきを与えてるのはこのメイドさんだ。
偶然かも知れないけど、このメイドさんはボク達が良く知っている
人に良く似ている……。

外見だけじゃなくて、声や仕草もそつくりなんだ……。

「説小治政の歴史」第一回

۱۵۷

ボクはそう言って寒気を感じたように体を震わせるアスカの手を取つて落ち着かせようと励ました。

「せり、あのニシトさんがこんな美味しいソウナリゾットを作れるわけじゃないか」

湯気を上げるリゾットを指差して、ボクはアスカをさとした。
とまどうアスカを前にして、ボクはスプーンですくつたリゾットを
冷ましてアスカの口へと運んだ。

「……おこしい」

アスカはちょっと驚いたようにそう言つて、ボクに向かつて微笑んでくれた。

「なんだ、その庶民的なリゾットは？」

「デュナン公爵がボク達の前に置かれたリゾットを見てそんなことを呟いた。

「まあ、そなた達庶民にはそんな料理が口に合ひのだらうな、ハハハ」

ボク達は怒りを感じながらリゾットを味わって完食した。

「あら、食べてくれたんですね、ありがとうございます」

「お気遣いありがとうございます」

「チーズの味が効いてて、とってもおいしかったわよ」

ボク達はやつとメイドさんと笑顔を交わすことが出来た。

「それでデュナン公爵、この夕食会で重大な発表があるとか」

夕食会の席に座っていたクラウスさんが市長さん達を代表するようになんと聞いた。

この夕食会にはボク達の他に、リベール王国の各都市の首長が招待されている。

ロレンスト市のクラウス市長さん。

ボース市のメイベル市長さん。

ツアイス市のマードック市長さん。

ルーアン市は市長選挙中だと云ひ事で「リンク学園長」さんが来ていた。

みんな大事な話があると聞いていたから、ワインをあんまり飲んでいない様子だった。

「つむ、その事は代わりの者から説明させよ。おい、リシャール！」

デュナン公爵が大声でそう言つと、リシャール大佐が姿を現した。夕食会の席に居た人達の間から驚きの声が上がる。

王国各地で事件を解決して英雄扱いになつてゐるリシャール大佐が悪い事をしているなんてとても信じられない。

「このような席で、見苦しい軍服姿で申し訳ありません」

リシャール大佐はそう言つてデュナン公爵の隣に立つと話を始めた。

「この度、女王陛下は退位して甥であるデュナン公爵に王位を譲ることを決意なされた」

「なんですか…」

クラウスさんと同様に席についていたみんなは驚いて悲鳴に似た声を出していた。

「すなわち、デュナン公爵が次期国王となられます」

「そんな…」

メイベルさんはショックを受けた様子で口を手で覆つてゐる。

「デュナン公爵を自分の好きなように操つて国を動かそつて企みなのね……見損なつたわ、リシャール大佐」

アスカは小さくそう呟いて怒りで体を震わせている。

「なぜ、突然そんな王位継承の話を？」

クラウスさんがそう尋ねるとリシャール大佐が答える。

「女王様はこのところ体調をお崩しになり、政治に携わることへの不安を常に申していましたのです」

「叔母上も今年で60歳。その叔母上の不安をこの私が王位を継ぐことで和らげようとしたわけだ」

デュナン公爵はそう言って誇りしげに胸を張る。

「私は女王陛下の口から直接お聞きしなければ納得いきません！」

「女王陛下は体調を崩しており、公務が出来る状態ではないのです」

「私達には女王陛下にお見舞いのお通りをすることも叶わないと言つのですか！」

メイベルさんとリシャール大佐の言い争いにクラウスさんも口を挟んだ。

「確かに公爵様の他にも王位継承権を持つ方がいらっしゃったはずではないですか？」

「クローディア王女様は帝国の皇子との縁談が決まっておりまして」「なるほど、それは仕方の無い事ですね」

クラウスさんはリシャール大佐の返事に納得したようだったけど、アスカの怒りが頂点に達しようとしているのがボクはわかった。

「王女様を政略結婚の材料にするなんて……」「あ、あのちょっとボク達はこれで失礼します！」

今にもデュナン公爵やリシャール大佐に噛みつきそうなアスカの手を引いてボク達は部屋を出た。

廊下に出てもアスカは怒りが治まらない様子で、今にもデュナン公爵やリシャール大佐の悪口を大声で叫びだしそうだった。

「おー一人とも、どうぞこちらに。エルナンさんから話は聞いています」

ミサトさん似のメイドさんにそっと声をかけられたボクはアスカの手を引いて後をついて行つた。

『王都グランセル グランセル城 メイド更衣室』

デュナン公爵やリシャール大佐のワガママな振る舞いに腹が立つていたアタシは、シンジに手を引かれるまま歩いて行つた。気がつくと、アタシとシンジがミサト似のメイドに連れて来られたのは、ロッカーのようなものがあるメイドさんが着替える部屋だった。

「アスカ、怒りは治まつた?」

「うん、まあ少しは落ち着いたわ」

アタシはゆっくりと大きく息を吐き出してシンジに答えた。
部屋についてからアタシは気持ちを落ち着かせようと何回も深呼吸を繰り返した。

その間シンジはずつとアタシの手を握つて背中を優しくさすってくれた。

「ありがと、シンジ」「どういたしまして。……それにしても、何でここに連れて来られたんだろ?」「

シンジがそう呟くと、入口のドアが開いてミサト似のメイドさんが姿を現した。

でも、様子がおかしい。

今までの笑顔じゃ無くて、目に涙を浮かべて辛そうな表情をしている。

「シンジ君、アスカ、『ごめんね……！』

「やつぱり、アンタはミサトだったのー?」

アタシは思わずそう叫んでしまった。

体がこわばるのを感じて、シンジと繋いだ手に力が入る。

頷いたミサトは突然、アタシとシンジを両脇に強く抱きしめ始めた。

「怯えないでアスカ、私にもう一度……失った絆を取り戻せるチャンスをちょうどいい……お願いします」

ミサトの自信の無い声を聞いたアタシは、ミサトを振り扱う事が出来なかつた。

アタシはシンジと一緒に頬をミサトの胸に押し付けられたまま、しばらく抱きしめられていると、安らかな気分を感じるのが分かつた。

「ありがと、シンジ君、アスカ……」

ミサトは安心したように息を吐き出した。

その胸の動きが直接アタシとシンジに伝わってくる。

アタシはミサトに抱きしめられながら次第に違和感を感じた。

果たして、今アタシを優しく抱きしめているのはミサト本人なのか。確かに、ミサトに全く優しい部分が無かつたとは言わないけど、ミサトはアタシに対して腫れものに触るより前に距離を置いていた部分があつた。

加持さんの事もあつて、アタシの方もミサトと距離を置いていたのはミサトも感じ取つていたはずだ。

そんなアタシの疑問を感じ取つたのか、ミサトは呟く。

「私は、少し未来から来た葛城ミサトなのよ」「ええつ？」

突拍子もないミサトの言葉に、アタシは顔を離してそう叫んだ。シンジも呆然とした表情をしている。

「あの、何を言つてゐるんですか、ミサトさん」「詳しく述べてゐる時間は無いけど、私は一人と別れた時のままじゃなくていろいろな事を経験した未来のミサトなのよ」「タイムスリップとか？ そんなの現実にあり得るわけ？」
「一度だけ起こつたのよ。不思議な力でね」

アタシとシンジは訝然としない様子で顔を見合せた。でも、アタシとシンジが使徒に飲み込まれて異世界にワープしたのだからあり得ない話ではないと思つた。

「私はアスカが寂しい思いを抱えていたつて事知つていたのに、シンジ君を特別に優しくしていた事がアスカを傷つけてしまつっていたつて気がついたの」

ミサトにそう言われて、アタシはミサトに対して自分が苛立つた原因がはつきりわかつた気がした。

「そうよ、アタシはいつもシンジばかりが優しくされているのを見たさ……」

「「めんね、私はアスカに拒絶されるのが怖くて、壁を作ってしまった……」

ミサトはもう一度、今度は軽く優しくアタシの事を抱きしめた。

「アタシの方もさ、ドイツに居た頃からアタシを側で支えてくれたのはミサトだつてわかつていたのに、素直になれなかつたのは悪かつたと思つてゐる」

「アスカ……」

「いつも一緒に食事とかしてくれたミサトがドイツから日本に黙つて行つちゃつた時も寂しかつたのよ」

「異動命令が急だつたから、アスカに言ひ暇がなかつたの」

それまで穏やかにアタシとミサトの様子を見ていたシンジもポツリと呟いた。

「ボクも、使徒にアスカを見捨てるような命令をしたミサトさんと、アスカから聞いた今までアスカに寂しい思いをさせたミサトさんが許せないと思つていまつたけど……」

「シンジ君？」

「やっぱり、ボクもミサトさんをずっと憎み続けるなんて嫌です。ミサトさんはボクに優しくしてくれた人だから」

「ありがとう、シンジ君……」

「前のようにシンちゃん、でいいですよ」

シンジがそう言つと、ミサトは声を上げて笑い出した。

何か、二人の間でしか分からぬ出来事でもあつたのかな。

「ミサトがまともにリゾットが作れるようになつていたのは驚いた

わ」

「アスカとシンちゃんに喜んでもらおうと、味覚から鍛え直して一生懸命作ったのよ」

アタシがからかうよつていつて、ミサトは陽気に微笑んでウインクしながらそいつていた。

「おこしかつたです」

「ありがと、シンちゃん」

なんだか、今居る場所が第三新東京市のアタシ達三人が家族として暮らしていたミサトの部屋のよつな懐かしさを感じた。

「やつやつ、今は女王様救出作戦の最中だつたわね」

ミサトはロッカーを開けるとメイドの衣装を一着取りだした。

「王女様の居る女王宮には特務兵達が見張つていて、世話係のメイドしか中に入ることができないのよ」

「へえ、メイドさんの服つて一度着てみたかったんだ」

「……一着?」

シンジが不安そつな顔でポツリと呟いた。

「シンちゃんにもメイドさんになつてもいいのよ」

ミサトはすっかりからかいモードになつていて、

「う言つていろは変わらないのね。」

「シンジは線の細い顔をしているし、きっとかわいいメイドさんになれるわよ」

「アスカまで、悪い冗談はやめてよー。」

「ほら、お姫様用のカツラもきょうじあるし、お化粧をすれば美少女メイドの出来上がりよ」

アタシはミサトと一緒にシンジを強引にメイドの服装に着替えた。た。

力チューシャに長い黒髪のカツラ、そしてお化粧も。

ふふ、アタシと違ったかわいさがあるわね。

『王都グランセル グランセル城 空中庭園』

「それではヒルダさん、後はお任せしました」

ミサトさんがメイド長のヒルダさんにやつしりと、ヒルダさんは溜息についてボク達を見送った。

どうやら少し前からミサトさんは臨時雇いのメイドとして城に潜入していただらしいけど、いろいろ失敗をやらかしていたみたい。

今回の作戦でミサトさんも王女様と一緒に城を出ると言つ事で、やつと肩の荷が下りると安心している部分もあるみたいだ。

ここに来る前に、ボク達は廊下でデュナン公爵にまた会つてしまつた。

「おや、ミサトではないか？ そちが連れているメイドは新人か？」
「はい…… わあ、『あいつを』
「ゴイです」

「キラウ！」

ミサトさんに促されてボクとアスカが答えると、トコナン公爵はアスカを頭のてっぺんからつま先までなめまわすようにやらしげ視線を送った。

「キラウ！」

「ええい～！」

「何を言こ出すの……」

ボクとアスカはトコナン公爵の言葉に驚いてあきれ返ってしまった。そして、すぐに怒りがこみ上げて来た。

「へいええええ！」

「このおおおーー！」

「ぐえい！」

トコナン公爵はボクとアスカのキックを食いつと、後ろにぶつ飛んで頭を柱に強く打ちつけて気絶してしまった。

「ふふ、見事なコニゾンキックじゃない。シン少女とアスカの身長差もほとんど無くなつたし」

そう言ひてミサトさんはボクにアスカの手を握らせと、その上にミサトさんの手を重ねた。

「アスカとシン少女がいつもハーラブになつてくれて、私は本当に嬉しいのよ」

ミサトさんの顔はからかつてこる感じだつたけど、ほんの少しだけ

真剣な表情が混じつている感じで、ボクとアスカは素直に頷いた。

「『Jの度は公爵様が』迷惑をおかけして、本当に申し訳ありませんでした」

「いえ、フィリップさん『Jから』そいませんでした」

ちょっとやりすぎたかな、デュナン公爵は白目をむいて気絶しているし。デュナン公爵の側に居た執事のような感じの人ミサトさんが謝つていた。

「多分、いつものように脳しんとうを起こしているので、公爵様が目覚めたときはこの事は全てお忘れでしょう」

「あはは、そうだと助かります」

どうやらミサトさんはデュナン公爵に何度もセクハラのような事をされて、その度にキックとかして気絶させていたみたいなんだ。そして、ボク達はいよいよ空中庭園にある女王宮の入口までたどり着いた。

「そこで止まれ！」

入口を守っている特務兵の一人が行く手を阻んだ。でも、ミサトさんの顔を確認すると敬礼の姿勢に変わった。

「あなたでしたか」

「ふふ、『J苦労さま。』このメイド一人は新しく女王様の世話係に任命されたのよ」

特務兵の人達はかぶとを被つていてボクから表情は見えないけど、

「一人ともボクの方を見ている。

もしかして、変装がばれてしまったんだろ？

「あの、あなたのお名前は？」

「ユイ……ですけど」

「お名前も可憐ですね、お仕事がんばってください」

多分、アスカとミサトさんは心の中でお腹をかかえて笑っているんだろうな。

ボクとしても可憐だと言われて複雑な気分だった。

そしてボクとアスカは初めて女王宮の中に足を踏み入れた。

「綺麗な模様ね……」

アスカが感心したようにそう呟く。

豪華な宝石によって飾られてはいなかつたけど、壁や柱に刻まれた細かい彫刻はとても美しいものだつた。

派手さは無いけど、気品のあるたたずまいと言つた感じなのかな。

ボクとアスカは辺りをキヨロキヨロと見回しながらミサトさんの後について行く。

「アリシア様、ミサトです」

「お入りなさい」

ミサトさんがドアをノックすると落ち着いた感じの女の人の声が中から返ってきた。

「失礼します」

ミサトさんに続いてボク達が入ると落ち着いた年配の女の人人が立ち

あがつてボク達に向かつて微笑んでくれた。

「こりゃ、今日は新しい子たちのかじり」
「はい、じゅうらの一人がアスカとシンジ君です」
「まあ実際にお会いできて嬉しいわ」

突然ミサトによつて紹介されたボクとアスカは驚いた。

「あの女王様、なんでアタシ達の事を？」

「ミサトさんが、お茶の話題に話してくれたのよ。貴方達二人との同居生活の事をね」

「ミサト…」

アスカがジト目でミサトさんをにらみつけるとミサトさんは氣まずそうに笑つた。

「ミサトさんを責めないでください、ここ最近重苦しく空氣を感じていた私を励まそうとしてくれたのです」

女王様にそう言われて、ボク達はここに来た目的を思出した。

「女王様、ボク達がここに来たのは……」

「お話を落ち着いて聞きましょう」

ボク達は女王様にうながされて、席に座つて紅茶を飲みながら、王女様のお手製のクッキーを食べながら、世間話をするように事情を話した。

「やつですか、リシャール大佐はやはりそのよつた事を……」

女王様はさつまつて深い溜息をついた。

「ですから、女王様の身の安全を確保する必要があるのです」

「しかし、ここから逃げ出そうとした方が、逆にリシャール大佐達は私の身を害さうとするのではないでしょうか？」

「それは……」

女王様に反論されてもミサトさんは言葉に詰まった。

「ふふ、ちょっと言つ過ぎましたか。着替えてくるのでお待ちください」

しばらくすると女王様はスポーティな服装に着替えて更衣室から出てきた。

「ああ、地下水路から外に出るのでしょ? 参りましょ? つか

「……そこまでご存知でしたか?」

「私も良くお城を抜け出していたのですから」

心なしか楽しげにさつまつ女王様にミサトさんも驚いているようだ。

「それでは、脱出しましょ? うか

「外には特務兵が見張つて居ると思つんですけど、どうやって女王様を連れ出すんですか?」

「援軍が来ないうちに强行突破よ」

ミサトさんはボクの質問にさつまつ答えた。

「うお?」

「ぐふ?」

入口を見張っていた特務兵の一人はミサトさんの奇襲によってあつとこゝ間に氣絶させられた。

ミサトさんの後ろを女王様が、そしてアスカとボクが続いて走る。しかし、空中庭園の出口でボク達は敵に見つかってしまった！

「叔母上、どうして行かれるつもりですか？ 女王宮から出られては困りますな」

姿を現したのはデュナン公爵とフィリップさんだった。どうやらボク達を待ち伏せしていたらしい、というか少し前に氣絶から立ち直ったみたいだつた。

「何やう、面白い事になつてこようだね」

そう言つて姿を現したのはピーロのような服装をしたボクと同じ年ぐらいいの男の子だった。

「初めてまして、僕は結社の一員で”見届け人”的カンパネルラ」

カンパネルラはそう言つと、導力銃を取り出して女王様に狙いを定めた。

「女王様が逃げ出そつとしたら、殺せつて教授から命令を受けているんだ」

「何ですつてー？」

アスカが驚いて叫んだ。

ボクは女王様を守ろうと動いたとしたけど……。

「おつと、妙な動きをしたら僕はすぐ女王様を撃つちやうからね」

そうカンパネルラに言われたボクは動きを止めるしかなかつた。

「叔母上を殺す！？ 約束が違うではないか！」

いきなり叫び出したのはデュナン公爵だつた。

「ハハ、君は何を言つているんだい。女王様が居なくなれば君はすんなりと王様になれるじゃないか」

「私は叔母上を殺そうなどとは思つていい！」

「アハハ、君は黙つて僕らに従つてているだけで王様になれるんだ、余計な事をしないで欲しいな」

カンパネルラはそう言つて大笑いをした。

「叔母上を害そつとするやつは私が許さん！」

デュナン公爵はそう叫んで、カンパネルラにタックルをかまそつとした。

しかし、間一髪でかわされてデュナン公爵は壁に思いつきつ体当たりをして氣絶してしまつた。

「おやおや、ただのボンボンかと思つたけど意外と根性があるじゃないか」

カンパネルラは軽く笑うと、銃の引き金を引いた！

軽い破裂音が響いた後、銃から飛び出したのは手品とかで使う万国旗みたいな物だつた。

「アハハ、驚いたかい？ 言つただろう、僕は”見届け人”だつて。君達が何をしようと、僕は干渉しないのさ。それでは、『じきげんよう』

驚いて呆然としているボク達の前で、カンパネルラは指を鳴らすと、煙のようない姿を消してしまつた。

「アリシア女王様、新手が来ないうちにお逃げください」

「フィリップさんにそう言われて、ボク達は城の地下に向かつて再び走りはじめた。

城の地下に降りると、地下水路の入り口ではジンさんが待つていた。

「追手は俺が食い止める。お前さん達は地下水路に早く！」

「無理しないでください、ジンさん」

「おひ、女王様を頼んだぜ」

ボク達が地下水路に入ると、暗闇の中から姿を現したのは加持さんだった。

「上手く行つたようだな、ミサト」

「道案内を頼むわね、リョウジ」

予想できないことじやなかつたけど、ボクとアスカは突然の加持さんとの再会に驚いてしまつた。

「シンジ君、アスカ。……久しぶりだな」

「加持さん」

「加持さん……」

加持さんはボクとアスカの手を握つた後、真剣な顔になる。

「……だが、今は再会を喜んでいる時間が無いんだ、急いでついて
来てくれ」

ボク達は加持さんの後をついて迷路のような地下水路を進んで行く。でも、加持さんより女王様の方が道にくわしかったのは驚いた。そして、ボク達が地下水路から出ると、そこはグランセル市街の西区画だった。

『王都グランセル 西区画 グランセル港』

西区画に出たアタシ達はすぐに大聖堂に逃げ込んだ。そこには、別行動をとっていたエステルとヨシュア、遊撃士協会の仲間達がアタシ達の到着を待っていたの。

驚いたのはそこに居たクローゼが女王様の孫娘、王女様だったって事。

エステルは随分前に知っていたみたいだけど、アタシ達に黙つていたみたい。

普通の女の子として友達でいてもらいたいといつクローゼの希望だつたようだけど、水くさい感じがするわよね。

合流したのも束の間、アタシ達はまたエステルとヨシュアと別行動で、ミサトと加持さんと一緒にグランセル港へ向かう事になった。湖のほとりに建てられた建物にアタシ達一人に来て欲しいと言う事だった。

それって、まさか……アタシとシンジだけが呼ばれたから、アタシは予感のようなものを感じていた。

ミサトと加持さんは着いたら説明してくれるって言つし……アタシ

達はまた一人を信じるつて決めたんだもん、何も聞かないでついて行くしかない。

港で船に乗りうとしたアタシ達の行く手を阻んだのは、ロボットの手のひらに乗つている小さな女の子……レンと、その後ろに居る特務兵のグループと戦車のような兵器だった。

「レン！？」

「ふふ、アスカお姉ちゃんにシンジお兄ちゃん、『ハヤブサ』よつ

……何で、レンがこんな所に居るの？

しかも、情報部の特務兵達と一緒に……。

アタシはレンの手に握られている死神が持つている大きな鎌のよつなものを見て寒気を覚えた。

「まさか……」

「やつ、結社の一員、執行者ナンバー15殲滅天使レン。それがレンの正体よ」

「うそ、こんな小さな子が執行者だなんて！」

アタシはレンの言つ事にショックを受けて叫んでばかりいた。

「一緒に居たティータはどうしたんだよ！」

「ティータはレン達の仲間として働いても『ハヤブサ』ために情報部の基地に招待をせてもらつたわ」

「どうしてこんなことするんだよ……今すぐやめなよ……」

「嫌よ、レンが自分で望んでやつてている事なの」

シンジとレンが言い争いをしているのを少しの間眺めていたアタシだつたけど、たまらずアタシも口を挟んだ。

「レン、アンタ結社なんかすぐ辞めやしないなさい！ パパとママが悲しむわよ！」

「ふん、パパやママなんか大嫌い！ だって、レンの事を捨てちゃつたのよー！」

「そんなこと無いわ、きっとレンのママは戻つてくるー。」

アタシがそう叫び、レンはアタシを小馬鹿にしたように笑い出した。

「アスカお姉ちゃんは本当にお人好しね。まだそんなうそを信じているの？」

「じゃあレンのパパとママは……？」

「パパとママはレンが五歳の時ね、人買いにレンを売り払つてどつかに行つちやつたの」

「そんな……！」

「ママが優しいだなんて、アスカお姉ちゃんの勝手な思い込みじゃないかしら」

「思い込み……？」

レンにそう言われたアタシの頭の中にママとの想い出が浮かんで来た。

ママは小さい頃からアタシを大切にしてくれて……縫いぐるみとか作ってくれて……。

「ルシオラに幸せな夢でも見せてもらひていればよかつたのに……

クスクス

そのレンの言葉がさらなる追い打つけになつた。

前にルシオラさんに見せられた夢の中に出で來たママは、アタシの想像によつて創られた存在だつて叫びるのはわかつていた。

アタシは自分が傷つかないよつて偽りの母親像を作り上げていたつていうの？

そして、あの嫌な記憶が……ママがアタシを絞め殺そうとした時のこと思い出した。

「い、いやああああ！」

アタシは頭を抱えて冷たい石畳の中に座り込んでしまった。でも、そんなアタシを絶望の底から救い出してくれたのはシンジだつた。

「アスカ！」

「シンジ？」

シンジはアタシの手を両手で握ると、アタシの顔を見つめて話し始めた。

「ボクも自分の母さんが優しかったかどうかなんて、よく覚えていないよ。小さい頃に居なくなっちゃったからさ」

戸惑つて何も答えられないアタシに向かってシンジはささやいて訴える。

「でも、ボクは母さんが優しかったんだって信じている、アスカだつてそなんなんだろう？ まだ、母さんがどんな人だったって決まつたわけじゃないんだ。希望はあると想つよ」

シンジの言葉を聞いて、アタシは胸を打たれる思いがした。

「やうね、アタシがママを信じてあげないと……ありがと、
シンジ」

「そんなん、お礼なんていいよ」

「アタシを何度も助けてくれたシンジの手、好きだよ」

アタシはちゅうしゃって、シンジにつかまれていない方の手でシンジの手をそっとなでた。

「何よ、勝手に仲良くなっちゃって！ レンは頭に来たわ！」

いらだつた声でそつと言つたレンがアタシ達をにらみつけて手に持つた大鎌を構える。

アタシとシンジも手を放して戦闘態勢に入る。

ロボットの手のひらに乗つたレンの背後に居る特務兵達も、アタシ達の側に居るミサトと加持さんからも殺気が走るのを感じた。

……やっぱり戦うしかないの？

アタシはレンが結社の一員だととしても戦う事に気が進まなかつた。にらみ合いを続けるアタシ達の前には、風の音だけが聞こえる静寂が広がつていた……。

第十話 解放された輝く環

《王都グランセル 西区画 グランセル港》

静かな港で、ボクとアスカとミサトさんと加持さんの四人と、ロボット兵器の手のひらに乗っているレンとその後ろに居る特務兵達と特務兵の戦車がにらみ合っている。

その静寂を破つたのは勝ち誇つたレンの声だった。

「ここのパテル＝マテルはね、ママのように優しくレンを包み込んでくれてパパのように力強いのよー。本当のママとパパなんて要らないわ！」

レンの言葉を聞いて、アスカは怒りを抑えきれないで呟いている。

「ロボットをパパとママだと想いこむ事でしか自分の傷ついた心をいやす事が出来ないなんて……悲しそうだわ」

そんな様子のアスカをレンはせせら笑つた。

「こちには特務兵の戦車までいるのよ、バカな抵抗は止めたらどうかしり」

ボクはこの状況に歯ぎしりした。

これじやあ、突破できないじゃないか……。

「ほら特務兵のみんな、アスカ達をやつつけちゃいなさいー！」

ボクはアスカだけは守らうと、ATフィールドを張るために精神を

集中させようとした。

でも、予想もしなかつた事にボクは驚いてしまったんだ。

「さあ、何するのよ！」

特務兵の戦車砲が大きな音を上げて打つたのはレンの乗っているロボット、パテル＝マテルだつた。

背後から不意をつかれたパテル＝マテルは衝撃を受けてレンを地面に落した。

「オーホッホッホ、よくも今まで私達を利用してくれたわね」

そう言つて高笑いをして戦車から顔を出したのは情報部特務部隊の副隊長のカノーネさんだつた。

「何よカノーネ、私達結社を裏切る気なの？」

地面に落ちたレンは一瞬驚いた顔になつたが、すぐに振り返つてカノーネさんにらみつけた。

「裏切りとはお笑い草ね、リシャール様に汚名を着せる事は許せません！」

「ふん、リシャール大佐は自分でクーデターを起こしたんじゃない」「フン、全てあんたの所の教授の企みじやないの。リシャール様の心の闇を利用してね！」

ボクは一人の言い争いを聞いて驚いた。

立派な軍人として知られるリシャールさんにも暗い心の部分があつたんだね。

そして、リシャールさんは昔のヨシュアみたいにアルバ教授によつ

てそこをつっこまれてしまつた……。

「I.IJで結社の幹部を倒せば、女王様もきっとリシャール様の罪を許して下さる！ 撃ちまくくなさい！」

カノーネさんがそう命令を下すと、戦車をはじめとして特務兵達は一斉射撃を始めた。

パテル＝マテルはレンをかばつて砲弾の前に立ちふさがつた。爆発と煙が上がり、次々とはがれ落ちて行くパテル＝マテルの装甲。

「や、やめて……！ IJのままじやパテル＝マテルが壊れちゃうー！」

レンは泣きそうな顔で必死に特務兵達に向かつて呼びかける。でも、なかなか砲撃は止まらなかつた。

砲撃が止んで視界が晴れると、そこにはコアがむき出しになつたパテル＝マテルに守られるレンの姿が見えた。

「フフ、もう一息ね。あのコアを破壊してしまえばあの物騒な機動兵器を完全に破壊することが出来るわ、やつてしまいなさい！」

カノーネさんの命令で特務兵達は武器を構える。

「止めてー！」

アスカはそう叫んで駆け出して、パテル＝マテルとレンをかばつよう立ふさがつた。

ボクもミサトさんや加持さんと一緒にアスカの側にかけつけた。

「もつーの子達には戦う力は無いわ！」

「邪魔よ、そこをどきなさい！」

アスカとカノーネさんが言い争う姿をレンは驚いた様子で眺めている。

「カノーネ、結社の幹部を無力化すると言ひ貴方達の任務は完了したはず。すぐに攻撃を停止して、リシャール大佐の援軍に向かいなさい」

「ミサト、貴方まで何を言い出すの!?」

特務部隊の指揮官の一人であるミサトがそう命令を下すと、特務兵達も混乱してざわつきだした。

「レンの今のパパとママを壊さないでください、お願ひします……」

アスカがそう言つて特務兵達に向かつて頭を下げる、辺りは静まり返った。

そして視線がカノーネさんに集中する。

「わ、分かったわよ……」

カノーネさんがそう言つて引き下がると、ボク達の間にホツとした空気が流れた。

「じゃあ、その幹部の子はこちうで保護するから引き渡しなさい」

溜息をついてカノーネさんがそういうと、レンは突然アスカに抱きついた。

「いやつ、レンはアスカお姉ちゃんについて行く!」

「レン?」

「だつて、パパもママも、カノーネも、うそつきな大人達なんて大
つきらい！ 優しくしてくれたのはアス力お姉ちゃんだけなんだか
らー。」

レンがそう叫ぶと、カノーネさんは苦い表情でレンをにらみつけた。
そんなカノーネさんに向かつてミサトさんが愛想笑いを浮かべて話
しかける。

「まあまあ、ここはあたし達に任せて」

「くつ、何かあつたら貴方の責任ですかねー。」

カノーネさんはそう吐き捨てた。

「おこミサト、急がないとやばいぞ」

加持さんにそう声をかけられたミサトさんはボク達を先導するよう
に走りだした。

ボクとアスカはレンの手を取つて後について駆け出していく。
その後ろをダメージを受けたパテル＝マテルがついて来る。
ボク達はミサトさん達と一緒に待っていた船に乗り込んだ……。

『ヴァレリア湖沿岸 秘密の研究所』

アタシ達が連れて来られたのは、以前に見た事のあるような場所…
…ネルフの発令所のようなところだった。

「もしかして……ボク達にまたエヴァに乗れって言つたの？」
「……そうなのよ、ごめんねアスカ、シンジ君」

そう言ってアタシ達の前に姿を現したのはリツコだった。

「ミサトさん達はボク達をまたエヴァに乗せるために優しいフリをしたんだ……」

「シンジ君、私達の話を聞いて！」

ミサトがそう言つても、シンジは頭を抱えて聞く耳を持たない。

「またボクの気持ちを裏切ったんだ！」

そう叫ぶシンジをレンが心細い目で見つめている。

アタシもシンジと同じようにショックを受けていたけど、何とか理性の方が勝ったみたいだ。

このままじゃいけないと思つたアタシはシンジを思いつきり突き飛ばした。

「アスカ？」

しりもちをついて驚いた顔になつたシンジにアタシは指を突き付けてやつた。

「リツコ達の話も聞かないで決めつけるんじゃないわよー。」

「アスカお姉ちゃん……」

「相手の気持ちを理解しようとしてしないで自分の気持ちを押し付けようなんていけないわ」

アタシはシンジの手を握つて優しく話しかける。

「人を信じる事は大切だつて、シンジもアタシに言つてくれたじや

ない

「……」

「今まで何回も人を信じて傷ついた事もあつたけど、心を閉じちゃうのは悲しい事よ」

「そうだね……」

シンジはアタシに向かつて穏やかに微笑むと、リシリヤリサト達に向かつて謝った。

「『めんなさ』『サトさん、リツ』『セさん、加持さん……ボクもひどい事を言つてしまつて……』

「いいのよ、私も今までシンジ君達を傷つけるような事をしてしまつたし」

急に仲直りしたように見えたシンジ達を見て、レンはうつと感つたように見える。

「アスカお姉ちゃん、一体どうなつていいの？ シンジお兄ちゃんが急に仲良くなつたように見えるんだけど」

「雨降つて地固まるつて事よ。傷つけあつても、取り戻せる縁はあると思うわ」

アタシがそう言つと、レンは暗い顔をしてうつむいた。

「レンはヨシュアお兄ちゃんにひどい」と言つやつた。……謝れば許してくれるかな？」

「えつと、ヨシュアなら大丈夫よ」

アタシがそう言つてレンの頭をなでると、レンは安心したように笑顔を見せてくれた。

「アスカ、あなたが居てくれて助かつたわ」

「んで、アタシ達がエヴァに乗らなければいけない理由は？」

「これから、北の国境のハーケン門から帝国軍の戦車部隊が攻め込んでくるの」

リツコがサラッと言つた衝撃的な事に、アタシとシンジは固まつてしまつほど驚いた。

「何で突然？」

「きつと結社の仕業よ。帝国の宰相は結社と繋がつていろいろ聞いてたわ」

レンがそう言つと、リツコは頷いた。

「過去に帝国がリベル王国に進攻してきた時は、あつという間にハーケン門は打ち破られてロレンントとボースが占領されたらしいわね」

確かに、エヌテルのママも戦争の犠牲者になつたんだつけるアタシはリツコの言葉を聞いて胸が痛んだ。

「通常兵器がA-ツィードに無力だと言つ事は知つてゐるわよね」

「それつて……」

「そこで一人にはエヴァでハーケン門からの侵攻を食い止めて欲しいのよ」

「アタシ達二人だけで！？」

アタシがそう言つと、リツコは申し訳なさそうに頷いた。

「戦車つて事は人が乗っているんですね……」

シンジが暗い顔でそうポツリと呟くと、アタシはハツとなつた。
アタシ達は今まで人の命を奪つてきたことなんて無かつた。
使徒に飲み込まれてこの世界に来た後だつて……。

「『』の武力衝突による被害を抑えるために……あなた達にエヴァに
乗つてもらいたいの」

「二人はなるべく相手側にも死傷者を出さないようこ、侵攻を防い
で欲しいのよ」

リツコとミサトの言葉にアタシとシンジは顔を見合させた後、ゆつ
くつと頷いた。

『ボース地方 ハーケン門』

ボクとアスカは一年ぶりに初号機と式号機に乗り込んだ。

エヴァに乗るのはかなり久しぶりだつたからシンクロ出来るかどうか
不安だつたけど、リツコさん達に聞かされたエヴァの真実がその
不安をやわらげてくれた。

初号機と式号機の中にはボクの母さんとアスカの母さんの魂が入っ
ているんだつて。

魂と言うのは言いかえれば肉体を失つた精神みたいなもので、それ
を人造人間のエヴァに入れているつてことみたいだ。

エントリープラグの中に居るのは母さんのお腹の中に居る事になる
のかな……。

ボクとアスカはエントリープラグから母さんに呼びかけるかのよう
にエヴァにシンクロをした。

すると、ボク達一人は今までにない程の高いシンクロ率が出せたんだ。

「ママ、ずっとアタシの側に居てくれたのね……アタシの方から心を開きさせていただけだつたんだ」

「もしかして、母さん達はボク達のために自分からエヴァに……？」

「でも、それを強要したのは当時のゲヒルン……今のネルフなのよ。『めんね……』」

リツコさんは辛そうな顔をして謝つている。

でも、ミサトさんはもつと辛そうな顔だつた。

「私はそんなシンジ君達を自分の使徒の復讐のための道具に……」

「ミサトさん、もういいです」

「でも、謝らないと……」

「いひつて言つてこりうだらうー。」

ボクはつこミサトさんに向かつて怒鳴つてしまつた。

「ミサトは今はアタシ達の事、そつは思つていなんじょ？？」

「ええ……」

「アタシ達は今を大切にして行こうと決めてるのよ。あんまり過去を振り返らなくとも、ね？」

アスカがフォローしてくれたおかげで、雰囲気はやわらいでくれた。

「母さん、ボクに力を貸して……アスカやみんなを守りたいんだ」

「ママ、お願い」

ボクとアスカがさりに念じると、初号機と弐号機の背中から翼のよ

うな物が生えて來た。

「エヴァの中には眠る、S2機関が覺醒したのよ」

リックさんの話によると、エヴァは空を飛べるようになつて、電源ケーブルが無くてもいつまでも動けるようになつたみたいだ。エヴァにこんな力があるなんて……。

「行くよ、アスカ」「そうね、シンジ」

ボク達は空を飛んで、ハーケン門の北、帝国側の平原で戦車の列が王国に向かつて進撃中なのが見えた。

「間にあつたみたいだね」「ギリギリってところね」

ボク達は急いで戦車達の進路を塞ぐように着地した。着地の衝撃で、平原に大きなクレーターのような段差が出来る。きっと帝国軍の戦車隊は王国軍の不意をついたと思い込んでいたんだろう、ボク達のエヴァが現れただけでかなりの間混乱をしていた。やがて、戦車達の主砲がこちらに向けられた。

「ママ、解つているわ、ATフィールドの意味！」

式号機の周りに強力なATフィールドが展開された。ボクも母さんの魂の宿っている初号機を守ろうと強く念じると、今までとは違つた力強いATフィールドが張られるのを感じた。帝国の戦車達がボク達に向かつて一斉射撃を始めた。派手に爆煙が上がるけど、エヴァには傷一つ付けられなかつた。

「無駄よ！ こつちにはアーティフィールドがあるんだから！」

砲撃でエヴァを破壊する」ことが無理だと言う事が分かると、戦車の一部がボク達を強行突破しようと動き出した。

「行かせない！」

ボクは戦車をわしづかみや足蹴りをして戦車の侵攻を防いだ。着地した時クレーターのようになってしまった地形も足止めに役立つていてよつだった。

『グランセル城地下 封印区画』

「結社が特務兵達を使って城の地下を掘っていたなんて……」

「私も伝承でその存在は聞かされていましたが、城の地下深くにあるとは知りませんでした」

クローゼもアリシア女王様も知らなかつた輝く環の存在を結社が知つていたなんて驚きね。

すでに結社の幹部、アルバ教授はリシャール大佐達と一緒に地下の最深部に向かつて潜つて行つているみたい。

あたし達は何が起こつているのかよく分からぬけど、アルバ教授達の企みを止めなければいけない事は確かだつた。

あたし達は遊撃士のみんなと一緒に、封印区画を守る魔獣を蹴散らしながら奥へと進んで行つた。

「輝く環なんて物がアルバ教授に渡つたらとんでもない事になるわ

ね

「そうだね、何としてでも追いつかないと」

「うひちやー！」

後から合流してくれたケビンさんとリースさんが案内人になつてくれたおかげで、あたし達は迷路のような場所でも迷わずに進む事が出来た。

ケビンさんとリースさんは聖杯騎士だから、こいついう遺跡の構造には詳しいんだって。

でも、いくら急いで進んでも、先に進んだアルバ教授達には追いつけなかつた。

そして、あたし達はついに最深部にある大広間までたどり着いてしまつた……。

「くくっ、この台座に、ゴスペルをはめ込めば『輝く環』の封印が解けるのだな？」

「……はい」

アルバ教授の声と、それに答える大男の特務兵の声、側に無言で立つているリシャール大佐とヴァルターさんの四人が台座の前に居るのが見えた。

あたし達の見ている前で、アルバ教授は持つていた黒い物を台座にはめる。

すると遺跡全体が大きく振動した。

「ふふ、役者はそろつたようですね。これから私は『輝く環』の力を手に入れる。そして私は神となり、人類補完計画を実行するのだ！」

アルバ教授はあたし達の方を振り返つて、勝ち誇つたようにそう宣

言をした。

「人類補完計画？」

ルシオラさんも言つていたその言葉が気になつたあたしは大声で聞いてしまつた。

「人類補完計画とは、出来そこないの群体である人類を完成された一つの存在に昇華させると言う事ですよ」

「ええつ？」

アルバ教授が得意氣に話し始めた説明に、あたしはポカンとしてしまつた。

「人類は不要な肉体を捨て、補完された無欠の存在となる」「それって、みんなの体が抜け殻みたいになっちゃうつて事！？」

話を理解できたあたしは武器である棒を構えてアルバ教授をにらみつけた。

「フハハ、新たなる神の誕生をその目で見るがいい！」

アルバ教授は狂喜してそう叫んだ。

でも、次の瞬間アルバ教授は特務兵の大男に突き飛ばされ、リシャール大佐によつて持つていた杖を奪われた。

「碇ゲンドウ、まさか私を裏切つて貴方が神になるつもりですか！」

アルバ教授ににらみつけられた特務兵の大男がカブトを外して答える。

「私は神になるつもりはありませんよ」「ヴァルター、何をしているんですか、裏切り者の一人を蹴散らしながら！」

「ふん、何を言っている。結社を裏切つて神になろうとしたのは教授じゃないか。福音計画はどこに行つたんだよ」

ヴァルターさんはそう言つと、立ちあがろうとしていたアルバ教授に思いつきりパンチとキックを叩きこんだ！
派手に骨の折れる音がこちらまで聞こえる。

「ありやりや、教授の足は思いつきり骨折したね」

今まで気配を感じさせなかつた結社の一員、カンパネルラが姿を現した。

カンパネルラの言葉通り、教授は膝を押されて苦しんでいる。
あたし達は目の前で起きた結社の幹部の仲間割れに驚くしかなかつた。

そして部屋の振動は治まつて、台座にまばゆい光を放つ光の環が姿を現した。

「これが、『輝く環』？」

「エスティル君、ヨシュア君、『輝く環』の元へ来るのはだ」

突然、大男の特務兵に呼ばれたあたし達は驚いた。

「なんで、あたし達の事を！？」

あたしとヨシュアが『輝く環』に近づくことをためらつていると、リシャール大佐とヴァルターさんが道を開けた。

「行きたまえ」

「フン」

「どうやら一人ともあたし達と敵対する様子はないみたい。あたしは後ろに居る仲間達に向かつてうなづくと、ヨシュアと一緒に『輝く環』と大男さんの居る所へと近づいた。

「私の名は碇ゲンドウ。君達の事は息子のシンジから聞いているし、私自身も君達を知っている」

「ええつ、おじさんみたいな怖そうな人がシンジのお父さん？　あんまり似てない！」

「エスティル、驚くところが違うって」

あたしはそう言つてゲンドウさんの顔をまじまじと眺めた。

「言われてみれば、おでこの部分が似ているかもね！」

「エスティル、だから違うって」

「ふつ」

あたし達のやり取りを見てゲンドウさんは少し笑つたみたいだつた。

「私は未来からやってきた存在なのだ」

「え？」

「君達を呼んだのは、君達の手で『輝く環』の力を発動して欲しいと思つたからだ」

「待つてください、僕達は『輝く環』を止めるために来たんですよ？　人類補完計画などと言うバカげたことを防ぐために」

ヨシュアはゲンドウさんの言葉を聞いてたまらずそう叫んだ。

「君達なら『輝く環』の力を正しく解放できる。インパクトにより人は魂だけの存在になってしまっても再び戻れる」

「そんなこと言われても……」

「『輝く環』の力が発動されなければ、いかにして私がここに立つていることもできないのだ、頼む」

ゲンドウさんに頭を下げられても、あたし達は迷っていた。広間の中にはみんなもゲンドウさんの言う事を信じていいのか疑つていてる様子だった。

「エスティル、ヨシュア、逃げてはいけないぞ」

「父さん！」

「兄さん！」

広間の入口から姿を現したのはカシウス父さんとレー・ヴェさんだった。

「確かにお前達の前には新たなる困難が立ちふさがるかもしねれない。しかし、希望があるんだろう？」

「それに、『輝く環』を再び封印する事は未来に不安を残すと言つ事だ」

父さんとレー・ヴェさんに言われて、あたしとヨシュアは考え込んだ。広間に集まつたみんなも黙つてあたし達を見つめている。

「ヨシュア……あたし達、大丈夫だよね」

「うん、きっと大丈夫だよ」

あたし達は見つめ合いつつと手を取り合つた。

そして、ゲンジウさんに向かってゆづりつづけた。

「それでは、『輝く環』に念じて一人で手を触れるのだ」

あたしは素早くヨシコアを抱き寄せて軽くキスをすると、口を離してヨシコアの手を握つて、もう片方の手をヨシコアと一緒に『輝く環』に向かつて伸ばした。

「魂だけになつたらキスする」ともできなくなるかも知れないから」「やうだね」

「ヨシコアは、何を考えているの?」

「ヒステルのことばかり考えてる」

「……あたしもヨシコアの事……」

あたし達の目の前がまばゆい光に包まれた。

その光はどんどんと広がり、世界を飲みこんで行くのだらう。

きっと、シンジとアスカも。

この光が希望の光ありますよ!」……。

あたしはそう願つていた……。

続編『影の国編』製作予告中止の謝罪とリメイク版製作延期のお知らせ

2010年5月、『リベル王国來訪編（FC）』完結時において、第一部『影の国編（SC）』の製作予告の物語を書きましたが、その中止を宣言致します、申し訳ありません。

原因はいろいろありますが、主な原因是作者である私の文章を書いて公開すると書くペースが、数日に1回から、一ヶ月に1・2回ぐらいに落ち込んでしまったと自覚してしまった事です。

2010年10月現在、私は2つの作品の連載を進めていますが、そちらのペースも長期化に伴いペースが落ちてしまい、完成予定が大幅に伸びてしました。

そこで、続編の製作中止を宣言させて頂きました。

過去に公開して現在は閻歴史化してしまった『軌跡の戦士エヴァンゲリオン』を再公開し続編として、この連載を物語上で完結させたいと思います。

この連載について頂いたご感想に対する私の返事に書かれている通り、冒頭から1人称であった文章を3人称に変更した作品をリメイク版として製作したいと思っています。

私は2つの作品のどちらかの連載が完結しましたら、この連載作品の続編制作を開始しようと考えておりましたが、この調子では1年以内に連載を開始するかどうかお約束する事すらできなくなりました。

心苦しいのですが、リメイク版の連載開始時期は未定とさせて頂きます。

この作品は2010年8月に初めて一次創作小説を書いた私が恐れ多くも2つの別々の小説投稿サイトに「僕のアスカ。太陽のような

君」と「軌跡の戦士エヴァンゲリオン」という題名に分けて投稿した経緯から、一部の読者の方から「」意見を頂き、ご迷惑をおかけしたと言う事で、投稿サイトの関係者様に頭を下げ、「」厚情によつてこちらのサイトで公開する許可を頂きました。

2010/10/24

以上

遅れて申し訳ありません、追加修正です。

誤り この作品は2010年8月に初めて

正しい表記 この作品は2009年8月に初めて

私の友人から「おかしくないか?」と指摘を受けたので誤りに気がついて修正しました。

私がエヴァンゲリオンの「LAS小説を書き始めたのは2009年の8月からです。

(それ以前は自サイトで短編「Fighting of The Black Demon」という小説を書いて載せていましたが、サイト改装と共に消しました)

2010/12/10

以上

外伝一話 虫取り網と少女達の話

アタシがシンジと一緒にエヴァに乗ったまま使徒に飲み込まれて、今までの常識が通じない剣と魔法の世界に不時着してからしばらくになる。

幸運にもアタシたちはカシウス・ブライトと言う新しい保護者を得て、こうして彼の家に住まわせてもらっている。

でも、何もすることが無く、新しい家族となつたエステルとコシュアの一人に馴染めなかつたアタシは、こうして静かに庭にある大木に一人離れて寄りかかっていた。

ぼーっとアタシが見つめている庭にある大きな池の側では、エステルとコシュアとシンジの三人が釣りを楽しみながら騒いでいる。

どうやらシンジのやつはエステルに押し切られて釣りをさせられてしまつているようだ。

シンジと他の女が仲良くなっていて怒つている？

「冗談じゃないわ、誰があんなやつなんか！」

一人で居て寂しくないか、ですって？

「ん、アタシは自分で考え、自分一人で生きて、自分で勝手に死ぬの。」

「だってアタシ、聞いたやつたんだから。」

ネルフにとつてアタシは使徒と戦う”駒”の一つにしか過ぎないんだつて。

誰もアタシが居なくなつたつて、損したぐらいにしか考えていないんだわ。

アタシは憂鬱な気分で視線を反らした。

無邪気に遊んでいる三人の姿が、アタシには眩しそぎる気がして。それからどのくらい時間が立つたのだろう。

三十分にも満たないかもしないし、三時間以上過ぎていたのかもしない。

アタシは自分がいつの間にか眠りこんでしまつていた事に気がついた。

この春の暖かい陽気と、悔しいけど、この家が醸し出す、妙に居心地の良い空氣のせいかもしない。

アタシは大きく深呼吸をして伸びをすると、側に人影が立っている事に気がついた。

「アスカ～、良く眠れた？　今日こそあたしと虫採りに行くわよー！」

「アスカ～、このアタシと良くなつた栗色のツインテールと薔薇色の瞳、子供のような無邪気な笑顔はまさにエステルのやつだ。

気がついたアタシはとっさに逃げよつとしたけど、エステルに廻り込まれて逃げる事ができない。

距離を縮めよつとするエステルから離れよつと後ずさるアタシの背中に、大木がぶち当たった。

アタシはこれ以上後退する事ができない。

そして、アタシの手に無理やり虫取り網を握らせよつとするエステル。

「虫採りなんて、い・や・よー。」

そう言つてアタシが拒否しても、エステルのやつは聞く耳を持たない。

「い・い・か・ら、受け取らなさい！」

この怪力女、何で馬鹿力なの？

アタシはネルフで多少格闘訓練を受けたけど、エステルの腕を振り払えないでいた。

なんて強情なのかしらー！

あたしは新しくできた家族の一人と早く仲良くなりたいのに。

母さんが死んじゃつてから、ずっと切望していた願い事。

それは新しい家族が欲しいって事だった。

父さんはあれからアタシに気を使って軍隊の仕事を辞めて遊撃士になってくれたけど、遊撃士協会の仕事がある時はあたしはいつも家で一人ぼっち。

ショラ姉が王国一周の旅に出てから、あたしは一人で棒術の練習をすることが多くなった。

だって、虫を捕まえても生きている間に見せる事ができないから。

魚を釣り上げても一緒に喜んでくれる人がいないから。

教会の日曜学校で、エリックサとティオという友達ができたけど、エリックサは食堂の手伝い、ティオは農場の手伝いといった仕事があるから家に泊まりに来るなんて滅多にない。

そりや、父さんもあたしが寂しい思いをしないように、出かける時はエドガーおじさんとステラおばさんにあたしを預けて行くんだけじさ。

あたしはずっと妹か弟が欲しいと願っていた。

でも、それは無理なことだとあたしは諦めかけていた。

だって、父さん一人じゃ子供は作れないし、再婚でもすればいいんだろ？けど……父さんは今でも母さんのことをとても大切にしているから……。

そんな時、神様はあたしの願いを叶えてくれた。

ヨシコアと言つて、弟、を父さんの前に遣わしたのだ。

どうこの理由で父さんの田の前に現れたかどうかは知らない。

そんのはどうでもよかつた、ただ新しい家族ができた事にあたしは喜んだ。

出会つたばかりのヨシコアは綺麗な琥珀色の田をしていたけど、それはとても暗くて、冷たい印象を受けた。

今、あたしの田の前に居るアスカも、綺麗な蒼色の瞳を持っているけど、その輝きが少しくすんでいるように見える。

この子も、昔のヨシコアみたいに心を開けないんでいるんだ……。

あたしは、父さんとあたしと一緒に生活しているうちにだんだんとヨシコアの田が優しくなってきたことを覚えてくる。

きっとアスカもいつか心を開いてくれるって信じている。

自分の髪と似たような紅茶色の髪をした女の子。

父さんはアスカをあたしの妹のようだと言つていた。

うん、あたしもアスカとシンジが本当の家族になれるよう頑張る。

だってその方が賑やかで楽しいじゃない！

「お姉さんの言つ事が聞けないの！」

あたしは大声でそう言つて虫取り網を握る手に力を込めた。

……つたぐ、今日はやけにしつこいわね！

いつもなら、ijiでカシウスさんやヨシュアが止めに入るのに、その気配がまったく無い。

アタシとエスティルの攻防が続いてもう何十分も経つ。

仕方無い、適当に付き合つてさつわと追い払おう。

「……わかつたわよー。」

アタシがそう言つて虫取り網を受け取ると、エスティルはやつと腕の力を緩めた。

あ痛たたたた……。

危うく肩が外れそうになつたわよ。

「ヒア、ウイー、ゴー」

エステルは笑顔でそう言つと、アタシの腕をグイグイと引っ張りながら歩き出した。

アタシは腕が抜けたら本当に困るから、ズルズルと付いて行くしかなかつた。

『ヒーラーズ街道』と書かれた看板を越えて、ドンドンと道を進んでいく。

だんだんと小さくなつて行くカシウスさんの家。

「ちよつと、どこまで行くのよー?」

『ミストヴァルトまで。あそこじや、面白い虫が取れるのよ。『伝説のアノ虫とか』ね』

エステルは振りかえりもせずに、弾んだ声でアタシの質問に答えた。

「……魔獸が出て危険なんじゃないのー? 伝説の虫なんてどうでもいい、アタシ帰る!」

「へーきだつて、魔獸はあたしが倒すから」

アタシはエステルの手を振りほどいて帰るつと思つたけど、もし一人で居る所を魔獸に襲われたりしたら、と思つとぞつとする。

内臓を魔獸たちに食べられながら絶命して行くなんてイヤすぎる。

そして、ついにアタシたちはミストヴァルトの森にまでたどり着いてしまった。

鬱蒼とした森の影には多数の魔獣が潜んでいるような、そんな気がしてアタシは身震いがした。

森の中を流れる空氣もヒンヤリと冷たい。

「セーあ、今日はこっぽい面白い虫を取るぞー！」

張り切るエステルとは対照的に、アタシは茂みが揺れる音が聞こえるたびにビクビクしていた。

ミストヴァルトの森を散策することしばらくして、エステルは虫取り網を構え始めた。

木に止まっている大きなセミみたいな昆虫を標的に定めたみたいだ。アタシはさつきから自分達の近くでざわめく茂みの物音が気になっていた。

誰か……アタシたちを付けてきている？

そんなことをアタシが考えていると、エステルの大声が辺りに響く。

「ああっ、手元が狂っちゃった！？」

エステルの伸ばした虫取り網はセミの止まっている幹をすり抜けて、枝にぶら下がっている昆虫の巣 多分、蜂の巣を叩き落とした。

ブー——ン。

無数の昆虫たちの羽音が静かな森の中に木靈する。

怒った様子で蛾のような虫型の魔獸の群れがこちらに向かってくるのが見えた。

「逃げよ!」

アタシはエステルに腕を引っ張られて、ミストヴァルトの森の中を駆け抜ける。

森を出て街道にまでやつて来ても、蛾のような群れはアタシたちを追いかけてきた。

「息を吸って!」

エステルはそう叫ぶと、目の前を流れていた川に勢い良く飛び込んで、アタシを引っ張りこんだ。

水の中にもぐつて息を止めていると、盛大な羽音がアタシ達の頭の上を通り過ぎて行くのが分かった。

「「ブハッ」」

もう安全だと判断したアタシとエステルは川の水面から顔を出す。

「アハハ、アスカは変な髪型で」

エステルは髪留めでしつかりツインテールを固定していたけど、すっかりヘッドセット・インターフェイスを外していたアタシはモップのようなグシャグシャな髪型になっていた。

それを見たエステルは大笑いをしている。

「うつさいわね！」

アタシは大笑いするエステルの頭をつかんで、水面の中に叩き込む。ガボガボともがくエステルをしばらく抑え込んだ後、アタシは腕の力を緩めてエステルを解放した。

そして、水面から顔を上げたエステルの顔を見て、アタシは爆笑してしまった。

「アハハハハハハ……！」

「な、何よつ！」

アタシはこむら返りを起こしそうになる腹筋を押さえながら、エステルに今見た状況を説明する。

「だつて、アンタの鼻から、ドジョウが……しかも、左右同時に二匹もよ……これが笑わずに……いられるもんですか！」

こんなにアタシが笑つたのは久しぶり。

ユニゾンの時、シンジをからかつて大爆笑した時以来かな。

そうか、アタシ、まだ笑えるんだ……。

「」はエステルによると、魚がたくさんとれる釣りスポットだという事。

だからって、鼻からデジコウは無いんじゃない？

アタシたちが適当に魚を釣り上げて家に帰ると、カシウスちゃんとショアとシンジの男性陣は疲れた様子でへたり込んでいた。

「うや、エステルを心配して影でこいつそり魔獣とかを退治していくみたい！」

「」なんにエショアに思われているなんて、良い彼氏じゃないの？」

「ん~？ エショアはあたしの弟で、彼氏じゃないよ？」

「いつ、なんて鈍いやつなのかしづら、そんな理由で問題しているわけ無いじゃない……。

はつー？

アタシはついシンジの方を見て赤くなってしまった。

やつねえば、アタシもシンジと同居を続けていたんだつけ。

シンク口率を抜かされて、アタシの最もイヤなライバルともいえる存在なのに……。

アタシはアイツから離れる事ができなかつた……。

と、とりあえずその事は置いておいて、問題はエステル（どんかん）の事よ！

スペツツにスニーカーなんて全然色氣が無い格好をしているじゃない。

男のヨシュアの方がなんか色氣を感じるわ。

明日からアタシが女の子の魅力つてものをたっぷりアンタに教えてあげるから、覚悟しなさい！

アタシはエヴァに乗ること以外にも、生きてやりたいことが見つかった気がした。

外伝|話 始まりはメイプルクッキー、そしてソーフレッシュショパイへと続く道

「ロレンスト市 リノン総合商店」

ロレンスト市の南側の入口からすぐ入ったところの左手に、リノン総合商店といつての街で唯一の雑貨屋がある。

その名の通り、アクセサリ、小物類の雑貨はもちろん、ストレガース製のスニーカー、チエロ、レモン色のワンピース、薬や食料まで置いてあるシンジ達の世界では「パンピー」のようなものだった。

そここの店主の青年リノンは、カウンターに座りながら帳簿とにらめっこをしびらしくした後、困惑と苦笑が入り混じった様子で溜息をついた。

「全く、嵐のような騒ぎだったな

リノンがブツブツそう呟いていると、ワンピースに真っ白なエプロンを身に纏った女性、キティが二口一口と微笑みながら姿を現した。

「エステルちゃんとアスカちゃんを見送つてきました。……二人とも凄い張り切りようでした。ヨシュア君とシンジ君を驚かせてあげるつて」

「新鮮ミルク、挽きたて小麦粉、メイプルシュガーロウセット。こんなに卖れたのは初めてだよ

「スニーカーを買つつもりで来たらしいですね。……でも、リノンさんのクッキーを食べたら気が変わったって。そんなにおいしかつ

たんですか？」

キティの言葉にリノンは力の抜けた笑顔を浮かべる。

「ああ、メイプルクッキーには自信があるんだ。……」「めんよ、キティさんの分は今日はもう無理みたいだ」

それに対し、キティは可愛らしく笑みを浮かべて答える。

「別に構いませんよ。アスカちゃんは私の恩人なんですから、……」

「恩人って？」

キティは顔を赤らめてリノンを見つめる。

「だつて私をこんな素敵な……」

窓から小鳥のさえずりが聞こえる。

一人の間に訪れる沈黙。

「……こんな素敵なお店と巡り合わせてくれたなんですから

リノンは目を輝かせて言ったキティに少しがっかりしたような笑みを浮かべた。

キティはロレントから少し離れた、王都グランセルのエーテル百貨店で働いていた。

しかし、ある日アスカがリノンの店にやつて来て、美味しい紅茶が

無こと不満を言いだしたのだ。

チヨロが欲しい、ブランド物の服が欲しい、上品な紅茶が飲みたい！

それはこの田舎都市とも言われるロメントの雑貨屋では無理な話だつた。

今までのんびりと店をやつていければいいと構えていたリノンだが、アスカの要求には困り果てて、ヒーデル百貨店に相談の手紙を出した。

セレジ、派遣されてやつてきたのが、紅茶販売係をやつていたキティ。

今まで恋愛に興味が無く過るところをリノンの胸をかき鳴らす存在だ。

「実は、この前ヒーデル百貨店に退職願を送ったんです」

舌を出して微笑むキティにリノンはとも驚く。

「ええー？ それじゃあこのバイトも辞めるつてこいつのかい？」

「いえ、じつうで働いていたんですね」

「セ、それって……」

リノンが震える声でセツヒツと、キティは鈴のような軽やかな声で答える。

「ずっと、側に置いてくださいますか？」

リノンは唾を飲み込みながら頷いた。

彼の母親のブルームが嫁探しの旅に王国中を回る事も無さそうだ。

〈ブライト家 台所〉

「さあ、行くわよっ！」

「ドキドキするねっ」

ブライト家の台所ではウワサに上がった少女、アスカとエステルがメイプルクッキーの材料を揃えていよいよ調理にかかるうとしていた。

シンジとヨシュアの二人は、遊撃士協会の仕事の依頼でミストヴァルトの森へ行っている。

アスカが受付のアイナに頼み込んで苦肉の策として出してもらった依頼だ。

「エステル、足を引つ張らないでよー。」

「やだなあ、アスカも似たようなものじゃない」

エステルはこの前よつやくオムライスを普通に作れた程度の腕前。

アスカは料理はずつとシンジに任せっぱなしで、こちらの世界に飛ばされてからやっと料理を始めた始末。

一緒に調理をするエステルの底抜けに明るすぎる笑顔を見て溜息をついた。

縞模様の怪しい使徒の影にエヴァーと飲み込まれてこの中世を感じさせる世界に来てから数カ月。

アスカはいろいろ世話になつたお礼をシンジとヨシュア、カシウスにするつもりでリノン総合商店に足を踏み入れた。

そこで、リノンは休憩しようと思っていたのか、テーブルには美味しそうな匂いを漂わせるクッキーと湯気を上げる紅茶の入ったカップが置かれていた。

皿ざとくクッキーを見つけたエステルはまるで自分のことのよう皿リノンのクッキーを舐める。

「リノンさんのクッキーはね、とてもおいしいんだよー。」

無邪気な笑顔で誓めるエステルに、リノンは苦笑しながら、"ちよつと" 摘むように勧めた。

だが、リノンはエステルの食欲旺盛さを失念してしまっていた。

アスカが止めてもパクパクとエステルは食べ続け、皿に盛られたクッキーはあつという間に空っぽになってしまった。

キディが仕方無いな、と言う感じで微笑みながら溜息を付くのを見

て、アスカはこのクッキーが誰のために用意されたものであるか察して、エステルの背中をにらんだ。

しかし、クッキーがとてもおいしかったのも事実。

そこでアスカは「一石二鳥の策を思いついた。

「ねえ、リノンさん。この美味しいクッキーの作り方、教えてくれない？ 上手くできたらお返しするから」

アスカにせがまれたリノンはカウンターをキティに任せて一人のためにはメイプルクッキーの作り方を教える事にした。

台所から店内にあふれ出してくる香ばしい匂い。

それをまた間の悪い事にスクープに鼻が利く、街の小さな”記者”クルーセに嗅ぎつけられてしまつたのだ。

「みんなー、リノンさんの店でクッキーの焼き方教室をやつてるよー！」

街中でそのスクープを報じて回つたものだから、興味のある女性がわらわらと集まってきた。

街に居るエリックサやステラ、アイナはもちろん、普段は街から外れたパーゼル農園に居るティオまでやってきた。

退屈にひけなくなつたリノンは講師としてクッキーの作り方を説明し、アスカはその内容をメモに取つていた。

「今日はホワイトデーと言つて、クッキーを焼いて日向の感謝の気持ちを伝える日なのよ」

アスカの言葉にその日のリノンの店では新鮮ミルク、挽きたて小麦粉、メイプルシュガーが売れに売れた。

そして今こうしてアスカとエステルは台所に立つてるのである。

現在の個数……新鮮ミルク99個、挽きたて小麦粉99個、メイプルシュガー99個

「あー、焦げちゃった！」

「火加減が難しいわね」

現在の個数……新鮮ミルク98個、挽きたて小麦粉98個、メイプルシュガー98個

「エステルっ！ トレイを乱暴に取り出すから、ボロボロになっちゃつたじゃないの！」

「ごめん」

現在の個数……新鮮ミルク97個、挽きたて小麦粉97個、メイプルシュガー97個

「なんかおいしくないねー。もつとメイプルシュガーを多く入れてみようか」

現在の個数……新鮮ミルク96個、挽きたて小麦粉96個、メイプ

ルシュガー 95個

「甘すぞ……今度はミルクを多めに」……」

現在の個数……新鮮ミルク94個、挽きたて小麦粉95個、メイプルシュガー94個

「なんか、びちゃびちゃしてるとー」

△ミストヴァルトの森△

アスカとエステルが台所でクッキー作りに挑戦している頃、シンジとヨシュアは遊撃士協会の緊急の依頼で深い森の中を探索していた。

受付のアイナの説明によると、街の教会の「バイン教区長」が薬の調合に必要な「ピンク色のベアズクロー」という草を必要としているらしい。

そして、その草は女性が近づくと枯れてしまうという性質を持つているので、アスカとエステルは同行できないという話だった。

シンジはちょっと違和感を感じる依頼内容に首をかしげながらヨシュアと共に森へと向かっていた。

「これは……白いベアズクローだね。朝から探しているのに、なかなか見つからないな」

シンジは自生していたベアズクローを傷つけないように確認すると

溜息をもらした。

現在の個数……新鮮ミルク80個、挽きたて小麦粉78個、メイプルシューガー77個

「もつと奥の方に行かないと見つからないかもしねないね。湿氣を好むって言つし」

ヨシコアはそう告げると歩きこくい道を奥へと進んで行く……。

シンジは慌てて後へと付いて行く。

そしてしばらくシンジとヨシコアは森の中を再び探索したが、目的のものはなかなか見つからない。

「はあつ、はあつ……」

「ここいら辺で休憩にしようか」

魔獣との戦いもあって相当疲れたのか、息の切れたシンジを見て、ヨシコアは広場になつたところで休む事を提案した。

現在の個数……新鮮ミルク60個、挽きたて小麦粉60個、メイプルシューガー60個

「やっぱり君達はアーツを使つた戦いの方が向いてるね

「じめん、全然体力が無くて。これじゃあ足手まといだよね」

「……今はそうちもしないけど、努力すれば平氣だよ」

ヨシュアがさうと云つたのでシンジは苦笑しながら言い返す。

「普通、そんな事は無いって否定するものじゃない？ 結構キツイこと云つんだね君は」

「はは、それはきっと僕がシンジに対して遠慮が無くなってきたからだよ。本当の意味で家族になれて来たってこと」

「そう言わると嬉しいな」

休憩の間、シンジとヨシュアはお互いの事を話ながら過ごした。

現在の個数……新鮮ミルク40個、挽きたて小麦粉40個、メイプルシュガー40個

シンジとヨシュアは探索の末、ついに森の奥のセルベの大木の近くに生えていたピンク色のベアズクローを見つけた。

「やつと、見つかったね。赤と白のベアズクローばかりで焦ったよ

「そうだね、空が完全に茜色に染まつたら分からなくなるところだつたよ」

見れば時刻は夕方に差し掛かっている様子だった。

一人は急いで森を出て、デバイン教区長が待つてているという街の入口に向かうためエリーズ街道を北上する。

現在の個数……新鮮ミルク23個、挽きたて小麦粉25個、メイプ

ルシュガー 20個

「確かに受け取りましたよ。ありがとうございましたシンジ君、ヨシュア君」

デバイン教区長にピンク色のベアズクローを渡したシンジはホッと胸をなでおろした。

「難しい依頼だつたけど、達成できて良かったね……ヨシュア？」

ヨシュアは何がおかしくてたまらないのか、必死に笑顔をこらえていよいよシンジには見えた。

「いや……教区長さんここまで嘘を付かせるなんてさ」

「嘘？」

喋りすぎてしまつたと後悔したのかヨシュアは口をつぐむ。

現在の個数……新鮮ミルク9個、挽きたて小麦粉10個、メイプルシユガード8個

「今頃、アスカ達は家で夕食でも作っているのかな？」

すっかり茜色に染まりきつた空に浮かぶいわし雲を見つめながらそう呟くと、ヨシュアは真剣な顔になつてシンジに向かつて話しかける。

「なんか、急いで帰らないといけない気がするんだ」

「…………僕もそんな気がするよ」

ヨシュアとシンジはそう言って顔を見合させて頷くと、疲れ果てた体に鞭を打つて急いで街の郊外に立つブライト家へと急いで帰るのだった。

家が見える場所までたどり着くと、煙突から煙が上がっているのが見える、周囲に香ばしい匂いと少し焦げくさい匂いが漂っている。

玄関のドアを開けると、アスカが驚いた顔をして叫ぶ。

「うづつ、もうシンジ達、帰つて来ちゃつたの！？」

「……どうしたのアスカ、そんなに驚いて。夕食を作つていたんじやなかつたの？」

わけが分からぬ様子で呆然と見つめるシンジに、ヨシュアは極めて冷静に声をかける。

「どうやら、夕食を作つていたわけじゃないみたいだよ」

「えへへ、アスカがね、シンジにクッキーを作つてあげるつて張り切つてたんだよ」

台所の様子を見て、シンジも納得した様子でアスカに話しかける。

「アスカ、そうなの？」

「バ、バカっ！ シンジはおまけよー カシウスさんやヨシュアのついで」

「えー？ だつてさつきからずつとシンジの名前しか言つて無いよ？ 父さんやヨシュアの名前なんて一言も！」

シンジの言葉を否定したアスカだが、エステルの暴露によって顔を真っ赤にする。

「ええ、そうよー。アンタには世話になつたから礼の一つでもしないとアタシのプライドが許さないからね！ ……でも」

アスカは開き直つて言い返したが、最後には下に向けて声を落とした。

現在の個数……新鮮ミルク1個、挽きたて小麦粉1個、メイプルシユガー1個

「なるほど、もう失敗できないね。……任せて」

ヨシュアは慣れているのか手際良くメイプルクッキーを焼いた。

そして一枚のクッキーを4つに割つて口に入れると

「すうじー、ヨシュア、リノンさんが作つたみたいにおいしい」

「何で、比率が変わらないのにこんな美味しい able のよ」

質問するアスカに、ヨシュアは少しからかうよつて答える。

「料理の年季の差だと思つよ」

「なんですかーーー！」

シンジはヨシュアがアスカに向かつてそんな冗談を言えるようになつた事に驚き、そして笑みを浮かべてアスカを宥める。

「……ところども、夕食はどうするの？」

「……あ」

……その日の夕食はロレントの街のアーベントでの外食になつた。

＜王都グランセル 西区画 コーヒーハウス《パラル》＞

それから数カ月後、リベル王国各地を旅したシンジとアスカ、ヨシュアとエステルの四人は女王誕生祭で賑わう王都の一角に居た。

「えーと、リフレッシュパイの一人前は挽きたて小麦粉5、メイプルシユガー1、完熟リンゴ1、アゼリアの実1、泥付きニンジン1、ロイヤルリーフ1、フレッシュハーブ1つてところね」

そう呟きながら材料を用意して調理していくアスカの姿を見て、店の主人の老人は感心した声をあげる。

「ほう、お嬢ちゃん手際が良いな」

「アスカ、手伝わなくていい？」

シンジの言葉にアスカはウインクを返す。

「大丈夫、シンジ達はゆっくり座つて待つてよ」

ここは濃くて渋い「コーヒー」と、香辛料の効いたスパイシーなカレーを出す専門店だったのだが、祭りで盛り上がる王都に初めて来る観光客も多く、甘いものを食べたいといつお客も来ていた。

しかし、店主の老人は甘いものを作るのが苦手だった。

そこでおせっかいなアスカが店主の老人の代わりにリフレッシュパイを焼くことになったのだ。

「でも、アスカがこんなに料理が上手くなるなんて思わなかつたよ」
エステルが感心した様子で言つと、シンジはクスリと微笑む。

「アスカは傷つけられたプライドを10倍にして返すつて言つてたからね。ヨシュアに言われた事が堪えたんじやないかな」

「僕は、それ以外にも原因があると思つけど……」

ヨシュアがからかうようにシンジの皿を見つめると、シンジは照れ臭そうに嬉しそうに笑つた。

「できたわよ、みなさん、お待たせー」

アスカがそう言つて老人と共に店内の客にパイを配つて行く。

甘いものに目が無い女性客はもちろん、普段カレー目当てで来ている男性の常連客も感心している様子。

アスカもシンジの隣に腰を下ろす。

「どう、シンジ？」

「うん、美味しいよ、適度に甘くて」

アスカに差し出されたパイを口に入れたシンジは笑顔で答える。

エスターとヨシュアも、店内の客も、この若いカップルの姿を微笑ましく見守っていたのだが……。

「あ、シンジ。唇にリンゴがついてる」

そう言つてアスカは素早くシンジにキスをするようにシンジの唇についたかすかなパイ生地とリンゴの塊を舐め取る。

「うん、甘くておいしい」

その様子を目撃した店内の客達は胸を押さえて苦しみ出す。

「甘い……甘すぎるぜ、このパイは……」

「甘過ぎるよ……！」

「おかしいわね、リンゴが甘すぎたりしたのかしい」

そんな客の様子に首をかしげながら自分の作ったパイを頬張るアスカ。

女王生誕祭の間、この店は世界一甘いパイを出す店として噂になつ

た
。
。

外伝三話 アルバ教授の計算違い

『グランセル城 空中庭園』

あれ？ なんであたしここにいるんだろう？
あたしは気がつくと、夜の公園のような場所に立っていた。
ハーモニカの音が聞こえる。あれはヨシュアが吹いている音だ。
あたしはハーモニカの音が聞こえる方へ、ヨシュアの元に早足で歩いて行つた。

「やあ、エステル。良い夜だね」

柵に腰かけていたヨシュアは、あたしに気がつくと、微笑んでそう言つた。

「また、あの曲を吹いていたんだ」「うん、吹き收めにと思つてね」

ヨシュアは笑顔だけど……なんか悲しそう。なんでそんな悲しそうな顔で笑うの？

ヨシュアはあたしに背を向けて、唐突になんとか聞き取れる弱い声で話し始めた。

「昔、あるところに男の子が居ました。その男の子はショックで心が壊れてしましました。ある時、とある魔法使いがその男の子の心を好きなように組みたてました。でも、その男の子が偽りの心を手に入れたとき、男の子は人殺しになつて居ました」

な、何を言い出すのヨシュア……。

あたしが黙つて聞いていると、ヨシュアは淡々と話を続ける。

「ある日、男の子はとある遊撃士の暗殺に失敗しました。そして、その男の子はその人の家に連れてこられて、ひとりの女の子と出会いました……。その後、五年もの間男の子は幸福な夢を見続けました。でも、夢はいつか覚めるものです。現実に戻る時が迫っていました」

ヨシュアはそこまで話してあたしの方に振り向いた。

「でも、その男の子は人の血で汚れている……側に居ても女の子を不幸にするだけ。だから……男の子は旅立つ事にした」

「……いいかげんにしなさいよ。夢なんて言わないでよー。」

あたしはヨシュアに向かつて腕をなぎ払うように振りながら詰め寄つた。

「あたしを見てよ、あたしの田を見てよ！ あたしはずつと……その男の子の事を見てきたわ！ 男の子が何かに苦しみながらも、頑張つている事を知つていて。あたしはそんなヨシュアが好きになつたんだからっ！」

言つてしまつた。告白してしまつた。

「あたしの気持ちを置き去りにして行くなんて許さないからね！」

あたしが怒鳴るとヨシュアは驚いた顔をして、そしてあたしの肩を掴んで顔を引き寄せた。

「えつ……？」

ヨシュアの脣とあたしの脣が触れあつてゐる……。

ヨシュアの口からあたしの口に何か冷たいものが流れ込んできた。

「即効性のある睡眠薬だよ。副作用はないから安心して」

ヨシュアは真つ暗な目をしてあたしに話しかける。

「なんで……そんなものを」

あたしの体が崩れ落ちる。

「太陽のように眩しかった君。僕はこんな風に好きな女の子から逃げ出す事しかできないけど……。誰よりも君の事を想つている」

そんな ファーストキスが別れのキスだ、なんて！

「さよなら エステル」

ヨシュアはそう言つてあたしの横を通り過ぎようとした……その時。

「アンタ、バカア！？」

あたしの後ろの方から女の子の声が聞こえる。

これは……あたしの知つている声。

妹のアスカの声だ。

「ヨシュアつてば、最低つ！」

逃げ道を塞がれたヨシュアは身動きが取れずに固まっている。

「エステルもしつかりしなさいよ！ アタシは一人のファーストキスの瞬間も見ているんだからね」

アスカの言葉に、意識がほとんど朦朧とした頭で考えてみる。あたしは、今までヨシュアを異性として意識してなかつたから、キスなんてしたことが無い。

違う！ ヨシュアはあの風車の展望台でキスしてくれた！ そのことに気付いたとき、あたしは薄れゆく意識の中で呟いた。

「ありがと アスカ」

次の瞬間、あたしの意識は完全に闇に閉ざされた。

《ネルフ 三〇三病室》

アタシは気がつくと、浮かんでいる感覚にとらわれた。
目の前に広がるのは、病院のベッド。
ベッドで壊れた目をして眠つてるのは……アタシ？
病室のドアの入口から誰かが入つてくる。黒髪の男の子……シンジだ。

シンジはベッドに横たわっている、ガリガリに瘦せてしまっているアタシに向かつて話しかけていた。

「アスカ、今日も目を覚まさないんだね」

シンジは全く反応を示さないアタシの手をそっと握る。

「ボクはひとりになってしまったんだ。零号機もなくなっちゃったし、みんな死んじゃつたんだよ」

シンジはアタシの肩を持ちあげた。

「こんなのは、アスカじゃないよ。前みたいに怒ったり笑ったり、よけいなおせっかい焼いたりしてよー!」

シンジはアタシの胸に顔をすり寄せながら、弱々しく呟く。

「ボクが守りたいのは、こんな抜け殻みたいなアスカじゃないんだ

……」

ベッドに横たわったまま、何の反応を示さないアタシの体。そんな光景をアタシの意識は中に浮いたまま、見ているだけしかできなかつた。

ああ……。シンジはひとりで苦しんでいるの!。

シンジを優しく抱きしめてあげられたら。シンジに言葉をかけてあげられたら。

お願い、アタシの体。動いて!

すると、それまで動かなかつたアタシの体が動き始めた。

アタシ、なんでシンジの首を絞めてるの!?

胸にすがりつくシンジを振り払い、馬乗りになつてシンジの首を締め始めるアタシの体。

「アスカ……なんで、ボクの……事……嫌い……なのか」

アタシの体に黒い糸が巻きついているのが見えた。

その糸を使って操つて居るのは、見た事のある顔 アルバ教授だつた。

「ふふ、これで決定的ですね、アスカ君。これでシンジ君は他人が全く信じられなくなる」

アルバ教授はアタシに向かつて勝ち誇ったような笑みを浮かべる。
あいつ、アタシの事が見えてるの？

アタシはただ睨みつける事しかできなかつた。

アルバ教授は首を絞める力を適度に緩めているのか、シンジの意識が途絶えることはない。

でも、シンジの瞳からは徐々に光が失われて行つた。

「アスカ……もう疲れたよ……ボクを殺してよ」

ああ、シンジの心が完全に壊れてしまつ……誰か、アルバ教授を止めて、助けて、誰か！

「諦めなさい。さあ、止めを刺しますよ」

「アタシは最後まで……いえ、最後を迎えても諦めない！」

「よーし！それでこそあたしの妹だ！」

殴られる音と共に、アルバ教授が床に崩れ落ちる。

アタシの体を操つていた黒い糸は、ヨシュアの短剣によつて断ち切られた。

「な、なぜエヌテル君とヨシュア君がここに居るのですか！」

「アスカがあたしに助けを求める声が聞こえたからよ！」

「く、くそつ、この空間を保つ魔力が……」

アルバ教授が憎々しげにそう呟くと、周りの景色が歪み始めた。この夢はアルバ教授によつてつくられた悪夢なのね。まったく酷い手を使うんだから。

ありがとう、助けに来てくれて、エステル……お姉ちゃん。

『ツアイス ツァンラートホテル』

「アスカ……」

「エステル……」

アタシが目を覚ますと、エステルがアタシの頭を撫でていてくれた。エステルの顔には涙の跡が残つてる。

「はは、甘えん坊のアスカを励まさなきゃいけないあたしまで泣いちゃうなんて、どうしたんだろう」

「エステルつて、夢の中まで助けに来るなんて、なんておせつかいなのよ」

「あはははは

「あはははは

アタシたちはお互い顔を見合わせて笑いだした。

落ち着いたアタシは、シンジの事が気になつた。多分アタシたちと同じように懐夢を見たんだろう。

「アタシ、シンジの部屋にいってくる」

「今日だけは一緒に寝てもいいんじゃない？ 父さんもきっと認め
るはずだし」

エステルのからかいの言葉を背にして、アタシはシンジとミショア
が泊まっている向かいの部屋のドアをノックした。

「え、じゃあシンジはあれが夢だつてすぐにわかったの？」

アタシは部屋からシンジを呼び出して、自分の部屋に連れて行つた。
「だつて、アスカがボクの事を突然嫌いになるなんて信じられなか
つたから」

シンジがキッパリと言つものだから、アタシは照れ臭くなつてぶつ
きりぱりこ言い返した。

「た、大した自信家ね」

「今までのボクなら、アスカは加持さんが好きだつて誤解してたけ
ど、もうボクと婚約までしちゃつたんだからさ」

シンジ。何また自爆してるのよ。

エステルにも黙つてたのに。

あ、エステルとヨシュアがいつの間にか仲良く一人でアタシたちを見
てる。

あれはからかいの眼差しね。

アタシはシンジの頭を胸に抱き寄せた。

「ア、アスカ苦しいよ」

「つるさいわよ。あの夢を見たら、孤独に震えるシンジを抱きしめ

たくなつたのよ……本当はいひして欲しいんでしょ」

アタシがそう言ひ、シンジの抵抗がピッタリと止んだ。

「ア、アスカ、それ以上はダメだからね！」

エステルが顔を真っ赤にして叫んでた。

『結社のアジト』

「ぐぬぬぬ、また私の計画が失敗したというのですか！」

戻ってきたアルバ教授は憎々しげにそう呴いた。

「ふふ、教授は男女の恋愛に疎いんだから。あの子たちができる事に気づかずにこんな計画を立てるなんて」

ルシオラはそう言ってアルバ教授を嘲笑した。

外伝四話 王女救出作戦

『王都グラントセル 遊撃士協会』

アスカ達がグラントセル王城のデュナン公爵の夕食会に出発した後、あたし達は遊撃士協会の一階で作戦の細かな確認を行つていた。

「エステルさんとヨシュアさんまでこちらに駆り出して申し訳ありませんでした。何しろこちらも人數的にギリギリですからね」「いえ、別にそんなこと」

エルナンさんに謝られると逆に恐縮してしまつわね。

「それでは、エルベ離宮攻略作戦のチーム分けをお話します。チームはまず遠くで騒ぎを起こして敵を引きつける陽動、それを迎え撃つ要撃、さらに近くで騒ぎを起こして敵を混乱させるかく乱、人質を救出する突入の四チームに分けて行います」

エルナンさんがそう言つと、みんな騒ぎ始めた。

「八人で四チームに別れると言つ事は、一チームが一人か二人になると言う事ですか?」

ヨシュアがそう言つと、エルナンさんは静かに首を振つた。

「いえ、一チーム四人で行動して頂きます
「えつ、計算が合わないんですけど……」

あたしがそう言つと、一階から人が昇つてくる気配がした。

「どうやら間に合つたようですね」

「……あー。」

姿を現したのは闘技大会で戦つたカプア一家の三人とレイヴンの三人だつた。

「ボクつ娘が何でここに?」

「いいかげん、名前で呼べよ、怪力女!」

ミシコアにちよつかいを出したジョゼットを見ると、つこ悪態をとつてしまつたよね。

揃つたあたし達に向かつてエルナンさんは命令をかける。

「陽動部隊はジョセットさん、キールさん、ドルンさん、オリビエさんにお願いします。」

「ふつ、心得た」

「まつ、軍から皿を付けられている俺達が適任だな」

エルナンさんの指示にオリビエとキールさんはつづく。

「要撃部隊はカルナさん、グラッセさん、アネラスさん、クルツさん」

「はい」

「気合入れて行くよ!」

「かく乱部隊はアガシトさん、トインさん、ロッシュさん、レイスさん」

「おうー。」

「ああーつ、やつぱつ……」

つて事は突入部隊は……。

「突入部隊はエステルさん、ヨシュアさん、シェラガートさん、ティータさんにお願いします」

「うはあ、責任重大じゃない……大丈夫かな」

あたしがそう言つて弱音を吐くと、ヨシュアが笑つて答える。

「心配するなんてエステルらしくないよ」

「……何よそれ、あたしがいつも能天氣みたいじゃない」

あたしがムッとした顔で反論すると、ヨシュアは謝った。

「『めん』めん、エステルが苦しい時も無理して元気を出しているのは知つているよ。だから僕はエステルのその笑顔を曇らせないようにしたいんだ。僕の元気の源だから」

ヨシュアの言葉を聞いてあたしは顔がかつと赤くなるのを感じた。悔しいのであたしもヨシュアに言い返した。

「じゃあ、あたしからも一言いい？」

「なに？」

「ヨシュアも自分一人で何でも抱え込まないで、正直に話して欲しいの。ヨシュアがいくら強がつたって、あたしにはお見通しなんだから！」

「えつ……？」

あたしがそう言つと、ヨシュアはポカンと驚いた顔になる。

「そりそり、私達がついているんだから」

ショラ姉も加わってそう励ますと、ヨシコアは嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとう」

「士気は十分に高まつたようですね。それでは作戦開始と参りましょ。それではエステルさん、号令を」

「え、あたし！？」

突然、エルナンさんに指名されたあたしは驚いてしまつた。

「この言つ事はエステルさんが相応しいと思いまして。お願ひでありますか」

あたしはうなづくと、集まつたみんなに向かつて号令をかけた。

「それではこれより、エルベ離宮に捕らわれた人質解放作戦を決行する！」

「おーっ！」

あたしの号令に答えるみんなの声が部屋の中でおだました。
頑張ろうね、ヨシコア。

《王都グランセル郊外 エルベ離宮前》

僕達はエルベ離宮の入口が見えるところで、他の部隊が動くのを待つていた。

しばらくすると、特務兵達が騒がしそうになつた。

いよいよ、ドルンさん達カプア一家とオリビエさんの陽動部隊が行

動を起こしたんだろう。

「大変です、東の湖の警備艇が空賊に襲われています！」

「中にはリュートをかき鳴らす変な男も混じっているとか……」

「面白い、私も行くとしよう」

特務兵の報告を聞いて、結社の幹部らしい男もエルベ離宮の中から姿を現して、陽動部隊が居る方へと向かつて行つた。
確かに、ブルブランと言う名前だったと思つ。

ジェニース学園の旧校舎で会つたような気がするけど、あの時はエヌテルとキスした事で頭がいっぱいだつた。

エルベ離宮から特務兵達がぞろぞろと出て行つたけど、きっと要撃部隊のみんなが倒してくれるだろう。

でも、エルベ離宮にはまだそこそこの人数が警備についている。
次はアガットさんとレイヴン三人のかく乱部隊の出番だ。

「お前達、こんな所で何をしていいー！」

正門の前で座り込んでいるアガットさん達に特務兵が声をかけると四人ともケラケラと声を上げて笑い出した。

「(汗)で何をしようと俺達の勝手じゃーん」

「そそ、あんた達に答える義務何か無いもんね」

「邪魔だからあつち行けよー」

「痛い目に遭いたくなかったらひとつと消えろ」

レイヴンの三人はいつものように、元レイヴンのアガットさんも演技が板についているような感じだった。

「何だとー！」

特務兵は怒り出して四人を追いかけ回し始めた。

「エルベ離宮は女王様の意向で一般市民に開放されているって話だろ?」

そう言うアガットに続いてレイヴン達も一緒にエルベ離宮の正門から玄関前の庭園に侵入した。

「侵入者だ、直ちに排除しろ!」

エルベ離宮の本館からも特務兵達が飛び出してきて、玄関前の庭園は混乱のるつぼと化した。

「アガットさん達に注意がいつている今が突入のタイミングだね」「わかったわ!」

僕はエスティル達に声をかけると、隠れていた茂みから姿を現してエルベ離宮の正門に向かつて駆けだして行つた。

後ろから、ティータを気遣いながらエスティルやシェラさん達も続いて来る。

玄関前の庭園に居る特務兵達はアガットさん達に気を取られていたようで妨害は無かつた。

そして、僕達は玄関からエルベ離宮の本館に入る事に成功した。

「まず、人質がどこにいるか確かめないと……」

「そうね」

僕の提案にみんな賛成して、手前の部屋から確認していく事にした。廊下や小部屋で特務兵の小隊と何度も出くわしたけど、上手く気絶

させることができた。

そして僕達は離宮の一角にある談話室へと踏み込んだ。

「何だあ、お前達は？」

「遊撃士協会の者です。お聞きしたい事があります」

僕はそう言つてエスティル達と一緒にすでに酔っぱらつていた特務兵の男を縛り上げた。

「わ、私は仲間ではありません！」

カウンターでお酒を出していた男の人が慌てて両手を上げる。

「わかっているわよ。この離宮で元々働いていた人でしょう？」

ショラさんがそう言つと、その男の人はホッとしたように腕を降ろした。

「……私は執事のレイモンドと言います。姫様が来た事に浮かれて、特務兵達が姫様を監禁している事に気がついた時には私も人質にされてしまいました」

そしてレイモンドさんは頭を抱えて溜息を吐いた。

「私は特務兵達の目を盗んで友達の記者に連絡したのですが、彼も捕まつてしまつて……」

僕はもしかしてと思つて、レイモンドさんに聞いた。

「その記者さんの名前はもしかしてナイアルって言つんじやないで

すか？」

「ああ、よく分かつたね。後輩の子がエルベ離宮に行つたきり帰つて来ないつて心配してたから」

レイモンドさんの言葉を聞いて僕とエステルは顔を見合せた。

「慎重なナイアルさんが捕まっちゃつたのって……」

「ドロシーさんが居たから、放つて置けなかつたんだね」

そう呟くと、エステルは僕の目をじっと見つめて来た。

「エステル？」

「ヨシュア……」

僕は悲しげな目をしたエステルが何を訴えているのか分かつた気がした。

でも、それは僕の錯覚だつたんだ。

「ヨシュアが結社にさらわれたりしてもあたしが助けにいくからね！」

僕は笑顔でそう言つたエステルに思わず力が抜けてしまった。

「立場が逆じやないの？ あんたらしいわ」

「エステルお姉ちゃん……」

「はは、ありがとう」

ショラさんとティータもあきれている前で僕は何とか作り笑いを浮かべてエステルに答えた。

「さてと、それじゃあ取り調べを始めましょつか」

ショラさんはさつ言ひと、ムチを縛られている特務兵の男に向かって構えた。

「い、一体何をするつもりだ！」

「ちょっと聞きたい事があるだけよ。素直に話せば痛い目にはあわないわよ」

すっかりノリノリになつてゐるショラさんを見て、僕達はお互いに顔を合わせてささやき合つた。

「ショラ姉、絶対楽しんでいるわよね？」

「うん、久しぶりの獲物に生き生きしている感じだね

「ちょっと怖いです……」

僕達がボソボソ話していく間にショラさんのムチの音と特務兵の男の悲鳴が何回か室内に響き渡つた。

レイモンドさんとティータはすっかりおびえてしまつていて

「ふう、この男から引き出せる情報はこのぐらいね」

ショラさんがそう言つて打つたムチを食らつた特務兵の男は氣絶してしまつた。

ショラさんが取り調べによつて得た情報によると、王女を含めた人質のみんなはエルベ離宮の本館の奥にある紋章の間に捕らえられていると言う事だつた。

しかし、部屋の鍵は外に出て行つてしまつた結社の幹部ブルーブランが持つてゐると言つた。

僕達は困り果ててしまつたけど、ティータだけは落ち着いていた。

「ジャーン、私が作った万能キーです！」

そう言ってティータが取り出したのは金色に光る金属でできたカギだった。

「ここの先端部分の金属がかぎ穴に合わせて形を変えるんですよ」

「凄いじゃない、ティータ！」

「えへへ」

エスティルに頭をなでられてティータは嬉しそうにしている。問題が無くなつた僕達はエルベ離宮の警備についている特務兵達が混乱している間に急いで紋章の間へと向かった。

『エルベ離宮 紋章の間』

入口を守っていた特務兵達を倒したあたし達が部屋の中に入ると、部屋の中は怪しげな霧で充満していた。

「これは……？」

あたしの呟きに答えるように奥から声が聞こえてきた。

「ふふ、じつして人質を眠らせておけば逃げられる事もないと言つ事よ」

この声は聞き覚えがある。

そしてこの眠気を誘う霧……結社の幹部の一人、ルシオラさんの仕

業だ。

霧の中に居るうちにあたしの頭の中までぼーっとしてきただわ……。

「ええい、ハリケーンメーカー！」

そう叫ぶティータの方に視線を向けると、扇風機のような機械が動き出すのが見えた。

あんな機械がティータのリュックの中に入っていたの？

あたしはぼう然とティータがルシオラさんの霧を吹き飛ばすのを見ていた。

あたし達の周りに満ちていた霧はすっかり晴れて眼氣は吹き飛んで行つた。

「ナイスよ、ティータ！」

「えへへ」

あたしが親指を立ててティータに向かつて笑顔を送ると、ティータも照れ臭そうに笑つた。

「あらあら、みんな私の術で幸せな夢を見ていたのに、覚ましてしまってはかわいそうよ」

そう言って優雅な笑みを浮かべるルシオラさん。

あたしの頭の中に以前にルシオラさんの術にかかつて眠つてしまつた時に出会つた母さんの姿が浮かぶ。

あれはあたしの心の奥底の願い。

でも、あたしは夢の中で母さんと、いえ、もう一人の自分と約束したのよ。

夢の中に逃げ込まないで前を見て進むつて！

「今度こそ僕達と勝負しろ、ルシオラさん！」

怒ったよつよつ叫ぶヨシュアに、ルシオラさんは鼻で笑つたよう
に見えた。

「私の任務は時間稼ぎ。人類補完計画を成功させるためのね
「結社は何を企んでいるんだ！」

ヨシュアがそう言って問い合わせると、ルシオラさんは静かに首を横
に振つた。

「私もくわしくは知らないわ。ただ私はあの人にもう一度会いたい
だけ」
「姉さん、まだ団長の事を……」

ショーラ姉が辛そうな顔でルシオラさんを見つめる。

「……だつて、私自身に幸せな夢を見せる術をかける事は出来ない
もの」
「でも、会えたとしてもそれは姉さんの心の中の団長じゃない」

ルシオラさんの咳きにショーラ姉はあわれんだ様子でため息をついた。

「ふふ、団長の魂はあの時私が奪つたのよ。そして今も私の手元に
……」

うつとりとした田つきで虚空を見つめるルシオラさんにあたしは寒
氣のようなを感じた。

そんなルシオラさんの姿が揺らいで行く。

「また逃げる気ですか！」

ルシオラさんはヨシュアの言葉に何も答へずに煙の呑み口に姿を消してしまった。

「お、俺はどうしてこんな所に……」

「ナイアル先輩…」

人質になっていた人々がうろたえながら目を覚ましたようだつた。あたしは人質にされていたモルガン将軍の孫娘、リアンヌちゃんの事が気になって急いでリアンヌちゃんを捜した。

「あなたが、リアンヌちゃん？」

「うん、そうだよ」

あたしが声をかけた時、リアンヌちゃんは落ち着いていた。特務兵達にさらわれて心細い思いをしていると思ったのに、意外だつた。

「私ね、夢の中でパパとママと一緒に寝たから寂しくなかつたよー」

あたしは喜んだ顔でいつの間にかアンヌちゃんに本当の事を言えなかつた。

「姫様、御無事でなによりです」

あたしがリアンヌちゃんと話している間に、みんなはクローゼの無事を喜んでいた。

クローゼは以前のジョニース王立学園の制服では無くて、落ち着いたドレスを着ている。

まるでお姫様みたい……って本物のお姫様なんだっけ。

「ええと、クローディア王女殿下と呼べばいいのかな？」

そつあたしが質問すると、クローゼは首を横に振った。

「いいえ、以前のよつてクローゼで結構ですよ」

「クローゼもお父さんとお母さんの夢を見たの？」

「ええ、私が1歳の時に事故で亡くなってしまったと聞かされましたけど、写真は残っていましたから……」

クローゼはまやまやして胸に手を当けて目を開じた。

「クローゼ、あの夢は……」

「わかつています。あの夢は私達を甘い世界に閉じ込めるために作られたもの……でも、自分を見つめ直す良い機会になりました」

そつ言つてあたしを見つめるクローゼの瞳は力強かった。

うん、クローゼは自分を見失つていない。

あたしは安心した。

「きゃあああ！」

ティータの悲鳴が上がつた方を振り向くと、そこにはティータに大きな鎌を突き付けたレンが立っていた。

「はわわレンちゃん、何で……？」

おびえた瞳でティータがそう問いかけると、レンは不敵に笑う。

「ティータがレンを置いてどこかに行つちやうから迎えに来たのよ

「レンちゃん、私もエステルお姉ちゃんとヨシュアお兄ちゃんのお

手伝いがしたかったから……」

「やっぱり、ティータもレンの側から居なくなつちやうんだ

そして、レンはもっと大きい声で叫ぶ。

「ヨシュアみたいにレンを置いて行つちやうんだ！」

「えつ？」

「やっぱり、僕は前に君に会つたことがあつたんだね？」

あたしは驚いた声を上げてレンとヨシュアの話を聞くことしかできなかつた。

「ヨシュアは、レンの事をすっかり忘れて、エステルの家のお嬢さんになつちゃつて！」「の浮氣者！」「

「僕が浮氣？」「

「だって、ヨシュアはレンの事、お嫁にもらつてくれるつて約束したのよ！」

「ええつー？」「

「何だと？」

「それは本当ですか？」

「何ですってー？」「

「本当なんですか？」

あたし以外にも驚いた声が部屋の方々から上がつた。

「そんな……僕が結社に居た頃はまだ小さい子供だったし……よく覚えていないよ」

『ヨシュアが戸惑つたよつにそつ答へると、レンは心の底から怒つた
よつな顔になつた。

「裏切り者のヨシュアなんて大嫌い！ エステルと一緒に首をはね
てやるんだからー。」

レンはそつ言つと、ティーエタを強引に連れて部屋の外に出て行つた。

「待つて、レン！」

あたしはヨシュアと一緒に中庭に出ると、レンは大きなロボットの
よつな物の手のひらの上に立つていた。
そのロボットにはぐつたりとしたティーエタが乗せられていた。
陽動や遊撃、かく乱に出ていたみんなも中庭に来ていたみたいだけ
ど、そのロボットに手出しができないようだつた。

「パテル＝マテル、行くわよー。」

レンが命令すると、そのロボットは空高く浮かび上がって、王都の方へと飛び去つてしまつた。

『王都グランセル郊外 キルシェ通り』

僕達はグランセル城に居るシンジ達と合流するため、エステルやクローゼ達と一緒にエルベ離宮からの道のりを走つていた。

「ヨシュア、レンの事を考へていいの？」「うん……」

「レンはさつとヨシコアの言葉を支えにしてきた部分もあつたんだ
うつね」

「僕が結社に居た頃、レンの事はとても小さな女の子だとしか覚えてなかつた」

「その時のヨシコアが10才ぐらいとして、レンは6才ぐらい…
…その頃の子つて、憧れとかでお嫁さんにして欲しいとか言つちゃうんじやないかな？」

「そう言つものなのかな？」

「あたしの友達もそんな感じよ。教会の日曜学校を卒業する年になると、みんな笑い話になつてるけどね」

「エステルもそうだつたの？」

「あたしは初恋を自覚したのは、マノリア村でヨシコアとキスしたときだつたから……」

そう言つて顔を赤くして僕の方をチラリチラリと見るエステルはかわいくて。

「ふふ、お一人が羨ましいです」

「えつと、クローゼはシンジに……」

エステルが困つたような顔でクローゼに言い淀んだ。

「ええ、振られてしましました。シンジさんとアスカさんの間には私がとても割つて入れないような特別な絆があるようですね」

「クローゼはシンジが初恋の相手だつたの？」

「そうではないんですけど……シンジさんの優しさにひかれてしまいました。リシャール大佐から帝国の皇子との縁談を強く勧められて

いて困っていたところでしたから」「

「そつか、クローゼは姫様だもんね」

「お相手の皇子様がお優しい方だつたらいいんですけどね」

クローゼが溜息と同時にそう言った途端、オリビアさんが大きなクシャミをした。

「おい、大事な作戦の最中に恋の話なんてしているんじゃない！」

話し込んでいた僕達は、アガットさんに怒られてしまった。

「そうね、アガットの恋人のティーラがさらわれちゃったんだから、心配よね」

「バカやろう！あのチビは俺の恋人なんかじゃねえ……まあ、妹みたいなものだ」

エステルにからかわれたアガットさんは少し顔を赤くしてそう言った。

「いやはや、こんな時に遊んでいられるなんてまったく頼もしいやつらだぜ」

「そーですね、ナイアル先輩」

エステルのおかげで僕の暗い気持ちはずいぶんと明るくなれたけど、レンは僕に心をまた開いてくれるのだろうか。
それだけが不安だった。

僕達はグランセル市街を駆け抜け、アスカとシンジ達、救出された女王様との合流地点である西区画の大聖堂へと急いだ。

SC 第零話 奇跡の戦士エヴァンゲリオン

- Writer Side -

『第三新東京市』

突如、市街地の中心部に現れた巨大な黒い球体に対し、
ネルフは第十一使徒レリエルと断定し、エヴァ三機による迎撃を決
定した。

作戦部長である葛城ミサトが初号機に遠距離からの攻撃の指示を下
そうとする直前、
アスカの乗る式号機が初号機の前をさえぎり、第十一使徒レリエル
の元に突撃した。

そして、式号機はレリエルの直下に生じた黒い影に沈み込んで行く。
救出しようと駆けつけた、碇シンジが乗る初号機も共に黒い影に飲
み込まれて消えてしまった。

「レイ。後退するわ。」

「待つて！まだ初号機と碇君が！」

「命令よ、下がりなさい。」

葛城ミサトと、零号機バイロット綾波レイの会話が続く中、
レリエルの直下に展開された黒い影から、初号機と式号機が飛び出
し、

黒い影から少し離れた場所の路面に着地した。

エヴァ両機の無事に、発令所は歓喜に包まれたが、次の瞬間、皆が
違和感を感じて首をかしげる。

初号機が銃みたいなものを装備している。式号機は長い棒のような
武器を持っている。

黒い影に飲み込まれるまえには持つていなかつたはずだ。

そして、モニターに映し出された初号機内の映像に発令所は凍りつ

いた。

十六歳に成長したシンジとアスカが一人乗りの操縦席で仲睦まじく座つて居たのだ。

レリエルに飲み込まれる前は十四歳の中学生だった一人が。さらに、式号機にも十六歳の黒髪で琥珀色の瞳を持つ少年と赤い髪とルビー色の瞳をもつ少女が座つていた。

- Asuka Side -

アタシはモニターに映つているネルフの発令所の面々が固まつている姿を見て、失笑を浮かべていた。

隣に座つているシンジも噴き出しそうになつてゐるのをじらえている。

『な、何で初号機にアスカが乗つてるのよ！しかもシンジ君と一緒に！式号機は誰が動かしてるのよ！』

「自分の目で確認して見れば？」

アタシがそう言つと、ミサトは式号機の方に通信を切り替えたみたい。

- Estelle Side -

「どうやら、無事にアスカとシンジが居た世界に来れたみたいね。」「うん、でもこれからが本番だよ。」

式号機の操縦席であたしがヨシュアと話していると、通信モニターに黒い長い髪のおばさん、いやお姉さんの顔が浮かび上がつた。

『あなたたち、なんで式号機を操縦しているの？アスカに関係があるわけ？』

お姉さんはあたしたちを警戒しているのか、睨みつけている。

あたしたちは第一印象が大事だ、と言つ事で、精一杯の笑顔をモニターに向けて、自己紹介をした。

「あたしはアスカのお姉さんのエスティル・ブライトです。よろしく！」

「僕は同じく兄弟のヨシュア・ブライトです。」

『私は葛城ミサト。よろしくねん、じゃなくて！』アスカはひとつ子のはずよー』

「まーまー、あの使徒って奴を倒した後、ゆっくりと説明するからね。」

あたしはそう答えた後、モニターから聞こえる怒号は無視して、アスカたちの乗る初号機を注視していた。

- Shinnji Side -

初号機に乗るボクたちはスピーカー越しに聞こえるミサトさんの戦号機への怒鳴り声を尻目に、

使徒を倒すための行動を開始した。ボクが操縦桿を握り、アスカが魔法の詠唱を始める。

アスカとシンクロしているエヴァ初号機も、魔力の開放を始める。

「ヘルゲート！」

アスカの声と同時に、初号機の前方、レリエルの直下に暗黒の渦が発生する。

暗黒の渦は、レリエルの本体にダメージを与えたようだ。崩壊する虚数空間。

レリエルの影だった黒い球体と一緒に本体である直下の黒い影も跡

形もなく消えた。

-Y o s h a S i d e -

僕は黒い球体と影が消え去るのを見て、使徒が倒された事に安心した。

五感を駆使して、念のため周辺の気配を探つてみる。
うん、使徒の気配はしないようだ。

スピーカー越しに相変わらず混乱した声が聞こえる。

『エ、エヴァが魔法を使うなんて、そんな非科学的な……』

『リ、リツコ！』

『先輩、しつかりしてください！』

どうやら僕たちの事を構つてている暇が今のところないようだ。
でも、エヴァから降りたら簡単に信じてはもらえないだろうナビ、
説明しなければならない。

シンジ君のお父さん。僕たちの世界ではお世話になりました。
今度は僕たちがあなたちの世界を救う番です。

未来のあなた方もそれを望んでいます。

僕は決意を固め、隣に座っているエスティルの手を握りしめた。

SC 第一話 最狂爆弾兵器「A改の恐怖

『初号機 操縦席』

『あなたたちがレリエルを通じて別世界で一年を過ごして戻つて来た、ですって？』

『しかもその世界で未来でサードインパクトを起して時間をさかのぼつた我々と会つたというのかね。』

『確かに、シンジ君とアスカのDNAは一致しているけど……。』

モニターの向こうの発令所は混乱が続いているみたいだ。

『そうだ。父さんから手紙を預かつて来たんだ。』

ボクはしまつっていた紙を取り出した。

『もうお前たちの無駄話に付き合つている暇はない。』

今まで口を開かなかつた父さんがついに喋り出した。

ボクは紙をモニターの前で広げた。

発令所のモニターには、

黙れ！

ゲンドウ

と書かれた紙が映し出されているはずだ。

『わかつた、シンジ。お前の話を信用しよう。』

『碇！』

『司令！』

『問題無い。』

手紙一枚にこんなに効果があるなんて！

隣に座つているアスカは肩を震わせて笑いを堪えてる。

『あははははー！』

式号機に繋がつてゐるモニターの向こうでエスティルが大笑いしてい
る姿が見えた。

『武装機 操縦席』

「あははははーー！」

あたしは武装機の中でモニター越しに交わされている会話がおかしくて、噴き出してしまった。

「Hスティル、もうちょっと礼儀正しくした方がいいよ。」

隣に座っているヨシュアが呆れ顔であたしにツッコミを入れてきた。

『エステル、だつけ？ あなたの事も聞かせてもらひわよ。』

モニター越しからちよつと苛立つたようなミサトさんの声が聞こえる。

とつあえず、あたしたちがいきなり処分される事は無くなつたわね。

『じゃあ初号機と武装機はケージに戻つてくれる？』

あたしはヨシュアと一緒に警戒しながら武装機を降りた。

ケージではミサトさんが待っていた。

「ようじゅ、ネルフク。まあ、司令室へ案内するわ。」

アスカとシンジも合流して一緒に司令室への廊下を歩いて行く。

あたしたちに不信感を『えな』ようにするためか、ミサトさん以外の姿は無い。

「加持さん。隠れてないで出てきたらどうですか？」

ヨシュアが物陰に向かつて声をかけると、物陰から無精ひげの男性

加持さんが出て来た。

「いやあ、気配を消したのに気づかれるとは、君は何者だい？」

「ただの元暗殺者ですよ。」

ヨシュアがニシコリ笑つて答えるとミサトさんは悲鳴を上げた。

「ぎょえええ、暗殺者！？」

「ミサトさんの旦那の加持さんも似たような仕事してるんじゃない？」

「ぎょえええ、加持が旦那！？」

あー//サトさんが、完全に固まつてしまつたわ。

『ネルフ 碇ゲンドウの部屋『司令室』』

「盗聴器と監視カメラの類はここに無い。安心して話してくれたまえ。」

副司令がそう言つと、今まで質問をしたくてウズウズしていたリツコが早速発言をする。

「じゃあ、まずはソニー一人がなぜ戦闘機を動かせるのか教えてもらいましょうか。

なんなら、あなたたちを検査してもいいのよ。」

「エスティルに触るな…。

もしも、変な実験でもしてみる…。

ありとあらゆる方法を使ってあなたをハツ裂きにやる…。」「ひいい。

ヨシコアに睨まれたリツコが悲鳴を上げた。

「じゃ、じゃあなぜエヴァンゲリオンが改造されているのかしら?」リツコは質問の矛先を変えたようだ。

「例えば、戦車に運転手と砲撃手が存在するより、ひとりが防御、もう片方が攻撃に専念できる。

回避行動に集中しながら魔法の詠唱に集中することができるのは、ひとり乗りより合理的でしょう?」

もつとも、アタシたちみたいに気持ちが通じ合つてこないと乗りこなせないけど。ねシンジ?」

アタシはシンジの腕に自分の腕を絡ませながらそう話した。

「誰が、そんな改造をしたのかしら。」

「それは私たちよ。」

アタシたちがその声が聞こえた入口の方に視線を送る。

「コ、コイーーー!」

碇司令は椅子を蹴飛ばして立ちあがり、凄い勢いでコイさんの元に駆けつけたわ。

でも、コイさんは抱きついた碇司令に平手打ちを喰らわせた。

「ゲンドウさん!今までシンジやリツコたちに酷いことをした

事を反省しなさい！」

「すまない。」

「じゃ、許す。」

と言つてユイさんは背伸びして碇司令にキス。

司令室の中は凍りつく人、睨みつける人、反応は様々だつたわ。

＜編集カット部分＞詳しく述べるページの一一番下を「」ご覧ください。

『第三新東京市 コンフォート17』

飛ばされた世界の事とか、新しくなったエヴァの説明は母さんに任せて、ボクたちはミサトさんの部屋から引っ越しをしていた。
ボクはエルフに戻つて来た日から、アスカと二人暮らしをするようになつたけど、寝るとき以外は結局、以前カシウスさんの家で暮らしていたように四人で居ることが多かつた。

アスカは父さんに頼んで、リビングの壁をぶち抜いて一つの部屋にしちゃうし。

でも、カシウスさんに拾われた十四歳の頃と違うのは、アスカの側に居るのがエスティルじゃなくて、ボクって事かな。

「シンジ。ハンバーグ食べさせて。あーん。」

ボクはハンバーグを切り分けて、息を吹きかけて冷ましてからアスカの口に運んあげる。

「ねえ、アスカ。どーしてあたしたちの前でそう言つ事するのよ。」「バカね。エステル。見せつけるために決まつてるじゃない。二人きりでやるより、

誰かの視線を感じていた方がテンションが上がるのよね。」

「アスカ。恥ずかしいよ。もしかして、そういう趣味……。」

「シンジ、それ以上は言わない方がいいよ。」

「そ、そうだねヨシュア。」

「エステルも、来週から高校に通うようになつたら、他の女がヨシユアにちょっとかいを出さないよつて、たつぱりと見せつけてやりなさいよ。」

「そ、そうかな……。ヨ、ヨシユア。」

「はい、エステル。口を開いて。」

「うん、……おいしい。」

ボクたちの夕食の食卓には、巨大なハンバーグが中央の大皿に乗せられるのが定番になつた。

ゆっくりと時間をかけた夕食が終わつた後、一人でソファーに腰かける。

アスカはボクの肩にそつと頭を乗せていた。

向かい側のソファーに目を向けると、ヨシユアもエステルと肩を寄せ合つて居た。

ボクたちは特に喋らなかつた。体がそつと触れあつてているだけで幸せだ。

「あ、お風呂が沸いたみたいね。エステル、行こう。」

アスカとエステルがバスルームに行くと、部屋にはボクとヨシユアが取り残される。

ボクは煩惱を抑えながら夕食の後片付けをする。

「アスカって、スタイルいいし可愛いし。あたしが男だつたら絶対惚れてたね。」

「エステルだつてさ……。」

バスルームから二人の話声が聞こえてくる。大きな声で話さないで欲しいな。

ヨシユアも読書をしているけど、あまり落ち着いていないみたいだ。

「シンジ、お風呂空いたわよ。」

アスカはお風呂上がりにバスタオル一枚というスタイルで、ボクを挑発してくる。

最近はエステルも影響を受けたのか、同じ服装で……。

でも、本当はバスタオルの中は寝巻に着替えている事を知つてゐる。

でも、万一何も着てなかつたら……。ヒルモ温泉の時の事を思い出すと興奮してしまう。

「アタシの体、ナマで見てみる? あはっ、一回見せちゃつたんだつけ。」

ボクは顔を真っ赤にしてバスルームに駆けていく。

残つたヨシュアはもつと我慢させられるんだろうね。ごめん。

「じゃあシンジ、おやすみのキス。」

キスが終わると、アスカが先にベッドに入つて、ボクを隣に招き入れる。

昔はエステルが悪夢にうなされるアスカを抱きしめて寝ていたけど、こつちの世界に戻つてきてからは、ボクが隣で寝ている。

もう悪夢は見なくなつたけど、寂しいから、だつてさ。

ボクとアスカはキス以上の関係にはまだ行つていない。

でも、アスカが隣に居ると、ボクはドキドキしてなかなか眠れない。

「うにゅー シンジイ。」

寝言なのか、そう言つてアスカがボクに抱きついてくると、アスカに嫌われてしまふんじゃないかという不安はすつきり消えて気持ち良く眠れるんだ。

『日本重化学工業共同体 松代試験場』

次の日の朝、松代で第十三使徒バルディエルがジエットアローン改に寄生したつて一報が飛び込んできた。

ボクたちはエヴァに乗り込み、飛行モードで松代に向かつた。

ボクたちが到着すると、巨大ロボット『ジエットアローン改』は突然、腕を伸ばしてきた。

間一髪A・T・フィールドを開いて、腕の攻撃を弾き飛ばす。

『シンジ君。ジエットアローンの本体に強い衝撃を加えると、爆発する恐れがあります。』

発令所にはミサトさんもリツコさんも居ないので、マヤさんがモニターに映し出されている。

『ジェットアローン改をエヴァ両機で持ち上げ、飛行して上空高く爆発させるというのが今回の作戦です。』

『君たちにばかり危険な任務を押しつけて、すまんな。』

『炉心融解まで後二十分！』

『シンジ！ 防御は任せるわ！ アタシはアイツの肩を捕まえる！』

ボクの乗る初号機は伸びるジェットアローン改の腕に腕をA・T・フィールドの上からつかまれてしまった。

高圧電流が放出されたけど、A・T・フィールドのおかげでダメージはない。

アスカは攻撃をものともせずに突き進んでいく。エスティルの操る式号機と一緒に。

ジェットアローン改の肩をつかんだ時には敵の腕は根元から折れてしまっていたけど、

危険な本体が残っている事には変わりはない。

「よーし、持ち上げるわよ！ 飛行モードに移行。」

だけど、ジェットアローン改は全く浮上しなかった。

「な、なんで持ちあがらないのよ！ エスティル、出力最大にしてるわよね！」

『ジェットアローン改の体重が重すぎる！？』

『仕方ない。A・T・フィールドがあればエヴァは爆発に耐えられる。』

通信スピーカーから流れる父さんの声にボクは頭を殴られたようなショックを受けた。

ミサトさんが、リツ「さんが、周りに居る人たちが一瞬にして消え去ってしまうイメージが頭に浮かぶ。

ボクの頭は悪い思考に支配されて、それ以外何も考えられなくなつた。

SC 第一話 敵はネルフにあり

『日本重化学工業共同体 松代試験場』
碇司令の声が聞こえた途端、シンジの瞳から光が失われた。

アタシは慌ててA·T·ファイールドを張り直す。

「ボクがダメだからみんな死んでしまう……死んでしまう……」

「シンジ、しつかりしてよ！」

アタシが呼びかけてもシンジは全く反応を示さない。

見ているアタシの方も胸が張り裂けそう。

『戦いには犠牲がつきものだ。諦めろ。』

発令所から聞こえる碇司令の声にシンジの体がビクンと震えて崩れ落ちた。

ああ……これじゃあ使徒を倒してもシンジの心が……これまでなの

……？

『諦めるんじゃないわよ！』

式号機からの通信でエステルの声が聞こえた。

『最後まで、みんなが助かる方法を考えるのよ！

下ばかりみてイジイジしない！』

シンジが体を起こした。

「そうだ……助かる方法を考えるんだ。」

「シンジ！」

目に光を取り戻したシンジを見てアタシはうれし涙を流した。

あーあ。やっぱりエステル姉さんの輝きにはかなわないか。

下ばかり見てないで……下……地下！

「思いついたわ！」

「ええっ、本当？」

「シンジ、エヴァの操縦をお願い。……マヤ、ミサトに連絡して、

パーティー会場に居る人たちをシェルターに避難させて。」

『でも、アスカ。あのシェルターでは爆発にはとても耐えられない

わよ。』

「大丈夫。アタシを信じて。シェルターへの避難が完了したらアタシに教えて。

さあ、シンジ。ジェットアローン改を抑え込むわよ。」

「うん。頑張るよ、アスカ。」

初号機と式号機で両腕の無くなつたジェットアローン改を抑え込む。そして、数分後。

『シェルターへの避難が完了したわ。』

発令所から待ちに待つた通信が入つた。

『マヤさん、車に乗り込んで逃げようと駐車場に向かっている人が居ます。連れ戻すように伝えてください。』

ヨシュアは研ぎ澄まされた感覚から人の気配を感じ取つたようだ。

『……ごめんなさい。今度こそ避難は完了したわ。』

よかつた。ひとりでも死者が出たことが分かつたら、シンジの事だから落ち込むに決まつてゐるわ。

『炉心融解まで後五分。』

『シンジ。アタシは魔法の詠唱に集中するからよろしく。』

初号機から魔力が解放されるのを感じる。

『アースウォール！』

アタシはシェルターを中心とした一帯にアースウォールの魔法をかけた。

この魔法は敵の攻撃を一回だけ完全に防いでくれる。エヴァに乗つてゐるからつてシェルター全体にかけられるとは思わなかつたけど。

その後、ジェットアローンは炉心融解して、パーティーア会場本館や周囲の建物は消え去つたけど、

シェルターは無傷で、救助したみんなに感謝されたわ。

『シンジ、もっと喜びなさいよ、ホラホラ。』

アタシはシンジの腕をつかんで思いつき振り回した。

ちょっとオーバーかもしれないけど、子供のように喜んで見せた方

がシンジは嬉しいと思うから。
ご褒美よ。ご褒美。

《式号機 操縦席》

ジョンストアローン改の事件以降、シンジは初号機に乗る事を拒否している。

碇司令に言われたことが堪えていようだ。

『シンジ。私の立場も分かってくれ。』

『そうよ、シンジ君。あれは仕方がないことだったのよ。』

発令所ではミサトさんや碇司令が懸命に説得をしている。

『ミサトさんだって、使徒に取りこまれたアスカを見捨てようとしちたくせに…』

やれやれ。シンジは吹っ切れたと思つたのにまだ拘つているのか。意外と頑固だな。

「僕はあの爆発で赤の他人を助けようと全然思わなかつた。」

僕は式号機の通信マイクに向かつて、発令所に聞こえるように話しかける。

隣に座つているエスティルに視線を送る。

「こういう時、自分がたまらなく嫌になる。人として不完全じやないか、

心のどこかが壊れているのかもしれない。いや、すでに壊れていて人形なのかも…。」

エスティルはコンソールを激しく叩いて怒つて叱り飛ばした。

「そんなことない！この五年間、あたしはヨシュアの事をずっと見てきた！

良いところ、悪いところは誰よりも知つている自信がある！

たぶん、ヨシュア本人よりもね！あたしを差し置いて、勝手な事いふんじゃないわよ！」

『そ、そうだよ！ヨシュアは人形じゃない。ひとりの人間なんだ。』

発令所からシンジの慌てた声が聞こえて来た。もうひと押しだね。

「じゃあ、碇司令やミサトさんも同じ痛みを感じていいわけだよね。人間だから。」

『あつ。』

『ヨシュアも人が悪いわね。一年前と同じ場面を再現してシンジを騙すなんてさ。』

「あたしも危うく騙されるところだつたけど、成長したものね。」

「調子に乗らないの。」

エスティルにツツコミを入れたとき、僕は邪悪な気配が近づいているのを感じた。

「ミサトさん、北東の方向から敵が近づいてきます！」

『使徒！？レーダーに引っ掛けからなかつたの？』

でも、ヨシュア君のおかげで絶対防衛線は突破されずに済みそうだね。』

「さあ、シンジ。一人の愛の力で使徒を倒すわよ！」

アスカとシンジは元気に初号機に乗り込んでいった。

使徒ゼルエル戦はあつさりと決着がついた。

僕たちのA・T・フィールドは破られなかつたし、使徒のA・T・フィールドはあつさり中和されて、

固い装甲に守られていたコアも式号機の一突きで粉砕。

S2機関も動力がセプチウムの新エヴァには必要なかつた。

『第三新東京市 焼き肉チエーン店 角』

使徒を倒したあたしたちは、ミサトさんとリツコさんに連れられて焼肉屋に入った。

でも座席はあたしたち四人組とミサト・リツコ組とは別。

「ねえ、シンジ。この肉が良い具合に焼けているわよ。あーん。」

ゴックン。

「ア、アスカ。アスカはタン塩が好きだつたよね。はい、あ、あーん。」

ゴックン。

シンジもちょっと照れがあるけど、アスカの求めに応じていろみたいね……。

あたしの前に肉が差し出された。

パク。

あたしはヨシュアのつかんでいる肉を食べてあげた。

「えーい、お返し！」

「ごほつ、H、エステル、一時に何枚も口には入らないよ。」

「どーだ、参ったか。」

「勝ち負けの問題じゃないと思うんだけど……。」

あたしがヨシュアに肉を食べさせて満足していると、視界の隅にとんでもない光景が飛び込んできた。

「シンジ。頬っぺたにご飯粒が着いちゃった。取つて。」

シンジが手を伸ばして取ろうとすると、

「まだ分かつてないわね～。口で取つて、く・ち・で！」「う、うん……。」

そう言ってシンジはアスカに顔を近づけていつて……。ペロリ。

「はは、あそこまでとは参つたね。エステル。」

ヨシュアはそう言って、あたしの指先についたご飯粒を眺めている。

「ばれてるか……。」

《第三新東京市 ハンフォート17》

僕たち四人が焼肉屋で食事を終えて公園の前を通りかかると、公園の中から僕たちを探るような視線を感じた。

「そこに隠れている人。出てきてください。」

すると、学生服を着た青い髪の少女が出て來た。確か……綾波レイさん、だつたかな。

「私は私の碇君を取り戻しに來たの。」

「綾波！？」

「碇君。私と心と体も一つになりましょう。それはとても気持ちの

いいことなのよ。」

「な、なにを言い出すんだ……。」

「碇君は私に笑って欲しいって、優しい言葉を掛けてくれたわ。」

「私の部屋で私の裸を見た。そして倒れかかって来た。本当の事よ。」

「そつか、シンジは誰にでも優しいんだよね。ファーストにも手を

出していたんだ。」

「アスカ！アスカーー！」

アスカは泣きながら走り去ってしまった……。

SC 第二話 幸福な死を、カオル君に。

《第三新東京市 コンフォート17》

「……どういふこと？」

アスカが走り去つた後、あたしたちはシンジに詰め寄つた。

「綾波が誤解させるような言葉を言うから悪いんだ。

押し倒したつて、あれはつまづいただけだし、ボクが来る前から裸で居たじやないか。」

シンジの話を聞くと、綾波つて子は起こつたことの大半を省略して、

自分の都合の良い部分だけを断片的に喋つただけみたい。

「アスカ、覚悟しなさいよ！首根っこを掴んででも絶対にシンジと仲直りさせてやるんだから！」

あたしはアスカが走り去つた方向を見つめて、拳を握りしめた。

アスカは公園の裏山の林の中に居た。

「ゲゲ、エステル！何でここがわかつたの？」

アスカはあたしたちの姿を見つけると逃げようとした。

「こら、待ちなさい！」

「僕から逃げる事は出来ないよ。」

「ヨシュア、するい。」

ヨシュアがアスカの逃げ道に先回りしたみたいだ。

あたしたちはアスカを連れて、家に戻つたんだけど……。

「嫌。いくら好きついわれても信じられない。」

「アスカ……。」

「触るな、バカシンジ！」

アスカはずつと部屋に籠りっぱなしになつた。

あたしたちは、すっかり輝きを失つてしまつた。

いつも前向きなあたしも、今回ばかりは堪えたわ。

『ネルフ 発令所』

衛星軌道上に第十五使徒アラエルが出現したから、アタシは否応なく部屋から引っ張り出されて、ネルフの発令所まで連行された。

初号機はアタシが心を閉ざしている状態だから出撃を見合わせ、式号機が超長距離攻撃で倒すことになった。

だけど、攻撃は使徒のA・T・フィールドに阻まれて効かなかつた。飛行モードに移行して、接近して使徒を倒すことになつたけど、エスティルが悲鳴を上げて、式号機はコントロールを失つて墜落してしまつた。

どうやら、エヴァが飛行した頃に使徒から光線のようなものが照射されて、

エスティルは精神的なダメージを負つたらしい。

『式号機の回収、急いで！』

式号機が回収された後、使徒からの攻撃は収まつたみたい。

「どうしよう。あたしの心中、ヨシュアに知られちゃつた。」

エスティルは明るさの中に隠していた心の傷、

自分の身代わりになつて時計台のがれきの下で死んだお母さん、レナさんの事をアタシ以外の人には話していないけど、ヨシュアに知られてしまつたらしい。

「使徒の攻撃は精神的なもので、A・T・フィールドでも防げないようだな。」

「式号機をメイン操縦していたエスティルだけが精神汚染を受けたようです。」

冬月副司令とリックがぼそぼそと喋つている。

「エヴァ一機のうち、片方が使徒の攻撃を受けている間に、もう片方が使徒のA・T・フィールドを打ち破る作戦でいくぞ。」

「ああ。問題無い。」

「でも、エスティルちゃんは大丈夫なの？」

『あたしは、もう大丈夫……。ヨシュアは、暗いあたしも受け入れ

てくれたから。』

式号機からエステルの落ち着いた声が聞こえる。

「初号機は……でられるのかしら。」

ミサトが腕組みをしながら呟いた。

「囮役は、ボクにやらせてください！」

シンジは大声でそう宣言した後、俯いているアタシに声を掛けた。

「……アスカ、ボクと一緒に初号機に乗つてほしいんだ。お願ひだから。」

『初号機 操縦席』

アタシは黙つてシンジの後ろから初号機に乗り込んだ。

「さあ。使徒！ボクの心を覗くなら覗け！隅々まで！」

使徒の体から光線が照射される。

シンジの心がアタシの中に入つてくる……。

絶対に離さない、アスカを見捨てるなんてできないよ！

アスカの笑顔も眩しかった。蒼い瞳が輝いて。最近見てないな、アスカの笑顔。また見たいな。

太陽だね！？ボクの太陽を奪いに来たのか！

アスカはボクの心を輝かせる太陽なんだよ……。

アスカが撃ち殺されるなんて嫌だ。アスカを守りたい守りたい守りたい守りたい守りたい。

これは誓いのキス。ボクとアスカが婚約したって事だよ。

シンジはアタシの事、こんなに思つていってくれたんだ。

嬉しさのあまりアタシは座席を乗り越えて、シンジに抱きついてしまっていた。

「シンジ……信じてあげられなくてごめんね。それよりも嬉しい、嬉しいのよ！」

「アスカ……こんな方法で伝えてしまつてゴメン。でも、ボクもほ

つとしたよ。」

その後、式唱機がロンギヌスの槍を投げて、使徒は殲滅された。

《第三新東京市 コンフォート17》

使徒を倒して、あたしたちは家に戻ったんだけど、

綾波さんもシンジに付きまとつて、家まで来てしまつていた。
あたしたちは綾波さんをリビングに案内して、ゆっくりと話し合つ
することにした。

「綾波。一方的な思い込みを押しつけるのはダメだよ。」

「碇君が私に優しくしてくれたことは、本当じゃないの？」

ヨシコアが割つて入つて綾波さんに話しかけた。

「愛には一種類の愛がある。他人に与える愛と、自分のための愛。
シンジが綾波さんにあげた愛は、前者の方、慈愛の心だと思うよ。」

「私は碇君が求める存在にはなれないというの。セカンドとは違う
というの。」

「綾波さんの気持ちもわかる。愛とは抑えられない感情だから。
きっと、すぐにでも綾波さんの愛を受け取ってくれる人が現れるは
ずさ。」

「私はもうエヴァのパイロットとしての価値が無いの。
こんな私の愛を受け取ってくれる人なんていない。」

綾波さんは涙を流しながら暗い顔をして俯いてしまつた。

ピンポーン。玄関のチャイムが鳴る。ドアが勝手に開くと、
第壱中学校の制服を着た銀髪で赤い目をした男の子が入つてくる。

「こんばんは、みなさん、お揃いだね。」

「あなた、私と同じ感じがする。何故？」

男子にいきなり腕をつかまれた綾波さんは顔をあげて問いかけた。

「俺はフォース・チルドレン、渚カオル。君と同じ造られた存在さ。

「私が造られた存在……？」

「君は第一使徒リリスの魂を肉体に封じ込めるために、碇ヨイ博士

の遺伝子を使って造られた存在。

俺は第一使徒アダムの魂を肉体に封じ込めるために造られた存在。

……第十七使徒タブリス。」

渚君は、ひとりだけ冷静なヨシュアを見て、興味を持ったのか、視線を向けて話しかけた。

「おや、君は俺が来るつてことがわかつっていたのかい？」

「うん、いつも感じている使徒の気配がしたからね。」

渚君は納得したように軽くうなずいて、こう言つた。

「俺は自分の意思で、君たちに殺されに来たのさ。」

「なぜ、力オル君が死ななくちゃならないんだよ！ 同じ人間なのに！」

シンジが身を乗り出して叫ぶように言つた。

「俺たち使徒と君たちリリンはどちらかしか生きられないらしいよ。俺にとつて生と死は等価値なんだ。君たちが生き延びるために、殺してくれ。」

「私も渚君も死ななければいけないの……？」

綾波さんはまた赤い目から大粒の涙を流している。

「アンタ、バカア！？ 何でそうなるのよ、納得できる理由を説明しなさい！」

アスカが渚君を指差して詰問をする。

「なぜつて……ゼーレの老人たちがそう言つてるし……はは、疑つたことすらなかつたな。」

「アンタ、底抜けのバカね。いいわ、死刑執行人、惣流・アスカ・ラングレーが、

綾波レイと渚力オルに死を与えるわ！」

「ア、アスカ。人殺しなんて止めてよ！」

シンジがアスカに駆けよつて必死の形相でアスカを引っ張っている。

「アタシが言つてるのは、レイと渚が婚約するつてことよ！」

「婚約！？」

「そ。結婚は人生の墓場つていうじゃない！ これでアンタたちは死

「なんだのよー。」

「そうか、俺は死んだのか。もつ俺はリリンに仇なす存在じゃないんだね。」

渚君は凄い無垢なんじゃないかとあたしはため息をつきながら思つた。

「パンパカパーン！」このアタシが婚約初心者のアンタたちにありがたい講義をしてあげるわ。」

アスカは、綾波さんと渚君を隣り合わせに、あたしとヨシコアに近づくよう、「そしてシンジを手招きした。

「じゃあ、ファースト、ううん、ユイママの子供ならアタシの妹だからレイって呼ぶわね、準備はいいわね。」

「はい。アスカお姉ちゃん。」

アスカは出前で取ったピザを一切れ、シンジの前に持つて行つて、渚、ピザをレイの口の前に持つて行つて、あーん。と言つた。

「こ、こうかい、惣流さん。」

「まあ、初めてにしては筋がいいわね。」

「リリンの行動には興味深いものがあるね。」

「さあ、次はキスの練習よ！キスをするときは、鼻息がこそばゆくならないようにな。」

「じゃ、Hステルにヨシュア！お手本を見せるのよー。」

「あうあう。アスカとシンジ以外に見られるのは恥ずかしいよ。よ。」

あたしがとまどつていると、ヨシュアがあたしの唇を奪つた。

アスカはシンジの唇を奪つていた。

「行くよ、レイ君。」

コクリ。

綾波さんは黙つてうなづいて唇を重ねた。わずかに触れ合つだけのキス。

「……なんか、唇と胸が熱くなってきたわ。」

「さうよ、レイ！それが恋なのよ。さあ、復習よ、もつ一回ー。」

『ネルフ 発令所』

ネルフでは、コンフォート17にパターン青が検出されパニックになっていた。

発令所から連絡を受けたアタシが渚のヤツに相談したら、渚のパターン青の反応が消えたみたい。

そういえば、表向きはフォースチルドレンとしてネルフに来たんだから、

普通の人間としても振る舞えるわよね。

「第十七使徒タブリスはコンフォート17で殲滅したとゼーレには報告する。」

レイと渚と一緒に来たアタシたち四人は、レイと渚が一人でエントリープラグに入れば、零号機でもアタシたちと同じように攻撃と防御が同時に出来るようになるから、

エヴァ零号機のレギュラーへの復帰を宣言された。

アタシたちはレイと喜びを分かち合つたわ。

その時、第十六使徒アルミサエルが出現し、警報がネルフに鳴り響いた。

さつそくデビューした零号機が偵察行動に出る事になった。

「レイ、帰つたら婚約者講座の続きよ！ 次はポッキーだからね！」

アタシは出撃していくレイに元気に声を掛けた。

『初号機 操縦席』

第十六使徒アルミサエルは出現した後、環の状態で上空に漂つているだけだったけど、

零号機が出撃すると形を変えて、その矛先を零号機に向けた。使徒は零号機のA・T・フィールドを突き破つて、零号機に食い込んだ。

『使徒と零号機の物理的融合度、9・7%！』

オペレーターのマヤさんが警告の声をあげる。

ボクとアスカは顔を居合わせて、零号機救出のための出撃準備を待つた。

『大丈夫です。碇司令。問題ありません。』

『そうか。それならば初号機と式号機はそのまま待機。』

「父さん！？綾波たちを助けないの！？」

ボクは驚いて抗議した。

『レイと渚君には何か考えがあるようだ。やらせてみよ。』

『零号機の方から使徒に干渉している模様です！浸食率が増大しています！』

『まさか！零号機が使徒を取り込もうとしているの？』

『アルミサエル、あなたも寂しかったのね。いいわ、私たちと一緒にあります！』

『俺たちのエヴァと一つになろう。』

零号機のエントリープラグから綾波とカオル君の優し声が聞こえてくる。

『使徒のパターン青、消失。零号機との融合を果たした模様です。』

『零号機がS2機関を有することになるとはな。』

『ああ、これでユイの計画の実行可能性が高まつた。サーディンパクトは確実に起こさねばならん。』

最後の使徒が居なくなつた。いよいよ最終決戦だ。

ボクは激しい胸の高鳴りを感じた。

SC 最終話 明るい未来のための逆行

『ネルフ 作戦会議室』

第十六使徒アルミニサエルが倒された直後、アタシたちやネルフの幹部クラスの関係者は作戦司令室に召集された。

集まつたメンバーには誰一人例外無く緊張感が漂つていて、全員集まつたのを確認すると、碇司令が口を開いた。

「どうとづ、死海文書に記されたすべての使徒が倒された。」

「ゼーレはきつと渚君を始末するとともにサーディンパクトを起こそつとここに量産型エヴァを送り込んでくるはずだ。」

「我々は、潜水艦に乗り込み、サーディンパクトを利用して一年前の並行世界 リベル王国、ヴァレリア湖の湖底に跳躍する。」

碇司令と冬月副司令の説明に声を挟む人は居なくて、みんな必死に耳を傾けていた。

「ここにいるメンバーには、シンジ君たちが使徒レリエル戦から帰還した後にその概要を伝えてはいるが、

向こうの世界へ跳躍したものは、一度とこちらの世界へ戻れない。また残念ながら同じ世界に同じ人間が存在することはできない。」

「あれからこちらの世界に残りたいと気が変わった者は、辞退することもできる。恥ずべきことではない。名乗り出たまえ。」

碇司令のこの言葉に、辞退を名乗り出る人は居なかつた。

「葛城君。やはり君はリベル王国に行つてくれるのかね。」

「はい。副司令の分まで責務を果たす所存です。それと……姉としてシンジ君とアスカに誠意を示す最後のチャンスですから。」

「IJの加持リヨウウジも同じ気持ちです。」

「技術面では私がサポートします。」

「せうか……では私が行く必要は無いな。葛城君でも大丈夫だ。」

「あなた?」

「イさんは碇司令のこの発言に驚いて目を丸した。

アタシも同感だった。何を言い出すんだろう?

「私は傷つける事しかできなかつた。今まですまなかつたな。」

そう言って碇司令はこめかみに銃を当てた。

司令が銃の引き金を引く……。

でも、その時銃声が響いて、司令の手から銃がこぼれ落ちた。

「司令ー。」

「銃が暴発したのか！？」

「シンジ君ー？」

シンジがいつの間にか銃を抜いていた。

「右手だけを狙つて打つたのか！」

「腕をあげたな、シンジ君。」

「父さん。今度こそ、死んだ気になつて協力してよ。」

「ああ……問題無い。」

「そうよ。悪党を騙せるのは、悪人面している司令しかいないわよ。」

「調子に乗るんじゃないの。アスカ。」

ヨシュアはこつそりと司令の背後に忍び寄つて居たみたいだけど、出番が無かつたわね。

作戦会議室は、別れを惜しむ人たちの声で満ちていた。

「シンジ君。アスカ。今度こそ本当にお別れね。」

ミサトが涙を浮かべて近づいて来た。

自分の将来の人生を捨ててまで別世界に行くのだから、今度こそ偽善では無いと信じたい。

アタシは素直にミサトに抱きしめられた。

「向こうに言つたら加持のヤツと仲良くなれる」といふ。……もつとも、あいつが浮気しなければの話だけね。」

「ミサトさんたちなら大丈夫ですよ。ボクたちに恋の結晶を見せてもらひたし。」

「赤ん坊をダシにしてアタシたちを説得するんだもの。……もしかして、もう妊娠しちゃつてるんじゃないでしょうね。」

「あはは……シタ」とはあるけど、まだ妊娠はしてないと思つわ……。」「

「まつたく、ズボラなんだから。」

「……ガサツもでしょ。」

「あーら、いつの間にかエスティルちゃんとヨシュア君も来てたのね……キツイツシロミね。」

「うして、ミサトをからかいができるのもこれが最後か……。」

アタシがそんな事を考へていると、ナルフに警報が鳴り響いた。

「ゼーレが動き出したか。跳躍するメンバーは、ただちにセントラルドグマの潜水艦にむかえ。」

「オーバー・ザ・レインボウ艦長！」

ミサトさんは作戦会議室に入つて来た人影を見て声をあげる。

「ネルフには艦隊司令の経験者がいないとのことでな。ワシが引っ張り出されたわけだ。

まさか虹だけではなく次元まで越えるとはおもわなんだ。」

ネルフ本部は慌ただしくなつた。発令所に向かつのは冬月副指令、コイさん、オペレーターのメガネとロン毛。

それ以外のネルフ幹部は職員を伴つてこぞつて潜水艦に乗り込むみたいだ。

『初号機 操縦席』

『日本政府よりA - 801が発令されました。』

『ネルフの特例による法的保護の破棄及び指揮権の日本国政府への委譲です。』

『よし、作戦どおりセントラルドグマに通じる隔壁を全面開放。敵を招き入れる。』

『MAGI、ハッキングを受けています。』

『防壁を開けます……ダメです、乗つ取られました！』

青葉さんの叫び声の直後、モニターに、バイザーを着けた白髪のお爺さんが大写しになる。

『「Jもげんよつ、 ネルフの諸君。 潜水艦に乗つて逃げ支度かね。』

MAGIが支配下に置かれているので、Jから返事は出来ない。でも、空調などはそのまま動いているようだ。

『セントラルドグマを開放して、ゼーレに降伏の意を示すつもりだつたのかな？まあいい、命だけは助けよつ。

そこで新たなる人類の指導者の誕生を見ているがいい。』

モニターに白いエヴァンゲリオンが空中を移動している姿が映し出された。

『我々ゼーレによる人類補完計画の遂行。その隠れ蓑としてネルフは役に立つてくれた。もう役目は終わつた。』

『だ、 そうですよ、 みなさん。』

『なに、 それはどういうことだ？』

モニターのお爺さんが振り返り、移動したカメラの視線の先にはカシウスさんが悠然と立つていた。

『Jの会話は世界中のモニターに映像と音声が配信されていると
ことです。

繁華街のモニター前などでは、貴方の姿にたくさんの人々が足を止めているでしょうなあ。』

モニターの向こうでは銃を突きつけられて囮まれているゼーレの幹部たちの姿が映し出されていた。

『キール・ローレンツ。民間人の平和を脅かした罪により拘束する。』

『まったく、父さんたらおいしいところばかり毎度毎度もつっていくんだから、納得いかない！』

『まあ、気持ちはわかるよ。』

『号機からエスティルとヨシュアの声が聞こえる。とにかくとは、機能が回復してきているのかな？』

『ふふふ。MAGIが無くても、私達にはカペルがある！』

エリカさんが自信満々に宣言する。

そういうえばエリカさんもラッセル博士も、反対を押し切つてリベル王国から着いて来た（多分好奇心だろうけど）けど、

今まで本編では出番が無かつたから、うつぶんが溜っていたんだろう……ん、本編とか出番って何だろ？

カペルのサポートによってMAGIはコントロールを取り戻していく。

『日本政府より、A-801が撤回され、Z-801が発令されました。』

『ゼーレの特例による法的保護の破棄及び組織の即時壊滅の作戦コードです。』

『おのれ、貴様の仕業か、カシウス・ブライター。』

青葉さんと田向さんの報告を聞いたキールはモニターの向こうで悔しがっている。

『ヒューアンゲリオン量産機は出撃された。もつ引き返せませんよ。さあ、我々と一緒に奇跡が起こる瞬間を見届けようではありませんか。』

『量産機9機、日本の領空に侵入しました。』

『もうお別れなのね。せつかくあなたたちと心が通じ合えたのに。』

「レイ……。」

ボクの隣に座ってるアスカはとても悲しそうな顔をしていた。

『アスカお姉ちゃん。最後に碇君が太陽のよしだって言つているとびきりの笑顔を私に見せて。』

「グス……でも、アタシ、悲しくて……」

『大丈夫。きっといつかまた会える。そつ信じて、樂しいことを考えて。』

『そうね。今度会った時はまたゆづくおじやべりしまじゅづ。』

『ちゅうと、綾波さん。あたしも居るんだからねづー。』

『「じやあ、ほれほれ、あたしの笑顔を見せてあげよう。ピースピー
ス。』

『エステル、丶サインだなんて……もう子供じゃないんだから。』
「…………アスカ。」

「…………うん、シンジ。」

ボクはアスカと一緒にモニターに向かって精一杯の笑顔をした。

『あなたたちの笑顔を見ると……心がポカポカする。』

「つて、なんでアタシたちの顔が発令所正面の大モニターに映し出
されているのよ!」

『まあいいじゃない。減るもんじゃないし。私も加持も旅立つ前に
良いものを見させてもらつたわ。』

あ、この映像はさすがに世界には送信されてないわよ。ラブレター
が来ちゃつたら困るものね。アスカ』

ネルフ全体に笑い声が響き渡つてる感じがする。最終決戦なのに和
やかな空気。誰もが成功を感じてる。頼んだよ、綾波。

『さて、そろそろ自動行動プログラムによつて制御されている量産
機が本部に着くころだ。頼むよ。』

「クロックアップ改！」（SPD + 50%）

『クレストー！』（DEF + 25%）

『エヴァ 量産機の輸送機がネルフ本部上空、セントラルドグマの直上に到着。量産機の投下が開始されました。』

量産機が着水する音が聞こえる。量産機は零号機以外は相手にしないようだ。零号機を取り囲んで剣を構えている。

『パイロットとエヴァのシンクロを全面カット、急いで！』

『エヴァ、アルサミエル、あなたたちだけに痛い思いをさせてごめんね。』

零号機はコントロールを解かれ、棒立ちになつた。無抵抗の零号機に9体の量産機が攻撃を加えて行く。

さすがに1対9では攻撃をかわしきれない。まだ綾波と力オル君はボクたちのようなA・T・フィールドは使いこなせない。

『ティア・オル！』（HP完全回復）

『ティア・オル！』（HP完全回復）

ボクたちは魔法で傷ついた零号機を回復させながら、零号機の攻撃に夢中になっている量産機にダメージを与えて行く。

「くそ、敵のA・T・フィールドは貫通してダメージを与えられるけど、九体は多すぎる……。」

すると、正面のゲートが開いてロボットが出て来た。

『戦略自衛隊から援軍に参りました、トライデント三機。霧島マナ以下三名が戦闘に加わります。』

ボクと同じぐらいの歳だと思う女の子の声が通信スピーカーから聞こえた。これで少しば楽になる。でもまだ足りない。

すると、さらにゲートの奥から製作者の美意識を疑いたくなるような奇妙なデザインのロボットが九体も出て来た。

『行け！ ジュットアローン改式式たち！』

『時田シロウ博士！？』

『はは、葛城さん、あの時は『迷惑をおかけしました。今度の動力は大型電池です。戦闘も十五分は可能です。』

『ゼーレもアレが兵器だとは見抜けなかつたみたいよ。』

『シンジ……。』

「アスカ！ 落ち込みたいのはわかるけど、今はダメだよ。」

『あははははー！ 前のよつおもしろい形ー。』

『エステル、笑ってる場合じゃないよ。』

足を引っ張りに来たのかな……。

ジエットアローン改式式も、エヴァ量産機にダメージを『えられる威力の攻撃ができるみたいだ。ムチによる電撃攻撃。

零号機に対する攻撃も中断されて、一石一鳥だつた。一度の大失敗にめげない時田シロウ博士、意外と凄い人なのかも。

ダメージを受けた九体のエヴァ量産機の動きが止まった。

『潜水艦』テロリアン、エヴァ零号機付近に向かつて発進せよー。』

『オーバー・ザ・レインボウ艦長、なんでこの潜水艦の名前をテロリアンに代えちゃったのよ?』

『フン。セカンドインパクト後に生まれた若造にはわからないだろうがな。タイムマシンはテロリアンと決まっているのだ。』

『セカンドインパクト前に放映された映画の影響らしいわよ、ミサト。』

潜水艦やえしお……じゃなかつた、テロリアンはネルフのみんなを乗せて零号機の足元にたどりついた。

『エヴァ量産機、再起動しました!』

装備していた武器を失つた量産機たちの攻撃は零号機のA・T・フィールドで防げると思うけど、用心を重ねて様子を見る事になった。

『量産機から翼のようなものが伸びています。攻撃する気配は感じられません!』

『零号機、再シンク口開始！』

再起動を果たした零号機の通信モニターが復活した。綾波とカオル君は悲しいのを我慢してボクたちに笑顔を見せている。

『……これ以上通信をしていると、泣いてしまいそうだから、切るわ。……さようなら、碇君、アスカお姉ちゃん。』

エヴァ零号機は潜水艦デロリアンをそつとつまみ上げると、はりつけにされていた白い巨人の元へ歩いて行く。

量産機も遠巻きにそれについていく。

零号機の手が白い巨人に触れると、両方とも早い速度で上昇していく。量産機も周りを取り囲む形で飛びはじめた。

そしてその姿が豆粒のように小さくなつて行つて……見えなくなつた。

『エヴァ零号機、量産機、潜水艦デロリアン……。すべてのロストを確認しました。』

「零号機が消える瞬間は見れなかつたね、アスカ。」

「綺麗な飛行機雲……。」

青空には、エヴァ零号機と量産機の軌跡が十筋、刻まれていた。

これで、一つの世界を行き来したボクたちの物語はおしまい。

これからは、ボクとアスカとエスティルとヨシュアは高校生として第三新東京市で暮らしていくんだ。

まず勉強の遅れを取り戻さないとね。将来の事について考えるのはそれからでも遅くないから。

ボクは料理で人を喜ばせる仕事に就きたいと思つてゐる。漠然とだけどね。

アスカは……どんな仕事に就くんだろう。アスカは頭が良いからいろんな仕事につけるよね。今度聞いてみよう。

SC 外伝一話 アスカとエステルのバレンタイン

『第三新東京市 市街』

暦の上では一月。お店はどこもかしこもバレンタインセールの真っ最中。

アタシとエステルは洋服や小物の店をウインドウショッピングしていた。

「なんで、最近チョコをたくさん売ってるの？」

お店の様子を不思議に思ったのか、エステルが質問してきた。

「バレンタインを知らないの？」

アタシは呆れながらも、バレンタインの事を説明してあげた。

「いいなー、あたし、チョコ食べるの好きだよ。コシュアに作ってもらおう。」

「バカ。女の子の方が作るのよ。」

「えー。面倒だなあ。」

エステルはふくれて答えた。

「ちゅうどいいわ。明日はバレンタインだし、手作りのチョコをつくつましょ。」

アタシはチヨコレートの材料を買つてゐるあたりから、氣づいてしまつた。

そういえば、今までシンジにはチヨコをあげてなかつた。

アタシたちが十四歳の時から一年間暮らしていたリベル王国ではそんな風習なかつたし。

料理やお菓子作りの腕もシンジと一緒に食事当番をしてくるうちにそれなりに上がつて、

シンジにおいしいチヨコを作つてあげられる自信がある。

そして、シンジはあたらしいアタシの魅力に気づくはず……。

でも、シンジと一緒に作つたら驚かす意味が無いわね。シンジたちを家から遠ざけておかないと。

「はいはい。シンジ君とヨシュア君にはネルフで特別な検査と言つてあげるわよ。」

ミサトにはかなり不自然な命令をでっちあげてもうつた。

碇司令まで了解してくれるなんて、『碇アスカ計画』はコイさんの手でかなり進行しているようだ。

あたしたちは、キッチンに入ると早速プロンをしてチョコ作りを開始した。

「どんなチョコを作るので？」

「やつね、ガトーショコラとかはまだアタシにも難しいから、ハート型のチョコにしようか。」

あたしたちは、ハートの型ぬき、オープンシート、ボウル、ゴムべら、包丁、温度計などを用意していく。

「ま、チョコを刻むのよ。」

あたしとアスカは包丁で買った板チョコを刻んで行く。

「次は、湯せんをするわよ。」

「湯せん？」

「刻んだチョコをボウルに入れてかき混ぜるのよ。」

「あー面白そう、あたしもやってみたいー。」

あたしはアスカからボウルを受け取ると、思いつきりかき混ぜた。

「ちよ、ちよっとHスティル、手加減しないで、チョコがしおれちゃうじゃないー。」

「あーあ、チョコまみれになっちゃった。」

チヨ「まみれになつたアスカはあたしからボウルを取り返して、口
ムベりでダマが残つていなか確かめていた。

「エヌステルがこぼしたせいで、量が減つちやつたじやないの。」

「あはは。まだ残つてるからいいじゃん。」

「全く。お湯も入つちやつて、これじゃあテンパリングしても固さ
にムラが残つちやうじやない。」

「テンパリング?」

「チヨ口を滑らかに固める事よ。口コアパウダーをまぶして……、
まあ型に入れるわよ。」

アスカはオープンシートを丸めてコルネを作り、チヨ口を絞り出して型に入れていく。

「ふつ。ギリギリ間に合つたわね。エヌステルがこぼさなければ、も
うちょっと厚く作れたのに。薄っぺらになつちやつたじやないの。」

「すぐ食べられるの?」

「全く。エヌステルは色氣よりも食い氣なんだから。冷蔵庫で固める
の。」

アタシたちもチヨ口まみれになつちやつたし、お風呂に入りました。

「

あたしはアスカと一緒にお風呂でチヨ口を洗い流すと、チヨ口の事

が気になつて、先に冷蔵庫の方へ駆けて行つた。

あたしは冷蔵庫を開けると、自分の分のチョコを取り出して、食べてみた。

「うーん。ちょっと柔らかいところがあつたり、固いところがあつたり……。」

あたしは、隣にあるチョコ口に目を向けた。

「アスカの方はどつなんだる。やつぱり同じかな。……一口だけならいいよね。」

パクッ。

「ああ～！エスティル、何してんのよ～。」

とても怒つたアスカはあたしを殴つた。グーで殴つた。

「なにすんのよ～父さんにも殴られたこと無このに～。」

あたしが怒鳴り返してもアスカはアタシの方を見ていなかつた。

「え～ん。シンジにあげるチョコ口なのによ。」

アスカの宝石のように綺麗な蒼い目から涙があふれ出した。

「う～ん。ごめん、アスカ泣かないで。」

アスカは肩にかけたあたしの手を振り払つて、外に出ていつてしま

つた。

《第三新東京市 後のチルドレン公園》

ボクはアスカが泣きながら家を出ていったとエステルから聞いて、ユニゾンの時にアスカが居た公園へと向かつた。

入口にはミサトさんが立っていた。

「シンちゃん、遅いわよ。アスカなら泣きながら公園に入つて行つたわよ。」

「仮にでもボクたちの保護者を名乗つて居たのに、結局フォローはしないんですね。」

ボクが皮肉たつぱりと笑えると、ミサトさんはバツが悪そうに俯いた。

「あはは。だつて、シンちゃんが慰めた方が画期的……あわわ。

」

……本音はそれかい。

「男の子として、頑張るのよ。」

ミサトさんはまだボクの後ろの方で騒いでいた。

ボクは公園の奥で膝を抱え込んで座っているアスカを見つけて声を

掛けた。

「アスカ、話はエステルから聞いたよ。」

「『ごめんね。シンジ。せっかく恋人になつて初めてチョコをあげるはずだつたのに。』」

参つたな……何と言えばアスカが元気になるかわからないよ。

「おーい。アスカ、シンジ～。」

公園の入り口の方からエステルがこっちに駆けて来るのがみえた。

後ろにはヨシュアが買い物袋を持つて涼しい顔でついてきている。

ヨシュア……ボクの事を尾行したな。

エステルは落ち込んでいるアスカの腕を引っ張つて強引に立ちあがらせた。

「こら、アスカ。材料を集めて来たわよ。バレンタインはまだ明日じゃない。

そう簡単に諦めるんじゃないわよー!」

翌日。ボクはアスカのチョコがもらえて、めでたし、めでたし。のはずだつたんだけど……。

「……で、エステルは自分で食べちゃったんだ。」

「チョコが好きだから、つい……。」

「ヨシコア……。同情するよ……。」

エステルは味見のつもりが全部食べてしまつたらしい。四人分をペロリと。

ヨシコアは冷静に見えるけど、かなり落ち込んでると思つ。エスターの鈍感さを恨むよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1124/>

『僕のアスカ。太陽のような君。』 & 『軌跡の戦士エヴァンゲリオン』セット

2011年11月17日18時01分発行